

東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

—— 1993年度 ——



1995. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

財団法人東大阪市文化財協会と東大阪市教育委員会・東大阪市下水道管理者の間で、遺跡内での下水道工事の円滑化と埋蔵文化財の調査・保存を図るため、平成2年10月に基本協定が締結され、5年度目が過ぎようとしています。これに基き実施した発掘調査の成果は、『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』として毎年刊行してまいりました。

この間、中地区を中心に進められてきた下水道事業も、漸次東地区に広がりつつあります。下水道の普及による住環境の向上と共に、同時に行われる発掘調査によって新たな発見がなされ、文化環境もより充実したものになると思われれます。

本書には平成5年度に実施した8件の発掘調査、試掘・立会調査によって得られた成果がおさめられております。本書が地域史理解の助けとなり、また埋蔵文化財の保護に役立つものとなれば幸いと存じます。

最後に、調査を実施するにあたり、御理解と御協力を賜った市民ならびに関係各位に対して、厚く御礼申し上げますと共に、今後いっそうの御支援を御願い申し上げます。

平成7年3月31日

財団法人東大阪市文化財協会
理事長 清水 行雄

例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪市の委託を受け平成5(1993)年度に実施した下水道管渠築造工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 本書には水走遺跡・池島遺跡・西岩田遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡で実施した8件の発掘調査の概要をおさめた。このうち山賀遺跡第6次調査は前年度に調査を終えているが、若江北遺跡第5次調査と同時着工し担当者も同一者であるため、若江北遺跡の調査終了後のここで報告することとした。このほか前年度からの継続事業として若江遺跡第51次調査があるが、その成果の大半を『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』—1992年度—で報告しているのでここでは割愛した。あわせて参照していただきたい。
3. 各報告は調査担当者が執筆し、分担は以下のとおりである。編集は井上がおこなった。

第1・4章	井上伸一
第2・5・7・8章	金村浩一
第3章	三輪若葉
第6章	松田順一郎
4. 遺構実測の基準には国土座標第VI系を使用し、図中の方位は特に表記のないかぎり、国土座標北を示す。水準高にはT.P.値を用いた。
5. 土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。
6. 本書に収録した遺構写真は各担当者が撮影し、遺物写真は㈱スタジオGFプロに委託して撮影したものである。
7. 調査の実施にあたっては東大阪市建設局下水道部の援助とともに、施工業者ならびに近隣市民各位の御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。調査・整理作業には以下の補助員の参加があった。

石田知弘	石橋健一	井上美由紀	今井喬子	宇田小百合
榎本雅則	太田典明	太田裕樹	大舟美知子	斧憲司
大久畑由美子	上牧香陽	川村正彦	岸田智子	金弘美
樽谷雅幸	小西徹治	杉田敦哉	杉本友美	中馬千鶴
張清美	常田慈	中村好美	原添直樹	福井三貴子
福林利彦	藤井文子	藤田真子	藤本純子	帆足友秀
松山道代	森村誠一			

本文目次

第1章	平成5年度の下水道関係調査について	1
第2章	水走遺跡第12次調査報告	5
1	はじめに	5
2	調査概要	6
3	まとめ	8
第3章	水走遺跡第13次調査報告	9
1	はじめに	9
2	調査の結果	9
1)	層位	9
2)	遺構・遺物	10
3	まとめ	12
第4章	水走遺跡第14次調査報告	13
1	はじめに	13
2	層位	14
3	遺構	16
4	出土遺物	17
5	まとめ	18
第5章	西岩田遺跡第14次調査報告	19
1	はじめに	19
2	調査概要	19
1)	立会地区	19
2)	A地区	19
3)	B地区	20
4)	C地区	20
3	まとめ	20
第6章	池島遺跡第12次調査報告	23
1	はじめに	23
2	調査に至る経過	24
3	調査の概要	24
3.1	調査地点	24
3.2	調査の方法	24
3.3	調査地点の堆積物	24

3.4	遺構・遺物帯	27
3.5	池島遺跡第11次調査地点との層序対比	28
4	まとめ	30
第7章	山賀遺跡第6次調査報告	31
1	はじめに	31
2	調査概要	32
1)	基本層序	32
2)	A地区	34
3)	B地区	35
4)	C地区	36
3	まとめ	36
第8章	山賀遺跡第7次調査報告	37
1	はじめに	37
2	調査概要	37
3	まとめ	38
第9章	若江北遺跡第5次調査報告	39
1	はじめに	39
2	調査概要	40
1)	基本層序	40
2)	A地区	41
3)	B地区	42
4)	C地区	43
5)	D地区	44
6)	E地区	46
7)	F地区	47
3	まとめ	47

挿図目次

第1図	遺跡分布図(S=1/50000)	2
第2図	若江第51次調査風景	3
第3図	水走遺跡第12次調査地位置図(S=1/2500)	5
第4図	水走遺跡第12次土層断面図(S=1/100)	6
第5図	水走遺跡第12次第5層植物層上面遺構平面図(S=1/100)	7

第6図	水走遺跡第13次調査地位置図(S=1/2500).....	9
第7図	水走遺跡第13次足跡面(S=1/40).....	10
第8図	水走遺跡第13次南壁土層断面図(S=1/40).....	11
第9図	水走遺跡第13次出土遺物実測図(S=1/4).....	12
第10図	水走遺跡第14次調査地位置図(S=1/2500).....	13
第11図	水走遺跡第14次調査西壁断面図(S=1/80).....	15
第12図	水走遺跡第14次調査遺構平面図(S=1/120).....	16
第13図	水走遺跡第14次調査出土遺物実測図(S=1/4).....	17
第14図	西岩田14次調査地位置図(S=1/2500).....	19
第15図	A地区位置図(S=1/200).....	20
第16図	B地区位置図(S=1/200).....	20
第17図	西岩田遺跡第14次土層図(S=1/100).....	21
第18図	西岩田遺跡第14次C地区Ⅲ層上面(S=1/100).....	21
第19図	C地区出土土器(S=1/4).....	22
第20図	池島遺跡の位置と調査地点.....	23
第21図	池島遺跡第11次・第12次調査地点の柱状図と層序対比.....	26
第22図	玉串川自然堤防とクレバススプレー.....	29
第23図	山賀遺跡第6次調査地位置図(S=1/2500).....	31
第24図	山賀遺跡第6次A地区土層図(S=1/100).....	32
第25図	山賀遺跡第6次B・C地区土層図(S=1/100).....	33
第26図	山賀遺跡第6次調査A地区第Ⅳ層上面平面図(S=1/100).....	34
第27図	A地区出土遺物(S=1/4).....	35
第28図	B地区位置図(S=1/200).....	35
第29図	C地区位置図(S=1/200).....	35
第30図	山賀遺跡第7次調査地位置図(S=1/2500).....	37
第31図	山賀遺跡第7次調査区位置図(S=1/100).....	38
第32図	山賀遺跡第7次土層断面図(S=1/100).....	38
第33図	若江北遺跡第5次調査地位置図(S=1/2500).....	39
第34図	若江北遺跡第5次調査A地区自然河川上面平面図(S=1/100).....	41
第35図	若江北遺跡第5次調査A地区土層図(S=1/100).....	41
第36図	若江北A地区出土遺物(S=1/4).....	42
第37図	木器(S=1/6).....	42
第38図	若江北第5次B地区位置図(S=1/100).....	42
第39図	若江北遺跡第5次B地区土層図(S=1/100).....	43
第40図	若江北遺跡第5次調査B地区出土遺物(S=1/4).....	43

第41図	若江北遺跡第5次調査C地区土層図(S=1/100).....	44
第42図	若江北第5次C地区E層下面(S=1/100).....	44
第43図	若江北第5次調査D地区出土岩石.....	44
第44図	若江北遺跡第5次調査D地区土層図(S=1/100).....	45
第45図	若江北遺跡第5次調査D地区Ⅶ層下面平面図(S=1/100).....	45
第46図	若江北遺跡第5次調査C・D地区出土遺物(S=1/4).....	46
第47図	若江北遺跡第5次調査E・F地区出土遺物(S=1/4).....	47
第48図	山賀遺跡北東部調査地点(S=1/5000).....	48

表 目 次

第1表	平成5年度下水道関係発掘調査一覧表.....	1
第2表	平成5年度下水道関係試掘・立会調査一覧表.....	4
第3表	水走遺跡第12次調査層序対比表.....	8
第4表	堆積層(単層)の岩質と色調.....	27
第5表	若江北遺跡第5次調査出土遺物一覧表1.....	49
第6表	若江北遺跡第5次調査出土遺物一覧表2.....	50

図 版 目 次

図版第一	水走遺跡第12次調査	1. 植物層上面 2. ピット断面 3. 植物層の凸凹
図版第二	水走遺跡第12次調査	1. 植物層の凸凹 2. 断面上部 3. 断面下部
図版第三	水走遺跡第13次調査	1. 調査風景 2. 南壁土層断面上部 3. 足跡面完掘状況
図版第四	水走遺跡第13次調査	1. 南壁土層断面下部 2. 地震による堆積層の変形 3. 出土遺物 弥生土器 甕
図版第五	水走遺跡第14次調査	1. 調査地近景 2. 西壁断面中部 3. 西壁断面下部

図版第六	水走遺跡第14次調査	1. 溝1 2. 大溝 3. 噴砂
図版第七	水走遺跡第14次調査	1. 伊万里焼椀、瓦器椀 2. 瓦質羽釜
図版第八	水走遺跡第14次調査	1. 瓦器椀 2. ミニチュア下駄 3. 須恵器杯蓋 4. 石鏃
図版第九	西岩田遺跡第14次調査	1. 調査地近景 2. 調査風景 3. B地区断面下部
図版第十	西岩田遺跡第14次調査	1. C地区調査風景 2. ピット断面 3. 出土遺物
図版第十一	池島遺跡第12次調査	1. 落ち込みと中世土器出土層準 2. 出土遺物
図版第十二	山賀遺跡第6次調査	1. A地区中世面 2. A地区弥生面 3. A地区弥生面
図版第十三	山賀遺跡第6次調査	1. A地区断面上部 2. A地区断面中部 3. A地区断面中部
図版第十四	山賀遺跡第6次調査	1. A地区調査風景 2. A地区断面下部 3. A地区断面最下部
図版第十五	山賀遺跡第6次調査	1. B地区調査風景 2. B地区断面上部 3. B地区断面下部
図版第十六	山賀遺跡第6次調査	1. A地区出土遺物 2. A地区出土遺物
図版第十七	山賀遺跡第7次調査	1. 調査風景 2. 調査区全景 3. 断面

- 図版第十八 若江北遺跡第5次調査 1. A地区近景
2. A地区弥生面
3. 流路断面
- 図版第十九 若江北遺跡第5次調査 1. A地区木製品出土状況
2. A地区断面下部
3. A地区断面上部
- 図版第二十 若江北遺跡第5次調査 1. B地区調査風景
2. B地区断面上部
3. B地区断面下部
- 図版第二十一 若江北遺跡第5次調査 1. C地区調査風景
2. 弥生面S.D.01
3. 同断面
- 図版第二十二 若江北遺跡第5次調査 1. C地区杭列
2. C地区断面中部
3. C地区断面下部
- 図版第二十三 若江北遺跡第5次調査 1. C地区断面最下部①
2. C地区断面最下部②
3. D地区断面最上部
- 図版第二十四 若江北遺跡第5次調査 1. D地区断面中部
2. D地区断面下部
3. D地区黑色粘土上面
- 図版第二十五 若江北遺跡第5次調査 1. 開削部調査風景
2. 開削部断面
3. F地区調査風景
- 図版第二十六 若江北遺跡第5次調査 1. A地区出土遺物
2. B地区出土遺物
- 図版第二十七 若江北遺跡第5次調査 1. C地区出土遺物
2. C地区出土遺物
- 図版第二十八 若江北遺跡第5次調査 A. B. F地区出土遺物
- 図版第二十九 若江北遺跡第5次調査 1. C地区出土遺物
2. C地区出土遺物

第1章 平成5年度の下水道関係調査について

遺跡内での下水道工事の円滑化と埋蔵文化財の調査・保存を図るため、東大阪市下水道管理者と東大阪市教育委員会および財団法人東大阪市文化財協会の間で平成2年10月に基本協定が締結された。その後平成4年度までに下水道関係事業として21件の発掘調査を実施し、あわせて多数の試掘・立会調査も行い、毎年その成果を『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』として刊行してきた。

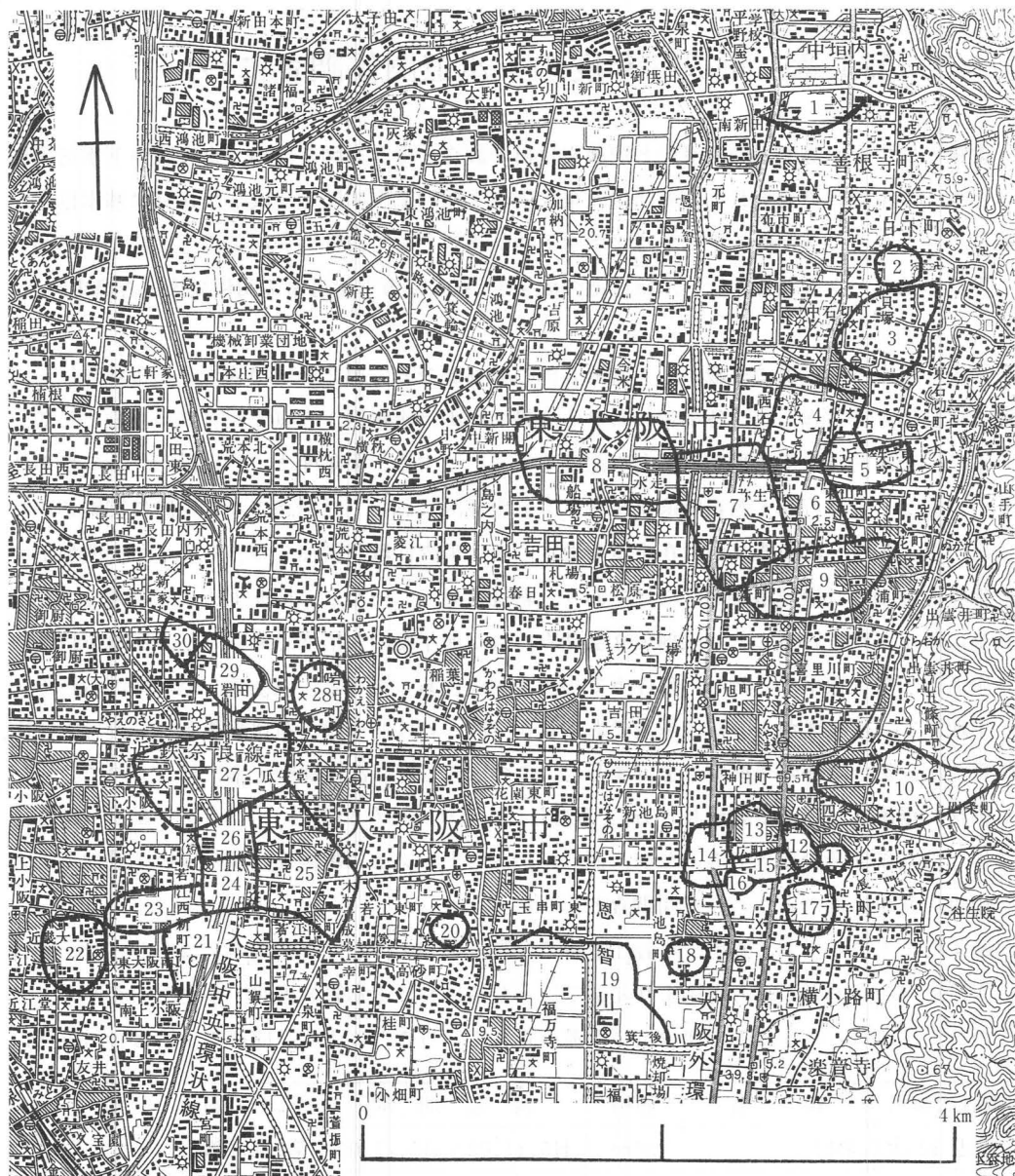
平成5年度は第1表に掲載する6遺跡8件の発掘調査と、第2表に掲載する15遺跡35件の試掘・立会調査を実施した。各事業における成果の詳細は次章以下の概要報告に委ねるとして、ここでは総体的に5年度事業の傾向を記述することとする。前年度までと比較した5年度の凡その傾向として、若江・西岩田遺跡が所在する中地区において発掘調査が集中的に実施されてきたのが、水走・池島遺跡が所在する東地区も漸次調査件数が増加しつつあること、開削工事に伴う発掘調査は継続事業1件だけであり、新規事業はシールド・推進工法の立坑部分の発掘調査に限定されていること、試掘・立会調査件数が前年度の3倍増であること、交通事情から夜間調査・覆工板下での厳しい条件下での調査が3件あったこと、以上の4点があげられる。

中地区では前年度からの継続事業である若江51次、若江北5次、新規事業として西岩田14次、山賀7次、都合4件の発掘調査を実施した。このうち若江51次は開削工事に伴うもので、幅1m前後の掘削トレンチで総延長475mを調査した。それ以外の3件はいずれもシールド・推進工法による立坑部分の調査であったが、西岩田14次のトレンチは車両通行量の多い主要地方道大阪中央環状線にあたるため、夜間調査となった。

前年度までに6事業に着手した若江遺跡では継続事業1件だけで新規事業はなかった。これは同遺跡内の府道大阪東大阪線より北部では、公道における本管の埋設工事がピークをすぎ、代わって私道における枝管の埋設工事が進められていることによる。同様の事情は岩田遺跡に

調査次数名	担 当	面積	調 査 期 間	備 考
水走12次	金村	32㎡	H5.11.02～H5.11.09	第2章に報告
水走13次	三輪	27㎡	H6.01.14～H6.02.10	第3章に報告
水走14次	井上	84㎡	H6.01.18～H6.03.31	第4章に報告
西岩田14次	上野・金村・三輪	61㎡	H5.04.19～H5.04.26	第5章に報告
池島12次	松田・金村	40㎡	H5.11.18～H5.11.19	第6章に報告
山賀7次	金村	13㎡	H6.02.08～H6.02.25	第8章に報告
若江51次	三輪	475㎡	H4.07.27～H5.05.10	年度継続事業
若江北5次	金村	88㎡	H4.11.04～H5.05.28	年度継続事業。第9章に報告

第1表 平成5年度下水道関係発掘調査一覧表



- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| 1 中垣内遺跡 | 2 日下遺跡 | 3 芝ヶ丘遺跡 |
| 4 植附遺跡 | 5 神並遺跡 | 6 西ノ辻遺跡 |
| 7 鬼虎川遺跡 | 8 水走遺跡 | 9 鬼塚遺跡 |
| 10 山畑古墳群 | 11 上六万寺遺跡 | 12 縄手遺跡 |
| 13 五合田遺跡 | 14 北鳥池遺跡 | 15 段上遺跡 |
| 16 下六万寺遺跡 | 17 船山遺跡 | 18 池島東遺跡 |
| 19 池島遺跡 | 20 玉串遺跡 | 21 山賀遺跡 |
| 22 小若江遺跡 | 23 上小阪遺跡 | 24 若江北遺跡 |
| 25 若江遺跡 | 26 巨摩庵寺遺跡 | 27 瓜生堂遺跡 |
| 28 岩田遺跡 | 29 西岩田遺跡 | 30 意岐部遺跡 |

第1図 遺跡分布図(S=1/50000)

も当てはまる。私道における下水道工事に対しても遺跡範囲内のものは、試掘・立会調査で対応し地層観察と遺物採集を行っている。そのため試掘・立会調査件数は前年度の3倍増にのぼることとなった。

東地区では水走12～14次、池島12次の4件の発掘調査を実施した。いずれも推進工法による立坑部分の調査であったが、水走12次は交通量の多い国道308号線の歩道部分にトレンチがかかるため夜間調査、水走14次はトレンチが道路交差点にあたるため、鋼矢板を打設して盛土を掘削した後は覆工板の下で太陽光が遮断された状況で調査を実施した。一般に下水道は道路の地下に埋設されるため、交通事情によってはこれらのような厳しい条件下で調査を強いられる場合もある。

基本協定締結後の過去3年間で東地区における発掘調査はわずか5件にすぎず、5年度のこの地区での調査件数の増加が目立つ。このことは、これまで中地区を中心に進められてきた公共下水道整備事業が、漸次東地区へ移りつつあることによる。大阪府東部流域下水道事務所によって、下水処理の心臓部とも言える新池島町4丁目の新池島ポンプ場が完成し、中石切町7丁目の植付ポンプ場の建設も進んでおり、東大阪市建設局下水道部も大動脈にあたる本管の埋設に本格的に着手しだした。水走遺跡での調査がそれに該当する。今後東地区において下水道本管・枝管の埋設が増加の一途をたどり、これまで本格的な発掘調査がなされていなかった遺跡でその機会を得られるものと思われる。

下水道関係事業の試掘・立会調査も5年度には15遺跡で35件実施した。水走14次は、前年度立会を行い少量の遺物を採集したトレンチと一部重複するため、5年度事業では立坑部分を発掘調査とし、開削部分は試掘の結果旧吉田川内と判明したので立会調査とした。5年度に試掘を行い調査が必要と判断された若江、日下、瓜生堂遺跡では6年度に発掘調査を実施しており、次年度にその結果を報告する予定である。また船山遺跡に隣接する下六万寺3丁目、水走遺跡に隣接する水走2丁目、神並遺跡に隣接する東山町では、現行の遺跡範囲が拡大することはな

いか確認する意味から立会を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。このように試掘・立会調査は、次年度以降の下水道管渠築造工事計画箇所における発掘調査の有無の判断、遺跡範囲の確認作業にとって重要な役割を果たすと言えよう。



第2図 若江第51次調査風景

遺跡名	調査地点	調査期間	担当	調査内容		備考
池島東	池島町4丁目・横小路町6丁目	H5.4.7	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
西岩田	西岩田4丁目	H5.4.8	金村	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
玉串	玉串町西3丁目	H5.4.8	金村	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
若江	若江南町1丁目	H5.4.20	金村	試掘	奈良～近世の遺物出土。	若江56次調査
岩田	西岩田3丁目	H5.5.10	三輪	試掘	2次堆積の遺物採集。	
西岩田	西岩田3丁目	H5.6.8	金村	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
若江	若江本町3丁目	H5.7.12	三輪	立会	遺構・遺物を検出せず。	
若江	瓜生堂2丁目	H5.7.24～25	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
岩田	岩田町6丁目	H5.8.5	木建	立会	遺構・遺物を検出せず。	
若江	若江南町1丁目	H5.9.20	木建	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
岩田	岩田町5丁目	H5.9.22	木建	立会	近世～近代の播鉢細片出土。	
岩田	岩田町4丁目	H5.9.28	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
若江	若江本町3丁目	H5.9.28	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
植附	西石切町2丁目	H5.10.27	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
船山隣接地	下六万寺3丁目	H5.11.16	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
岩田	岩田町5丁目	H5.11.24	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
水走	水走2丁目	H5.11.26～28	井上	試掘	旧吉田川より磁器細片出土。	第4章参照
神並隣接地	東山町	H5.12.2～6	金村	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
岩田	岩田町6丁目	H5.12.3	三輪	立会	須恵器細片出土。	
中垣内	善根寺町4丁目	H5.12.3	金村	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
若江	若江南町4丁目	H5.12.8	三輪	立会	土師器細片出土。	
水走隣接地	水走2丁目	H5.12.10～20	井上	立会	遺構・遺物を検出せず。	
小若江	小若江2丁目	H6.1.20	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
水走	水走2丁目	H6.1.21	井上	試掘	近世以降の土器出土。	
玉串	玉串町西3丁目	H6.1.25	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
日下	日下町2丁目	H6.2.2	金村	試掘	古墳時代包含層を確認。	日下14次調査
山畑古墳群	四条町	H6.2.7	金村	試掘	土師器・瓦器・陶磁器出土。	
鬼虎川	宝町	H6.2.10	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
瓜生堂	瓜生堂1丁目	H6.3.2	金村	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
瓜生堂	若江北町2丁目	H6.3.3	金村	試掘	中世包含層を確認。	
瓜生堂	若江西新町2丁目	H6.3.3	金村	試掘	古墳～中世包含層を確認。	瓜生堂41次調査
若江	若江南町1丁目	H6.3.3～4	木建	試掘	土師器・須恵器出土。	若江56次調査
若江	若江南町2丁目	H6.3.4	木建	試掘	遺構・遺物を検出せず。	
若江	若江南町2丁目	H6.3.26	金村	立会	遺構・遺物を検出せず。	
山畑古墳群	瓢箪山町	H6.3.29	金村	試掘	瓦器・瓦出土。	

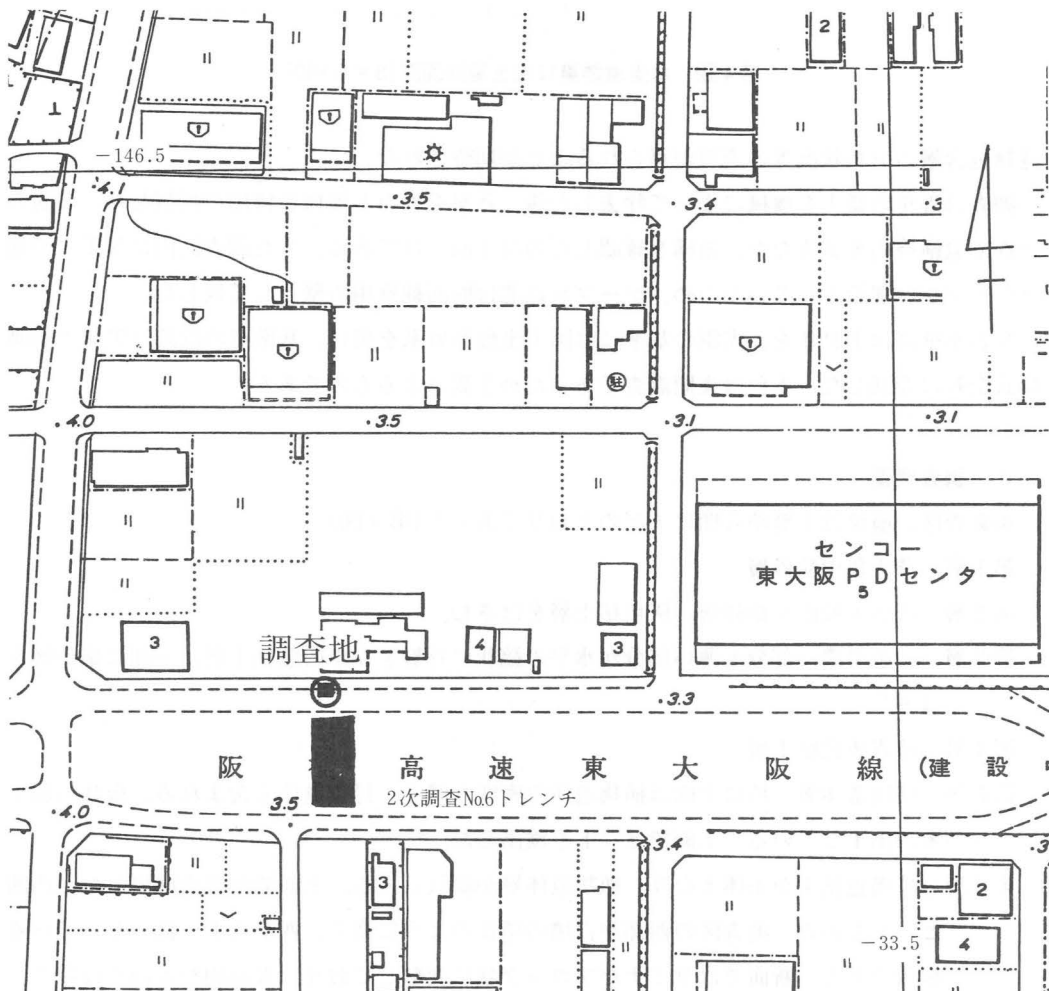
第2表 平成5年度下水道関係試掘・立会調査一覧表

第2章 水走遺跡第12次調査報告

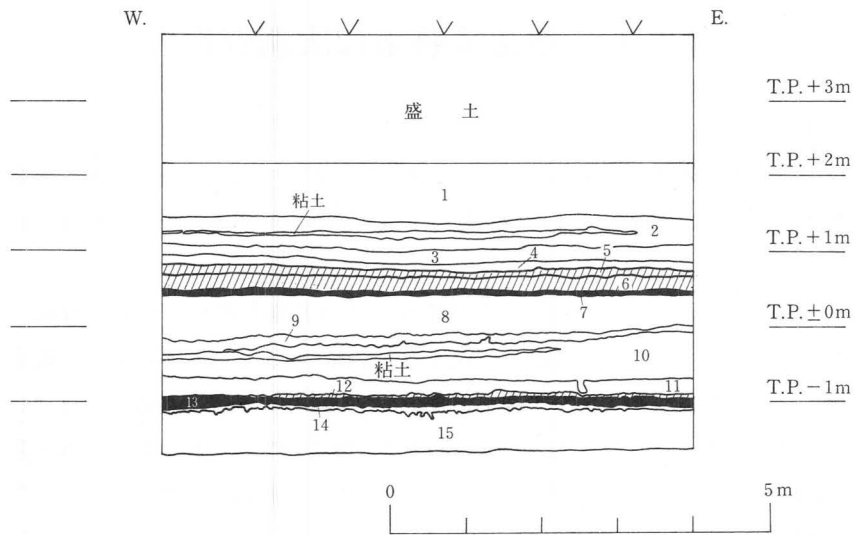
1 はじめに

今回の調査は公共下水道築造工事第1-1工区に伴うものである。築造工事が推進工法であるため、調査は約7.4×4.3mの発進坑(約32m²)1個所について実施した。期間は1993年11月2日から11月9日である。

調査地は中河内地域の中央を東西に走る国道308号線の北側歩道上に位置し、昼間は交通量が多いため夜間の調査となった(第3図)。調査地のすぐ南では、近畿日本鉄道東大阪線や阪神高速道路建設に伴う発掘調査等によって縄文時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が発見されている⁽¹⁾。これまでの調査は、ほとんどが国道の中央分離帯内で行われており、水走遺跡の東西方向の様相に関する手がかりを得ている。しかし、南北の様相は不明で、今回の調査によって



第3図 水走遺跡第12次調査地位置図(S=1/2500)



第4図 水走遺跡第12次土層断面図(S=1/100)

遺物包含層の分布状況等の資料が得られることが期待された。

調査は近年の盛土を機械によって除去した後、各層を人力と機械の併用で掘削した。各層の上面で遺構検出を試みたが、遺構を確認したのは1面だけである。また調査区内にNTTの地下ケーブルが埋設されていたため、ケーブル以北は断面観察用の壁として残した。

なお水準高はT.P.値を、実測の基準には国土座標第VI系を用い、基準点の設置はアジア航測株式会社に委託した。土色は夜間調査であるため主観によるものである。

2 調査概要

本調査区の層位は上層から順に下記のとおりであった(第4図)。

第1層 黄灰色中粒砂層。

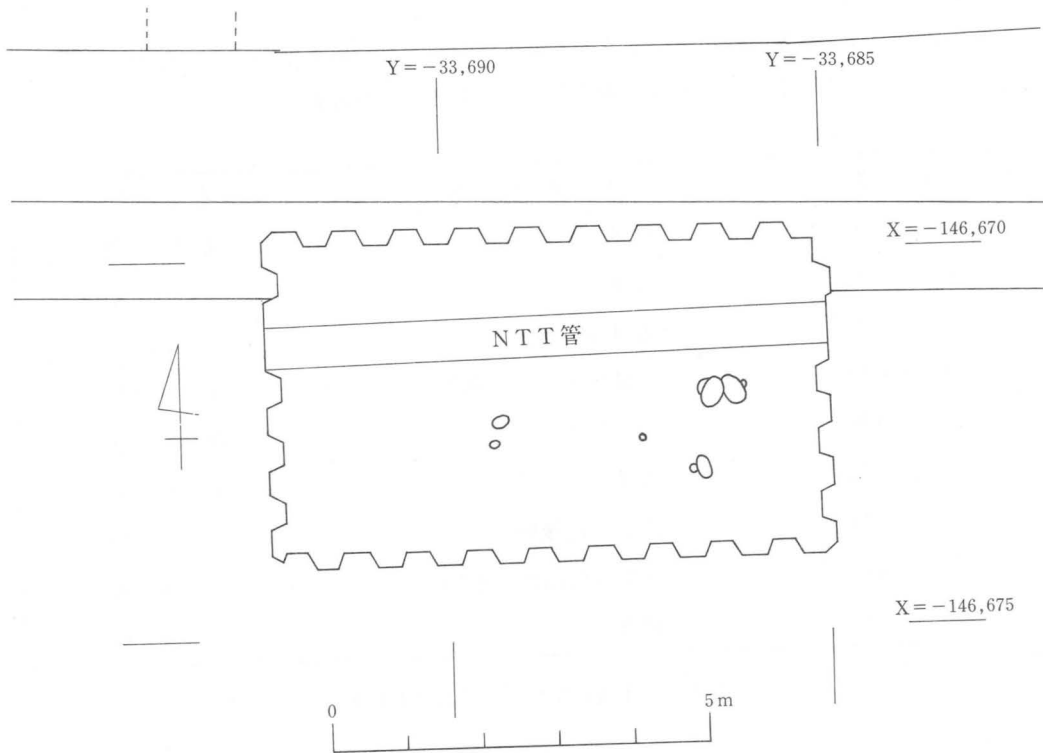
第2層 灰色中粒砂～細砂層。灰色粘土層をはさむ。

第3層 土色の濃い部分と薄い部分が水平の縞状に互層をなす灰色粘土層。一部に細砂層をはさむ。

第4層 暗青灰色粘土層。

第5層 植物遺体層。特に上面は植物遺体の密度が濃く、昆虫遺体も含まれる。板状の加工木が出土している。上面でピットを検出した。

第6層 暗褐色粘土が主体となり、植物遺体層が縞状に入る。上面で凸凹を検出した。凸凹というものの、調査区の西部が古墳の墳丘のように高く、西から東へ低くなっている起伏である。断面ではラミナがブロック状に変形しており、人為的なものではなく、地震による変形と考えられる。



第5図 水走遺跡第12次第5層植物層上面遺構平面図(S=1/100)

第7層 黒色粘土層。

第8層 暗緑灰色粘土層。

第9層 暗灰色粘土層。

第10層 灰色粘土層をはさむ中粒砂～細砂層。ラミナが顕著に観察される。

第11層 灰色粘土ブロックと下層の植物遺体層の黒色粘土ブロックとの混合層。堆積が乱れており、地震による変形を受けている可能性がある。

第12層 植物遺体層。

第13層 黒色粘土層。

第14層 暗青灰色粘土層。

第15層 暗緑灰色粘土層。

第5層から木製品が出土した以外に遺物の出土はみられなかった。

遺構は第5層の植物遺体層上面でピットを検出したほか確認できなかった。ピットは最大のもので約40cm×30cmの楕円形で、最深約25cmを測る。木の根の痕跡かと思われるが、東部のものに重複関係が認められることから、人為的なものと考えられる。柱痕跡は確認できなかった。土器が出土していないため時期は不明である。ベースとなる第5層は第2次調査のNo.6トレンチ第10層に相当するもので16世紀末頃の堆積とされている。⁽¹⁾

3 まとめ

今回の調査では土器等の時期が決定できる資料を得ることが出来なかった。しかし、第2次調査の結果から、おおまかに各層の堆積時期を対比することが可能である。

今回の調査	堆積時期	水走2次No.6
第1層	近世	第8層
第2層	近世	第9層
第3層	近世湿田最上層	第10層
第4～6層	16世紀末以降の蓮田層	第11～12層
第8～9層	11～12世紀	第13層
第11層	古墳～奈良時代	第14層
第12層	弥生時代後期	第15層
第13～14層	弥生時代前期～中期	第16層
第15層	縄文時代後期	第17層

第3表 水走遺跡第12次調査層序対比表

以上のように各堆積層が北へ連続していることが明らかとなった。植物遺体層上面でピットが検出されたことから、中世末から近世初頭の集落が付近に存在する可能性もある。国道308号線以北について今後も注意を払うべきであろう。

また、地震による堆積の変形構造を観察することが出来た。これについてはこれまでの調査やポンプ場建設に伴う北島遺跡第1次調査⁽²⁾の結果等をあわせ、改めて報告したい。

註)

(1) 財団法人東大阪市文化財協会『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』1992

(2) 現在報告書作成中

第3章 水走遺跡第13次調査報告

1 はじめに

今回の調査は推進工法による下水管渠築造工事であるため、水走一丁目地内に設けた発進坑とそこから東へ110mのところにある到達坑が調査の対象である(第6図)。

しかし到達坑については掘削するごとにライナープレートという軽量曲板をたてこんで土留めする工法のため、安全性を考慮し立会調査とした。

調査区は国道308号線に面する道路および歩道上で東西6.8m、南北4.0m、計約27㎡のトレンチが設定された。この地点は水走遺跡の東部に位置しており、到達坑から100m程で鬼虎川遺跡の範囲となる。

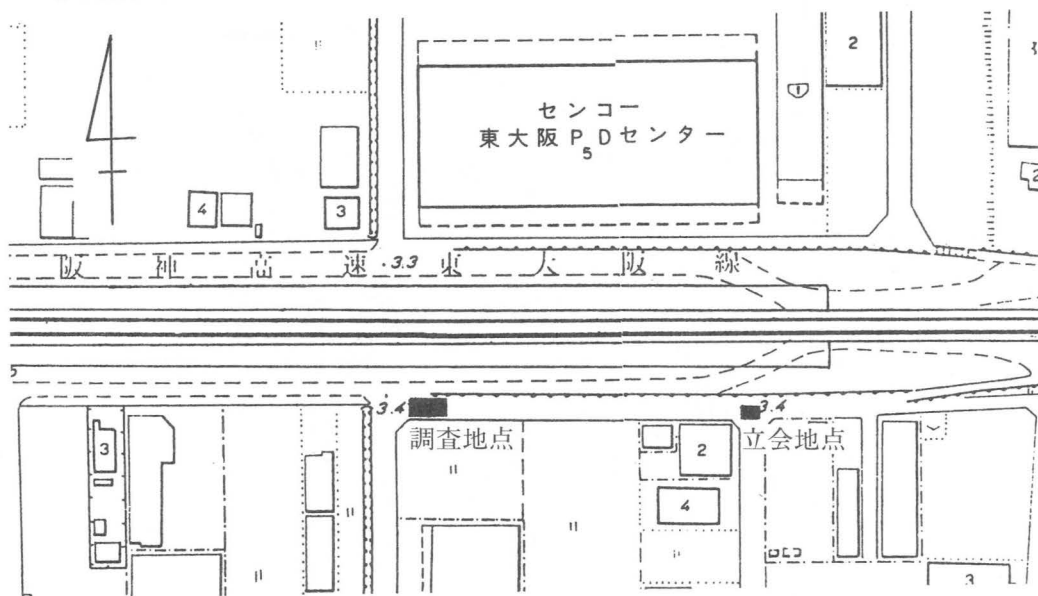
調査は現地表面(約T.P.3.3m)から下方1.7mまでの盛土部分については機械掘削をおこなった。以下3mを遺構、遺物の有無を確認しながら人力で掘削し、調査区の東辺と南辺にあぜを残し土層断面を観察した。

現場調査は平成6年1月14日～平成6年2月10日までおこなった。

2 調査の結果

1) 層位(第8図)

第1層～第4層は近世の堆積層である。暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土と緑灰色(7.5GY5/1)シルト質粘土の互層で、ラミナが認められる。第5層は植物遺体層、第7層～第13層までは植物遺体を多く含んでおり、当地点が湿地帯であったことがうかがえる。第6層～第18層



第6図 水走遺跡第13次調査地位置図(S=1/2500)

は中世の堆積層である。第16層はオリブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂と暗オリブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土の互層で、第16-a層は第16層が混ざりあって落ち込んだ状態のものと考えられる。ブロック状のシルト質粘土の隙間に細粒砂が噛んでおり、これは地面が人為的に踏み込まれ、水の影響で流されて溜ったものと推測できる。第17層は暗オリブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土層で、上面で足跡を検出している。第19層～第22層は古墳時代から奈良時代の堆積層である。第20層はオリブ黒色(5Y3/1)粘土で植物遺体を少量含む。庄内期に並行すると考えられる。第22層～第24層は弥生時代を通じての堆積層で、東に隣接する鬼虎川遺跡の基本層位に近くなっている。第22層は植物遺体を多量に含んでおり、腐食土と考えられる。第24層は黒色(2.5Y2/1)粘土で弥生時代前期の土器片が出土している。第25・26層は縄文時代晩期の堆積層と考えられる。

また、第27層以下は地層断面の確認をおこなった。

2) 遺構・遺物

第17層上面で足跡を検出した。第16・16'層がシルト質粘土、細粒砂、細礫の互層であり、足跡内にこれらが堆積していることから、第16・16'層の堆積中から踏み込まれたと考えられる。水田の畦畔等の遺構は検出できなかった。

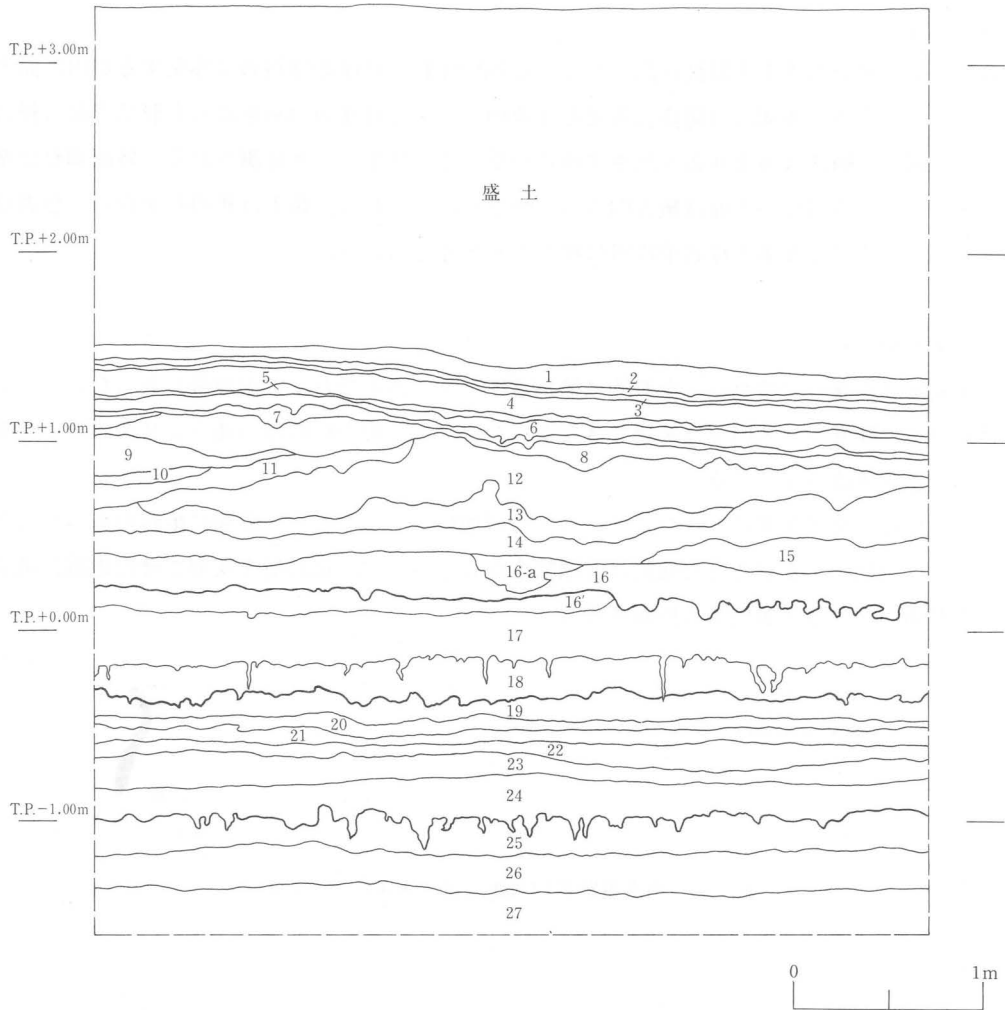
足跡はトレンチの中央から西部にかけて広がっている(第7図)。目立った規則性は確認できないが南西～北東にかけての分布がうかがえる。足跡の時期は出土遺物がないため断定できないが、「水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告」⁽¹⁾の層位関係によると12世紀代と考えられる。

また、第19層の黒色粘土層中に青白いもやもやが確認された。おもに第19層上面に多く認め



第7図 水走遺跡第13次足跡面(S=1/40)

Y = -335,680



盛土

- | | | | |
|------|----------------------------------|--------|---------------------------------|
| 第1層 | 暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土 | 第16層 | オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂 |
| 第2層 | 緑灰色(7.5GY5/1)シルト質粘土 | 第16'層 | 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土 |
| 第3層 | 暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土 | 第16''層 | 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土 |
| 第4層 | 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土 | | 暗オリーブ灰色(5GY4/1)細粒砂 |
| 第5層 | 暗オリーブ灰色(5GY5/1)シルト質粘土 植物遺体多量に含む | 第17層 | 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土 |
| 第6層 | オリーブ灰色(5GY5/1)シルト質粘土 | 第18層 | オリーブ黒色(5Y3/1)粘土 |
| 第7層 | 暗オリーブ灰色(5GY3/1)細粒砂混粘土 植物遺体含む | 第19層 | 黒色(7.5Y2/1)粘土 |
| 第8層 | 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒砂混粘土 植物遺体若干含む | 第20層 | オリーブ黒色(5Y3/1)粘土 植物遺体含む |
| 第9層 | 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土 植物遺体若干含む | 第21層 | 灰色(7.5Y4/1)シルト質粘土 植物遺体若干含む |
| 第10層 | 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土 植物遺体若干含む | 第22層 | 黒褐色(10YR3/1)粘土 植物遺体多量に含む |
| 第11層 | 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土 植物遺体若干含む | 第23層 | 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 植物遺体多量に含む |
| 第12層 | 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土 植物遺体若干含む | 第24層 | 黒色(2.5Y2/1)粘土 |
| 第13層 | 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土 植物遺体若干含む | 第25層 | 灰色(10Y4/1)粘土 |
| 第14層 | 緑灰色(7.5GY5/1)粘土混細粒砂 | 第26層 | オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂混粘土 植物遺体若干含む |
| 第15層 | 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土 植物遺体若干含む | 第27層 | 灰色(5Y4/1)粘土 植物遺体若干含む |

第8図 水走遺跡第13次南壁土層断面図(S=1/40)

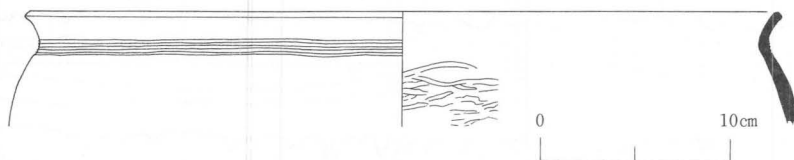
られ、第18層との層界が不明瞭である。これは地震により第19層が変形したものと考えられる。同じく、第24層の黒色粘土層と第25層の灰色粘土層の層界にはラミナが認められ堆積層の変形がみられる。

遺物は第24層から弥生土器甕が出土している(第9図)。口縁部は斜めに外反するが内外面ともやや丸みをもつ。頸部には篋描沈線文を3条めぐらす。口径39.4cmを測る大形品で最大径は口径を上回るが胴部はあまり張り出さずゆるやかなカーブをもつと推測される。外面調整は摩滅が著しいため不明だが内面は横方向のヘラ磨きが認められる。胎土は角閃石を含み、色調は灰黄色を呈する。近畿第I様式中段階に相当すると考えられる。

3 まとめ

今回発掘を実施した地点は、全般的に植物遺体を多く含んでおり、湿地帯であったといえる。中世期の水田畦畔やハス田等は確認できなかったが、ハス田の畦畔は当地点より西の地点で発掘調査により確認されている。

また、地震の痕跡が確認できたことから、この地域で少なくとも二時期に地震のあったことがわかる。第19層を変形させた地震は古墳時代から奈良時代、第25層を変形させた地震は縄文時代晩期頃とそれぞれ層位から推測される。



第9図 水走遺跡第13次出土遺物実測図(S=1/4)

註)

(1) 『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』

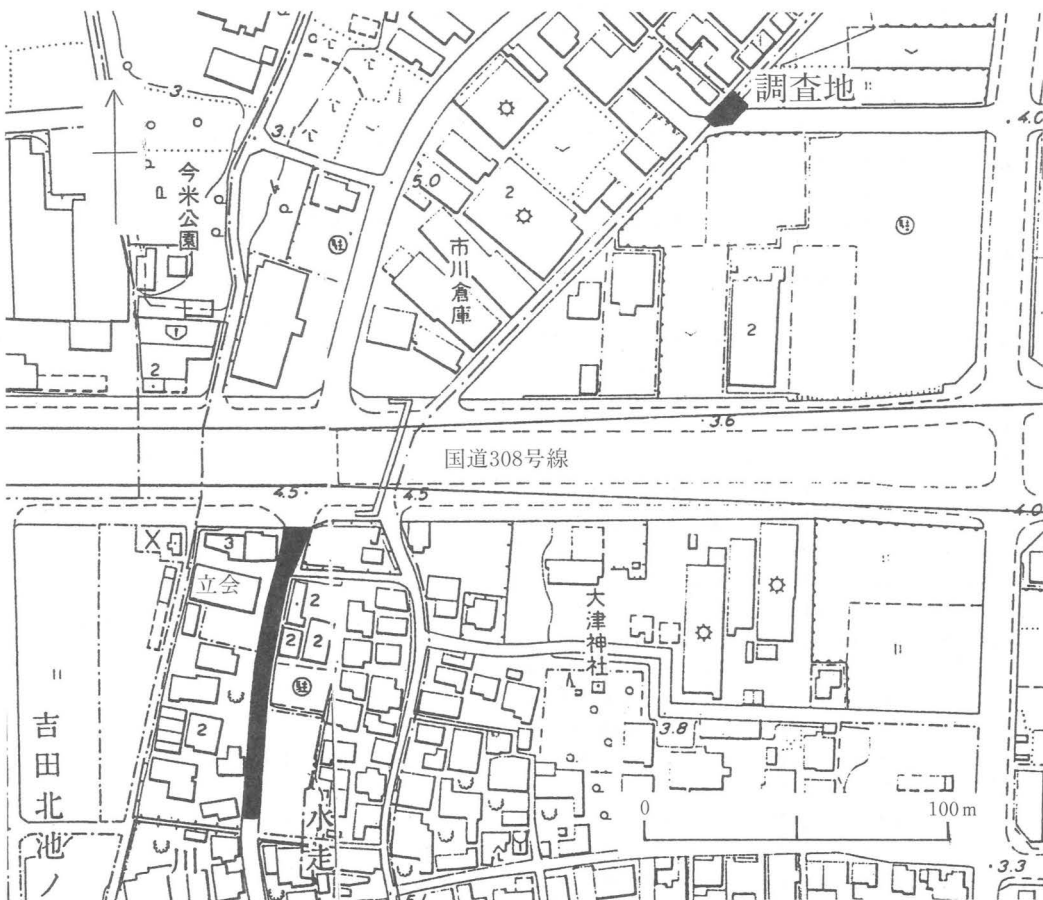
財団法人東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1992

第4章 水走遺跡第14次調査報告

1 はじめに

今回の調査地は川中地内で、国道308号線の北約80mの地点にあたる。平成4年8月にこれと一部重複する発進立坑で立会調査を行ったところ、土師器・須恵器の細片が少量出土した。このため平成5年度事業として新たに設けられた発進立坑は、昨年度と一部重複し攪乱を受けているが、本調査が必要となったのである。現況道路の交差点に84㎡の発進立坑が設けられたため、覆工板を敷いて通路を確保する措置がとられた。従って調査地の大半で太陽光が遮断されることとなり、調査にも少なからぬ影響を与えることとなった。

また国道308号線の南での開削区間においては、2ヶ所で試掘調査を行った結果、旧耕土層以下には砂礫層が1m以上堆積しており、この区間が宝永元年(1704)に付替られる以前の旧大和川の分流のひとつである旧吉田川内にあたることが判明した。このためこの区間では立会調査を行うこととなった。

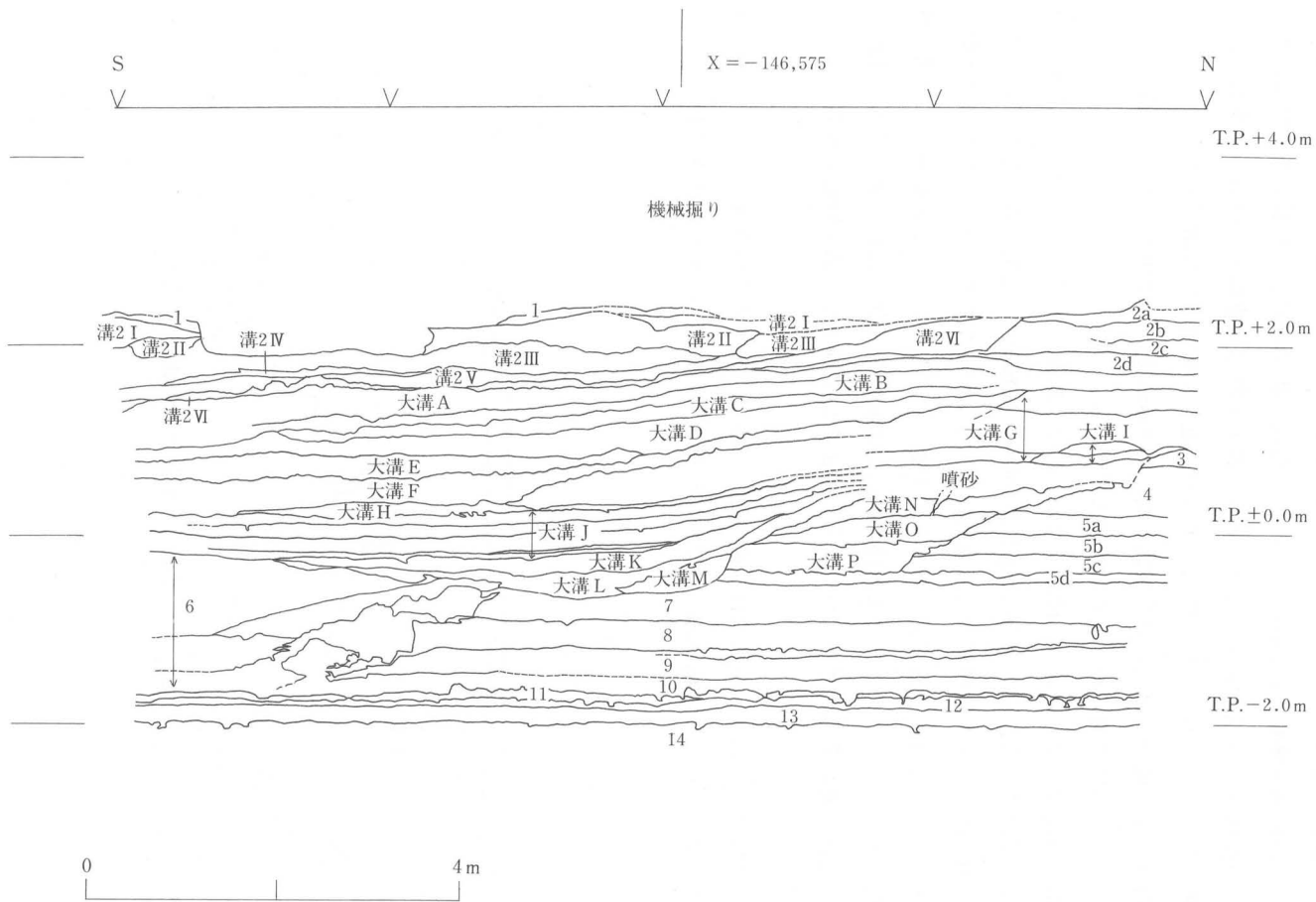


第10図 水走遺跡第14次調査地位置図(S=1/2500)

2 層位

路面覆工の必要から上部約2mは機械掘削を行った。第3層～第14層は東から西へ傾斜しており、北壁断面の観察の結果、第5層上面では東西5.5mの間で約30cmの高低差がみられ、東側が高い。第6層は第7層～第9層を削平して調査地東よりに堆積していた。第7層から土師器少量、第9層から土師器1点が出土したが、いずれも摩滅した細片で器種および年代を決定できるものはない。第12層からは須恵器杯蓋が出土し、古墳時代中期の堆積層と考えられる。第12層～第13層はアシ・ヨシなどの植物遺体を含んでいた。

- 第1層 オリーブ灰色(2.5GY5/1)細～中粒砂混じり粘土質シルト
- 第2a層 にぶい黄褐色(10YR5/3)細～中粒砂混じり粘土質シルト
- 第2b層 黄褐色(2.5Y5/4)細～中粒砂混じり砂質シルト
- 第2c層 褐色(10YR4/6)粘土質シルト
- 第2d層 暗灰黄色(2.5Y5/2)細～粗粒砂混じり粘土質シルト
- 第3層 暗緑灰色(10GY4/1)粘土
- 第4層 緑灰色(10G4/1)細粒砂 シルト～極細粒砂のラミナ4層以上あり
- 第5a層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト～粘土 極細～細粒砂のラミナ2層あり
- 第5b層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土 緑灰色(10G6/1)粘土の薄層1層狭在
- 第5c層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土
- 第5d層 暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土 極細粒砂のラミナ3層以上あり
- 第6層 灰白色(5Y7/2)細粒砂～細礫
- 第7層 オリーブ黄色(5Y6/3)細～極粗粒砂
- 第8層 緑黒色(7.5GY2/1)粘土
- 第9層 オリーブ黄色(5Y6/4)細～極粗粒砂
- 第10層 灰色(7.5Y4/1)シルト 極細粒砂のラミナあり
- 第11層 灰色(7.5Y4/1)粘土と灰色(10Y5/1)シルト
- 第12層 黒褐色(10YR3/1)粘土 極細粒砂のラミナあり 炭化物斑点状に混じる
- 第13層 黒色(10YR1.7/1)粘土
- 第14層 灰色(7.5Y4/1)粘土
- 溝2I層 灰色(7.5Y4/1)粘土
- 溝2II層 暗緑灰色(10GY4/1)細～粗粒砂混じり砂質シルト
- 溝2III層 オリーブ黄色(5Y6/4)細～粗粒砂
- 溝2IV層 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質シルト
- 溝2V層 緑灰色(10G4/1)細～粗粒砂混じり粘土質シルト～粘土
- 溝2VI層 にぶい黄褐色(10YR5/3)細～粗粒砂
- 大溝A層 灰色(7.5Y4/1)粘土
- 大溝B層 暗緑灰色(10GY4/1)細～粗粒砂混じり粘土質シルト
- 大溝C層 暗青灰色(5BG4/1)粘土 細～中粒砂微量含む
- 大溝D層 暗緑灰色(10GY4/1)泥層
- 大溝E層 灰色(7.5Y4/1)細～粗粒砂
- 大溝F層 緑灰色(10G4/1)粘土
- 大溝G層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土 極細粒砂のラミナあり
- 大溝H層 灰色(10Y4/1)シルト～粘土 極細～中粒砂のラミナあり
- 大溝I層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1) 極細～細粒砂少量混じる
- 大溝J層 暗オリーブ灰色(2.5GY～5GY4/1)粘土 極細粒砂のラミナ23層以上あり
- 大溝K層 緑黒色(10GY2/1)泥層
- 大溝L層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土 細～中粒砂のラミナあり
- 大溝M層 灰色(7.5Y4/1)シルト～粘土 細～粗粒砂のラミナあり
- 大溝N層 緑黒色(7.5GY2/1) 極細～細粒砂 粘土ブロック混じる
- 大溝O層 灰オリーブ色(5Y5/3)細～極粗粒砂
- 大溝P層 暗緑灰色(10GY3/1)シルト～極細粒砂と灰オリーブ色(5Y5/2)細～粗粒砂の互層



第11図 水走遺跡第14次調査西壁断面図(S=1/80)

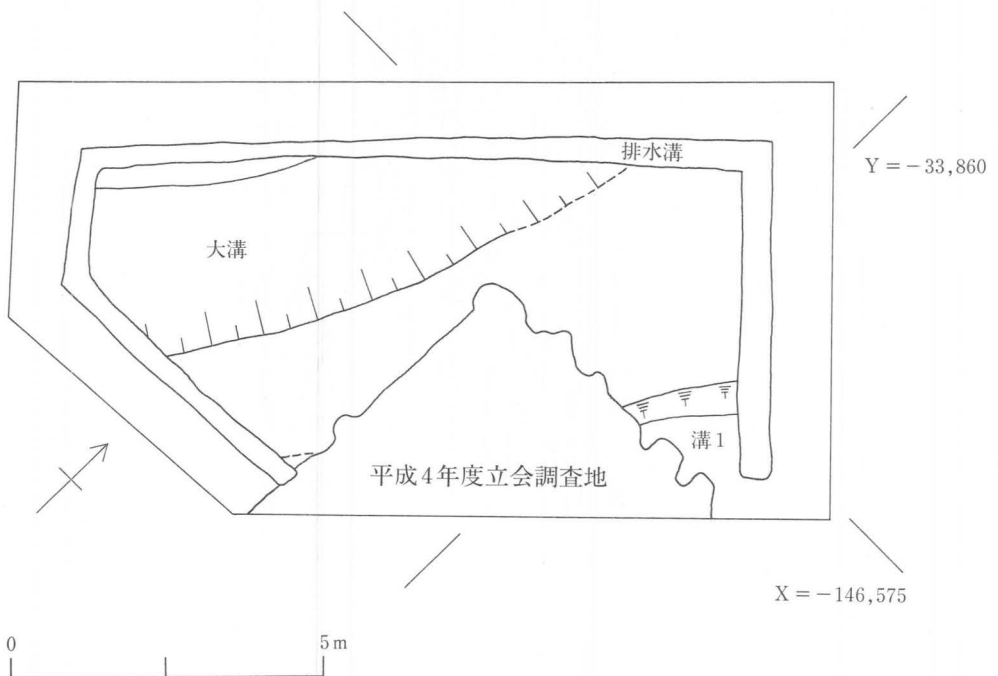
3 遺構

盛土及び攪乱の掘削後、南北に延びる溝1の西肩を検出したが東肩は調査地外で、幅360cm以上あった。深さは134cmである。西肩には長さ60cm以上の杭が列をなして打ち込まれていたが、大半が盛土の機械掘削の際に折損した。埋土は上層からオリーブ黒色細～中粒砂、灰色細～粗粒砂10cm、灰白色細～極粗粒砂10cm、オリーブ灰色細～粗粒砂混じり粘質シルト22cm、オリーブ灰色細～中粒砂混じり粘質シルト12cmである。出土遺物は陶磁器・土師器・須恵器・瓦器・瓦・ミニチュア土製品にガラス片も混入しており、近代に使用された溝である。

溝2は南北方向に延び、東肩だけを検出した。幅308cm以上、深さ98cmを測る。遺物の出土はなく正確な時期は不明であるが、近世のものと思われる。

大溝は南北方向に延び、東肩のみ検出したが、西肩は調査地外であった。検出した幅5.2m、上部は攪乱を受けているが深さ2.3mに達する。断面の観察から1度掘り直しをしていることが判明する。掘り直し以前の堆積層からは遺物が出土しなかったため、溝の開削時期は不明であるが、掘り直し後の第A～F層で瓦器椀・瓦質羽釜が出土しており、13世紀後半には溝が使用されていたと思われる。このような大規模な溝は、国道308号線建設に伴う調査でも2条検出されており、集落を囲む環濠と考えられている⁽¹⁾。本調査地で検出した溝も同様の性質のものであろう。

人為的な遺構ではないが、地震に伴う痕跡として南北に延びる噴砂を検出した。噴砂は第4・6層及び大溝内のO層から幅9cm以下で、13世紀後半の大溝内の堆積層を突き抜けているた



第12図 水走遺跡第14次調査遺構平面図(S=1/120)

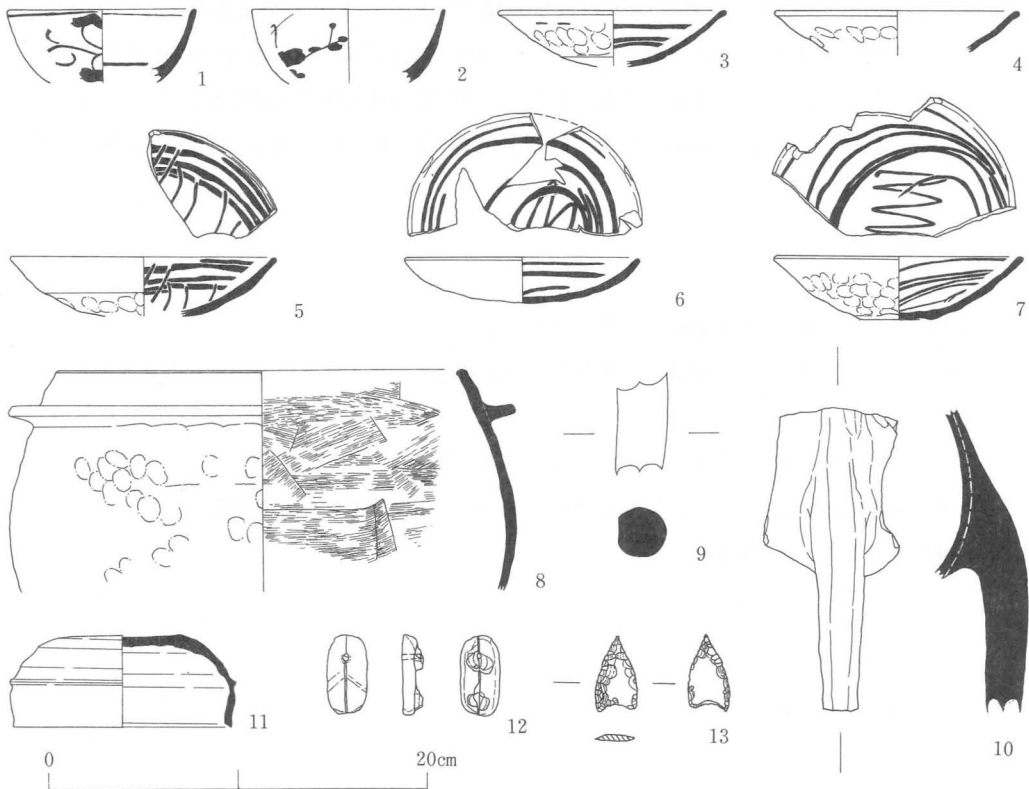
め、上限を13世紀後半とすることができ、それ以降の地震に伴うものと考えられる。本調査地の南西200mの地点で1987年に実施した水走遺跡第10次調査では、永正7年(1510)8月8日もしくは文禄5年(1596)9月5日の地震に伴う噴砂が確認されている⁽²⁾。本調査地で検出した噴砂もそのいずれかに該当するものと思われる。また第10層～第12層にかけて堆積層の変形が認められ、第12次・第13次調査と同様に地震に起因するものと思われる⁽³⁾。第12層からは古墳時代中期の遺物が出土しており、それをあまり下らない時期と考えられる。

4 出土遺物

今回の調査では古墳時代の須恵器から近代の陶磁器、瓦、石鏃、ミニチュア土製品などが少量出土した。時期的には中世に属するものが最も多い。

1・2は溝1から出土した伊万里焼碗である。1は青色の文様が内外面に施されるが、2は全体にくすんだ色調を呈し、外面のみに文様を施す。

3～7は大溝から出土した瓦器碗である。3・4は体部外面に指頭圧痕が認められるが、ヘラミガキは省略されており、器形もやや扁平である。3には体部内面に簡略化されたヘラミガキが認められる。5は体部内面には圈線状のヘラミガキをした後に、見込み部に平行線状の暗文を施す。体部外面下半には指頭圧痕が認められる。6は皿状の器形を呈する。見込み部にジ



第13図 水走遺跡第14次調査出土遺物実測図(S=1/4)

グザグ状の暗文を施した後に、体部内面にヘラミガキを行う。7は器高3.4cmで、高台は粘土紐を貼り付けたわずかな高まりが認められる。見込み部にジグザグ状の暗文を施した後に、体部内面に圏線状にヘラミガキを行う。体部外面下半の指頭圧痕は特に顕著である。

8～10は大溝内から出土した瓦質羽釜である。8は口縁部が内傾し、肩部にやや上向きの鐔を貼り付ける。体部内面には横方向のハケ目が認められる。炭素の吸着が悪いため、色調は灰白色(7.5Y8/2)を呈する。9・10は脚部で、10には体部との接合痕が認められる。

11は第12層から出土した須恵器杯蓋である。口縁端部は内傾する面を持ち、天井部と口縁部を分ける稜は鈍い。ヘラ削りは時計周りで、天井部1/3の範囲に施す。色調は灰色(5Y5/1)を呈する。

12は溝1出土の下駄のミニチュア土製品である。上面観は長径4.2cm、短径2.1cmの楕円形を呈する。円形の鼻緒孔を上面よりひとつだけ焼成前に穿つ。歯は粘土塊をふたつ貼り付けている。色調は浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。

13は第12層から出土したサヌカイト製無茎石鏃である。長さ4cm、幅2.2cm、重さ2.9gを測る。厚さは0.4cmと薄い。

5 まとめ

昭和54年国道308号線建設に伴う試掘調査で発見された経緯をもつ水走遺跡では、これまでの調査は東西に延びる国道付近に集中していた。しかし今回は国道から北方へ80m離れた地点で調査を実施した。その結果、従来より知られていた環濠と同規模の大溝が検出され、鎌倉時代の集落の範囲がさらに広がる可能性があり、北限を確認するために国道の北部でも発掘調査が必要と思われる。

註)

(1) 東大阪市文化財協会『甦る河内の歴史』1984

東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』1992

(2) 寒川旭『地震考古学』中公新書(1992)は永正7年、勝田邦夫「水走遺跡にみられる地震の痕跡」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol3、No3(1988)は文禄5年を有力視する。

(3) 本報告書第2章・第3章参照

第5章 西岩田遺跡第14次調査報告

1 はじめに

今回の調査は公共下水道築造工事第2工区に伴うものである。築造工事が推進工法であるため、調査を発進坑2箇所と到達坑1箇所について実施した。また、遺跡範囲外の立会調査を実施しており、その結果もあわせて報告する。調査面積は合計約61㎡、期間は1993年4月19日から

4月26日である。

調査地は大阪中央環状線側道車道中央上に位置し、昼間は交通量が多いため夜間の調査となった(第14図)。調査地のすぐ東では、近畿自動車道建設に伴う発掘調査が大阪文化財センターによって実施され、弥生時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が発見されている⁽¹⁾。現在の地番は西岩田3・4丁目である。

調査は近年の盛土を機械によって除去した後、各層を人力と機械の併用で掘削し、各層上面で遺構検出を試みた。

なお水準高はT.P.値を、実測の基準には国土座標第VI系を用い、基準点の設置は関西航測株式会社へ委託した。土色は夜間調査であるため主観によるものである。

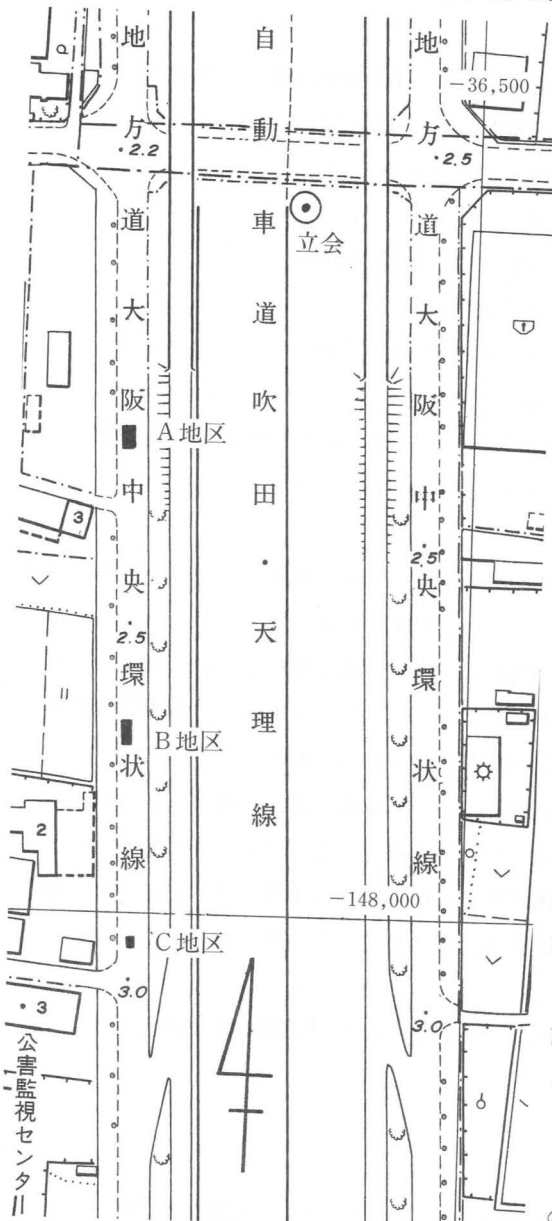
2 調査概要

1) 立会地区

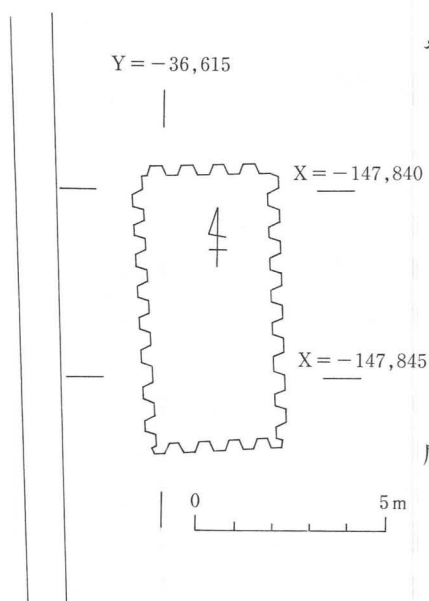
本地区は遺跡範囲の外に位置し(第14図)、遺構や遺物が発見されないと判断されたが、堆積環境の把握に努めるべく土層断面の調査を行った(第17図)。遺構や遺物は検出されず、調査区周辺が遺跡範囲外であることを確認することができた。

2) A地区

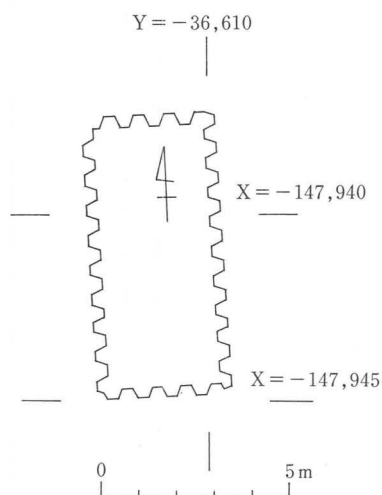
本地区は立会地区から南へ約70mで、遺跡の北端付近に位置する(第15図)。層序の概略は上層から順に次のとおりで(第17図)、遺構



第14図 西岩田14次調査地位置図(S=1/2500)



第15図 A地区位置図(S=1/200)



第16図 B地区位置図(S=1/200)

や遺物は検出できなかった。

- 第0層 盛土・旧耕土層
- 第I層 耕作土層
- 第II層 黒色粘土層(流水堆積)
- 第III層 黄灰色粘土層
- 第IV層 灰色砂層(流水堆積)
- 第V層 植物遺体層

3) B地区

本地区はA地区から南へ約100mの地点である(第16図)。層序の概略は上層から順に次のとおりであった(第17図)。

- 第0層 盛土・旧耕土層
- 第I層 耕作土層
- 第II層 黄色中粒砂層(流水堆積)
- 第III層 黄灰色粘土層
- 第IV層 灰色細砂層(流水堆積)
- 第V層 植物遺体層

遺構は確認できず、第III層上面で土師質皿細片を検出したほか、遺物の出土はみられなかった。

4) C地区

本地区はB地区から南へ70mの地点である。堆積状況はB地区と同様であった。第III層上面でピットを3基検出した。

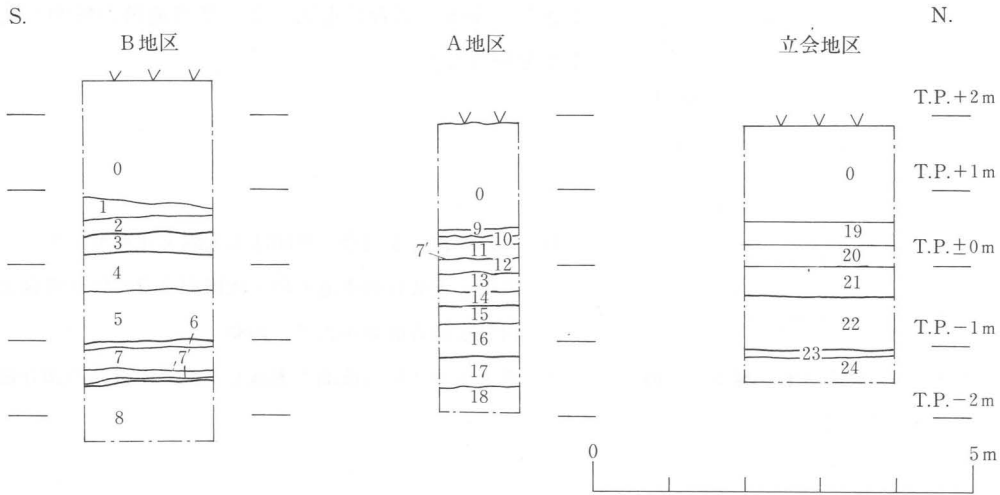
ピット1は約40cm×30cmの隅丸方形で、深さ約30cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。ピット1からは須恵器の微細な細片と土師器が出土している(第19図)。

図化した土師器は壺の口縁部と甕の口縁部で、それぞれの口径は27.8cmと15.2cmを測る。色調は共に赤褐色を呈し、胎土には石英や長石を含み、精良である。1の甕は摩滅のため調整は不明。2の壺は外面に縦方向のへらみがき、内面には横方向のへらみがきが認められる。みがきの幅は約2mmである。焼成は良好で土師器として硬質である。

他のピットから土器は出土しなかった。これらのピットの時期は古墳時代後期と思われる。ほかに遺構や遺物は確認できなかった。

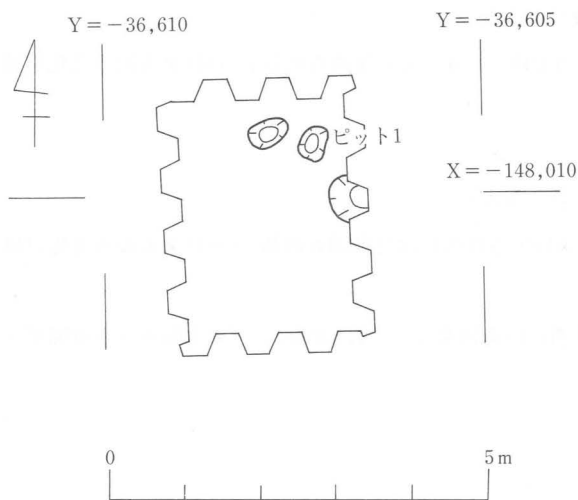
3 まとめ

今回の発掘調査では古墳時代後期のピットを検出することができた。遺構は第III層をベースとしており、第III層が微高地状に高くなるX=-148,000m以南(東大阪市公害監視センター周



- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 灰色中粒砂混砂質シルト (O層) | 13 黄色粘土 (III層) |
| 2 黄色中粒砂~砂質シルト (I層) | 14 灰色砂混粘土 (III層) |
| 3 灰色粘土 (II層) | 15 灰色細砂~中粒砂 (IV層) |
| 4 黄橙色砂混粘質シルト (III層) | 16 灰色細砂と植物遺体層の互層 (IV層) |
| 5 灰色粘土 (下部は細砂) (III層) | 17 黒褐色粘土 (植物遺体層) (V層) |
| 6 灰色シルトと植物遺体の互層 (IV層) | 18 黒色粘土 (V層) |
| 7 オリーブ灰色粘土~シルト (IV層) | 19 青灰色細砂~シルトの互層 (II層) |
| 7' 植物遺体層 | 20 褐灰色粘土 (II層) |
| 8 オリーブ黒色粘土 (植物遺体層) (V層) | 21 灰色粘土 (III層) |
| 9 灰色砂混砂質シルト (O層) | 22 青灰色粘土~細砂 (IV層) |
| 10 灰色砂混細砂質粘土 (I層) | 23 植物遺体層 (V層) |
| 11 黄色砂混シルト質粘土 (I層) | 24 灰色中粒砂と粘土の互層 (V層) |
| 12 黄灰色中粒砂混粘土 (II層) | |

第17図 西岩田遺跡第14次土層図 (S=1/100)

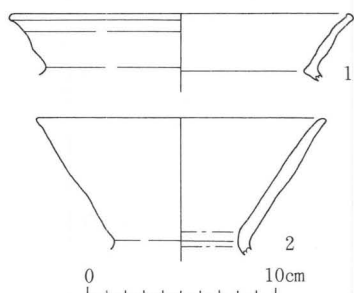


第18図 西岩田遺跡第14次C地区III層上面 (S=1/100)

辺) に集落が営まれていたことが推定される。これは電線地中化工事に伴う第11次調査の結果を補強するものである。⁽²⁾

また、今回の調査では現地表面から5mまでの地層を観察することができた。時期が明らかとなる遺物は出土しなかったが、これまで行われた調査結果等から、第II層は古墳時代後期以降、第III層は古墳時代前期、第IV層は弥生時代後期、第V層は弥生時代中期の堆積と考えられる。

今回の調査によって西岩田遺跡北部の様相に関する資料を得ることが



第19図 C地区出土土器(S=1/4)
一覧を次にあげる。

できた。今後の調査の進展によって当遺跡の解明が進むことを期待したい。

註)

- (1) 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター『西岩田 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1983
- (2) 東大阪市関係各機関で実施した西岩田遺跡の調査報告一覧

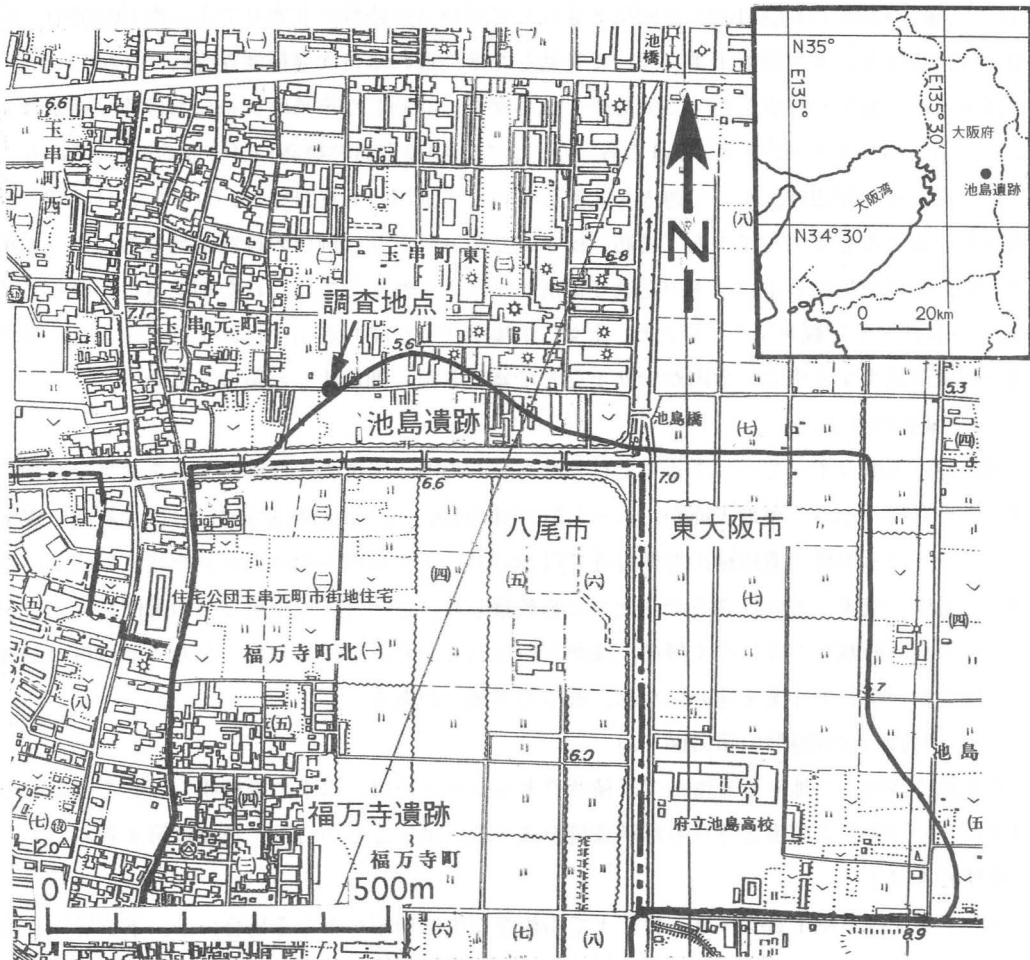
- 第1次 中央南幹線内遺跡調査会『中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査』1971
中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会『西岩田遺跡—中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査概報—』1971
- 第2次 同上
- 第3次 東大阪市遺跡保護調査会「大阪ガス中央幹線埋設に伴う調査」『調査会ニュースNo.1』1975
- 第4次 財団法人東大阪市文化財協会「瓜生堂・西岩田遺跡発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1983年度』1984
- 第5次 同上
- 第6次 東大阪市遺跡保護調査会「西岩田遺跡出土の土師器について」『調査会ニュースNo.16』1980
- 第7次 未報告(ガソリンスタンド建設に伴う調査)
- 第8次 財団法人東大阪市文化財協会「西岩田遺跡第8次試掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度』1989
- 第9次 未報告(調査面積約5 m²)
- 第10次 未報告(三晃マンション建設に伴う調査)
- 第11次 財団法人東大阪市文化財協会「西岩田遺跡第11次発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度』1989
- 第12次 財団法人東大阪市文化財協会「西岩田遺跡第12・13次調査報告」『東大阪市下水道関係発掘調査概要報告—1992年度—』
- 第13次 同上
- 第14次 本書

第6章 池島遺跡第12次調査報告

1 はじめに

池島遺跡は大阪府東大阪市の南東部、池島町5～7丁目、玉串町東2・3丁目一帯に拡がり、市境を越えて八尾市福万寺町の福万寺遺跡の遺跡範囲と連続する(第20図)。これまでの調査で、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡の遺構(阿部・上野、1981)、7～9世紀以降の条里地割跡を含む弥生時代中期以降の耕作地跡、古墳時代の滑石製品製作地跡(阪田、1986;岸本、1986;大阪文化財センター、1991)などが検出されている。

今回の調査地点では、これまでの調査によって明らかにされた遺構の拡がりを確認するとともに、1992年度に行った第11次調査地点との層序対比を試みることを目的とした。



第20図 池島遺跡の位置と調査地点

2 調査に至る経過

東大阪市内で進められている下水道整備事業の一つとして、平成5(1993)年度に、玉串町東2丁目・3丁目南部で下水道管理設工事が推進工法で実施されることになった。それに伴って掘削される竪坑の位置が周知の埋蔵文化財包蔵地である池島遺跡の北端にあたるため、東大阪下水道部との協議を行い、工事の実施に際して必要な調査の手順について検討した。その結果、竪坑部分については、立会調査として、遺構・遺物の有無を確認すると同時に、これらが検出された場合には、できる限り記録作成に努めることにした。現地の調査は1993年11月18・19日に行った。

3 調査の概要

3.1 調査地点

調査地は、玉串町東2丁目8番地、第二寝屋川と恩智川との分流地点から西北西に約470mの地点で、第二寝屋川の北約100mを同川と並行して延びる道路敷の北寄りであった(第20図)。同地点は、昨年度に竪坑掘削工事に伴って実施した池島遺跡第11次発掘調査地点の西方約350mに位置する。大阪府が作成した2,500分の1地形図上で計測した第Ⅵ座標系における座標値は、 $Y = -34.525$ 、 $X = -149.890(\text{km})$ であった。また、現地表面の標高(T.P.)は約5.5mである。

調査地とその周辺は、かつて西方を北流していた玉串川の右岸自然(あるいは人工)堤防と、東方を北流する恩智川左岸の人工堤防に挟まれた領域にあり、両川の後背湿地にあたる。近年までは、水田が広がる中に、水田造成で掘削した残土を盛土して作られた畑地(いわゆる「島畑」)が散在する景観を呈していたが、徐々に工場や住宅が建ち並ぶようになった。また、耕作地の領域が減少する中で、水田がマサ土などで盛土され、畑地化した領域も多い。

3.2 調査の方法

調査地の掘削はすべてバックホウで行われた。その際、竪坑の一壁面の土砂を適当な高さで残しながら掘り進み、現地表面から約5.5mの掘削底までの堆積物を3回に分けて断面を観察した。後述する中世の遺構検出層準付近では、幅約1.5mで東西方向のトレンチ状に掘削した両側壁で遺構の規模、方向、深さの変化などを観察した。遺物は各堆積層ごとの掘削を行えなかったため、断面観察の際に出土層準が確かめられたもののみを採集した。なお、堆積層の記載には調査員が交替で作業を進めたため、若干の不統一がある。

3.3 調査地点の堆積物(第21図-a)

調査地で観察した地層垂直断面の堆積サクセッションでは、以下の堆積相A～Eを認定した。以下にその岩質および推定される堆積環境を述べる。単層ごとの岩質、色調は第4表に示す。

堆積相A(A')

塊状をなす砂質粘土質シルト。耕作土で本相をなす堆積相が重なる場合には、下位層や本相の下位の堆積層に鉄斑紋がみとめられ、鋤床を形成していたことを示す。堆積相A'は、ブロック土化した堆積相Aの砂質粘土質シルトである。再堆積した耕作土で、堆積後耕作活動の影響

を受けていないと考えられる。

堆積相 B

逆級化成層をなす砂礫。おもにトラフ型斜交層理をなす。最下部の細粒部ではシルト葉理が挟まれる極細粒砂～細粒砂の水平葉理、スモールリップルなどがみとめられた。外水氾濫によるクレバススプレー堆積物と考えられる。

堆積相 C

植物遺体(有機物)に富むシルト質粘土。不明瞭な水平層理をなし、生物擾乱もみとめられる。粘土の薄層が挟まれる部分もある。植物遺体は異地性のものと考えられる。わずかに砂を含むが、滞水状態が持続する落ち込み(たとえば井路のような場所)の堆積物である。

堆積相 D

級化成層をなすシルト質砂礫～砂質シルト質粘土。トラフ型斜交層理、スモールリップル、不明瞭な水平葉理をなす。下部ではドレイプした粘土葉層が波状に挟まれ、上部では掃流にとり残された砂層がレンズ状に挟まれる。後背湿地の排水路となるような、低次の流況で、間欠的な流れの流路内堆積物と考えられる。下部の砂礫層中には、角ないし垂角粘土礫が混入し、流路周辺での人為的な掘削行動をうかがわせる。

堆積相 E

水平層理をなすシルト質粘土。異地性の植物遺体に富む部分や、砂の葉層が挟まれる部分がある。自然堤防の後背湿地の堆積物と考えられる。

堆積環境の変遷

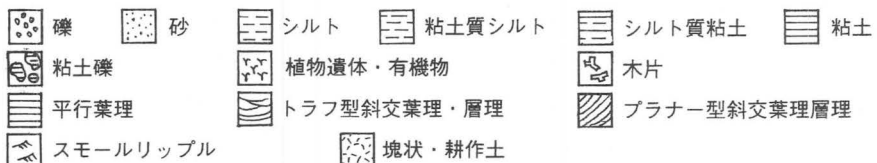
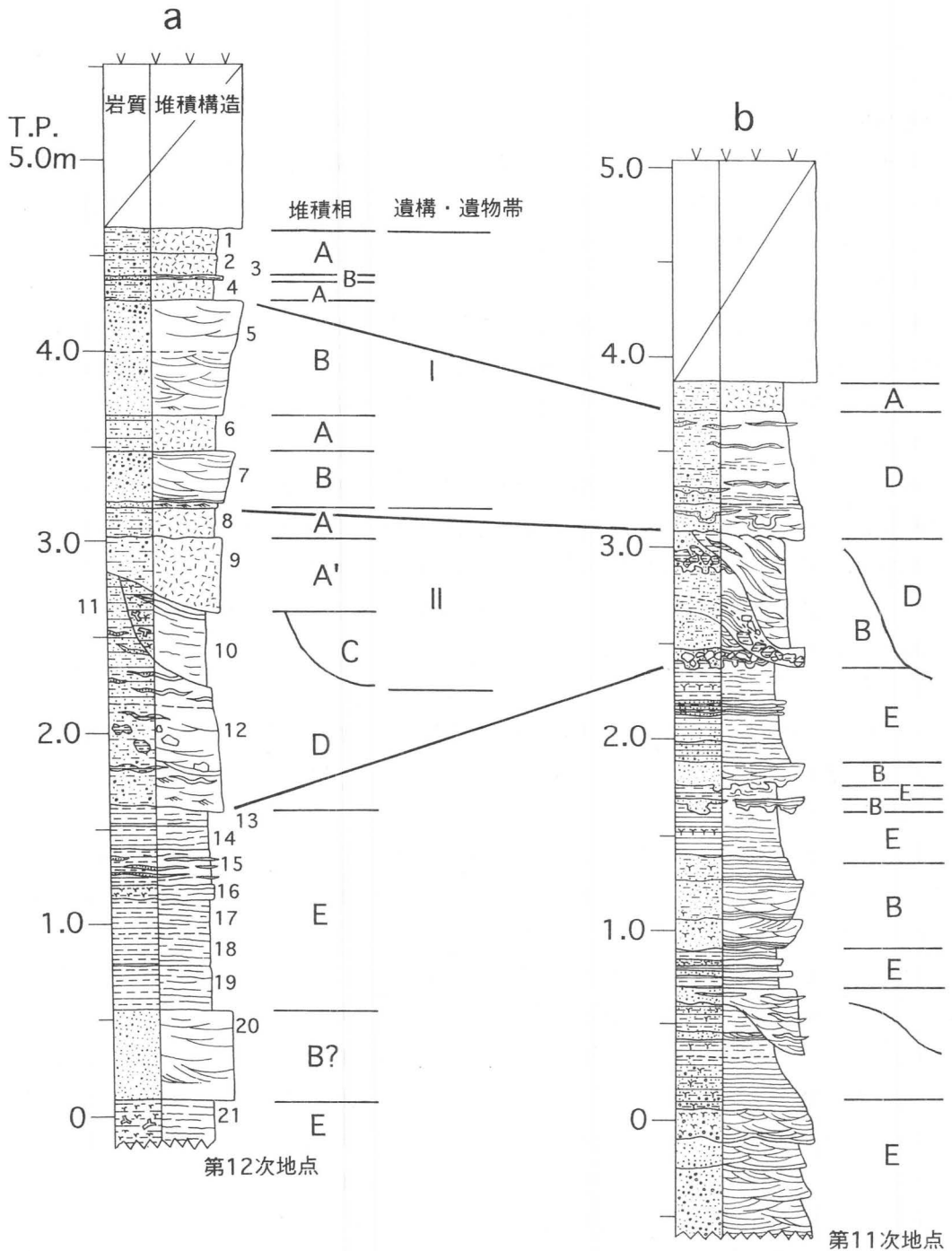
以上の堆積相は観察した断面の下位より、E-B?-E-D-C-A'-A-B-A-B-A-B-Aの順で累重する。この中にはおおむね3つの堆積環境の変遷段階がみとめられる。調査地における狭い範囲での解釈を以下に述べる。

第1段階(堆積相E-B?-E、T.P.0～1.7m)

自然堤防の後背湿地で、人間活動の痕跡をほとんどとどめない。継続期間の短い河川や、洪水の掃流によって、しばしば砂礫が堆積した。水位や流速、周辺の植生の変化によって異地性および現地性の植物遺体が増加する時期があった。年代は弥生時代後期頃から鎌倉時代と推定されるが、考古遺物が出土しなかったため確実ではない。(また、上部は河川堆積物で侵食されているので、ここで鎌倉時代というのは、実際の堆積物の年代ではない。)

第2段階(堆積相D-C-A'-A、T.P.1.7～3.0m)

後背湿地の排水河川の周辺を改変し、耕作地造成などの開発がおよび始めた。この河道内の堆積物(堆積相D)の粒度からみても、また後述するように、第11次調査地点の同時期の堆積層を考慮しても、周辺ではたびたび外水氾濫による洪水で運ばれた砂礫が堆積を繰り返していたと考えられる。同相にみられる上方細粒化は、河道が周辺より低い凹地として残存したことを想像させる。この場所に耕作地の排水を目的としたかのような溝状の落ち込み(井路)が掘られ、やがて新たな耕作地造成に際してこの凹地が埋め立てられる。上記の溝状落ち込みからは、14



第21図 池島遺跡第11次・第12次調査地点の柱状図と層序対比

世紀代の土師器皿や瓦器碗の破片が出土した。このことから、同地点での開発初期の年代を鎌倉時代頃(13世紀)、耕作地となる年代を室町時代(14・15世紀)と推定する。

第3段階(堆積相B-A-B-A-B-A、T.P.3~4.7m)

耕作地造成後、これを維持する段階にはいる。調査地西方を北流していた玉串川の河道はすでに固定され、河内湖の埋積の進行に伴い河口が遠ざかることによって、天井川化が進んだとも考えられる。外水氾濫時には、もっぱらクレバススプレー堆積物が耕作地を覆うことになった。このような場所で再び耕作地が復旧され、さらに耕作土が載るような、堆積層の交替が調査地では3回みとめられる。想像の域を出ないが、このサイクリックな累重様式から、破堤場所(クレバス)がある程度固定されていたのではないかとも思われる。出土遺物がないため、この段階の年代は明確ではないが、前段階の下位層の年代が14、15世紀と考えられることと、最上部に盛土直前の現代の耕作土が載ること、また旧大和川付け替え後(1704年以降)には多量のクレバススプレー堆積物の堆積は考えにくいことから、この段階の堆積物はおもに16世紀から18世紀までのものと考えられる。

3.4 遺構・遺物帯

上述した調査地点の堆積サクセッションにおいて、上位より次の2つの遺構・遺物帯がみとめられた。

1. 砂質粘土質シルト [5G2/1 青黒色]
2. 砂質粘土質シルト [2.5GY3/1 暗オリーブ灰色]
3. 極細粒砂~粗粒砂 [5Y4/3 暗オリーブ色]
4. 砂質粘土質シルト [5Y3.5/1 灰色]
5. 細粒砂~礫まじり極粗粒砂 [5Y5.5/4 オリーブ黄色]
6. 砂質粘土質シルト [10GY3.5/1 暗緑灰色]
7. 極細粒砂~礫まじり極粗粒砂 [5Y6/3 オリーブ黄色]
8. 砂質粘土質シルト [7.5GY4/1 暗緑灰色]
9. 細礫まじり砂質粘土質シルト [5Y3.5/1.5 灰オリーブ色]
10. 植物遺体(やや泥炭質)まじりシルト質粘土 [2.5Y2.5/1 黒褐色]
11. 上部:砂質シルト(中粒砂~極細粒砂) [2.5Y3/2.5 暗オリーブ褐色]
下部:シルト質砂(粗粒砂~極細粒砂) [2.5Y3/2.5 暗オリーブ褐色]
12. シルト質砂(細粒砂~極細粒砂) [5Y3.5/1 灰色]
13. わずかにシルト質粘土 [7.5Y4.5/1 灰色]
14. わずかにシルト質粘土 [5G5/1 緑灰色]
15. シルト質粘土と極細粒砂の葉層の互層
16. 植物遺体(泥炭質)シルト質粘土 [2.5Y2.5/1 黒褐色]
17. わずかにシルト質粘土(炭酸カルシウム結核含む) [10GY4/1 暗緑灰色]
18. わずかにシルト質粘土 [7.5Y4/1 灰色]
19. シルト質粘土(有機物に富む) [7.5Y4/1 灰色]
20. 中粒砂~極粗粒砂 [5GY4/1 暗オリーブ灰色]
21. 植物遺体(泥炭質)まじりシルト質粘土 [5Y2.5/1 オリーブ黒色]

* 岩質はおおむねFolk and Ward(1957)の表示法に従い、適宜改変。色調は小山・竹原(1988)におけるマンセルシステムに従った。

第4表 堆積層(単層)の岩質と色調

遺構・遺物帯Ⅰ(1～7層、T.P.4.7～3.2m)

本帯では堆積層の時期を特定しうる遺物が採集されなかった。また、明確な遺構は確認されなかったが、上位より少なくとも4枚の耕作土層がみとめられる。耕作土層には鋤溝・畦畔・用水路などの遺構が各層に伴うものと考えられる。各層の年代が詳しくわかれば、さらに分帯することができるが、ここでは近世から現代までを一括しておく。

遺構・遺物帯Ⅱ(8～10層、T.P.3.2～2.2m)

本帯は、14世紀代の土師器皿と瓦器碗の破片が少量出土した溝状落ち込み内の堆積土とその上位の埋土、およびその上に載る耕作土層に相当する。溝状の落ち込みは、調査地北辺をやや南東-北西方向に振るほぼ東西方向に延びていると推定された。深さは最深部で約0.8m、幅は不明。これに南より直交する溝がみとめられた。深さ0.4m、幅0.8mであった。また、本帯上部の耕作土層上面より打ち込んだと考えられる杭が1本みとめられた。

3.5 池島遺跡第11次調査地点との層序対比

ここでは、1992年度に行った池島遺跡第11次発掘調査地点(以下「11次地点」「12次地点」と呼ぶ。)と今回の調査地点との層序対比を行い、前回の報告(松田、1994)の地形発達についての推測を一部修正しておきたい。第21図bは11次地点の柱状図である。

11次地点の堆積サクセッションを今回の調査地点の層序にならひ、堆積環境変遷の3段階を踏まえて、年代層序的に区分すると、まず、両地点の柱状最下部では、11次地点30・31層と12次地点21層上部ないし20層が弥生時代後期頃の層準として対比しうる。この層準より上に、11次地点10層上部と12次地点12層下面の層準までが古墳時代から13世紀頃(第1段階)、さらに、この層準から上に、11次地点6層上面と12次地点8層の層準までが13世紀以降の中世全般(第2段階)、この層準より上は近世から現代まで(第3段階)と区分できる。

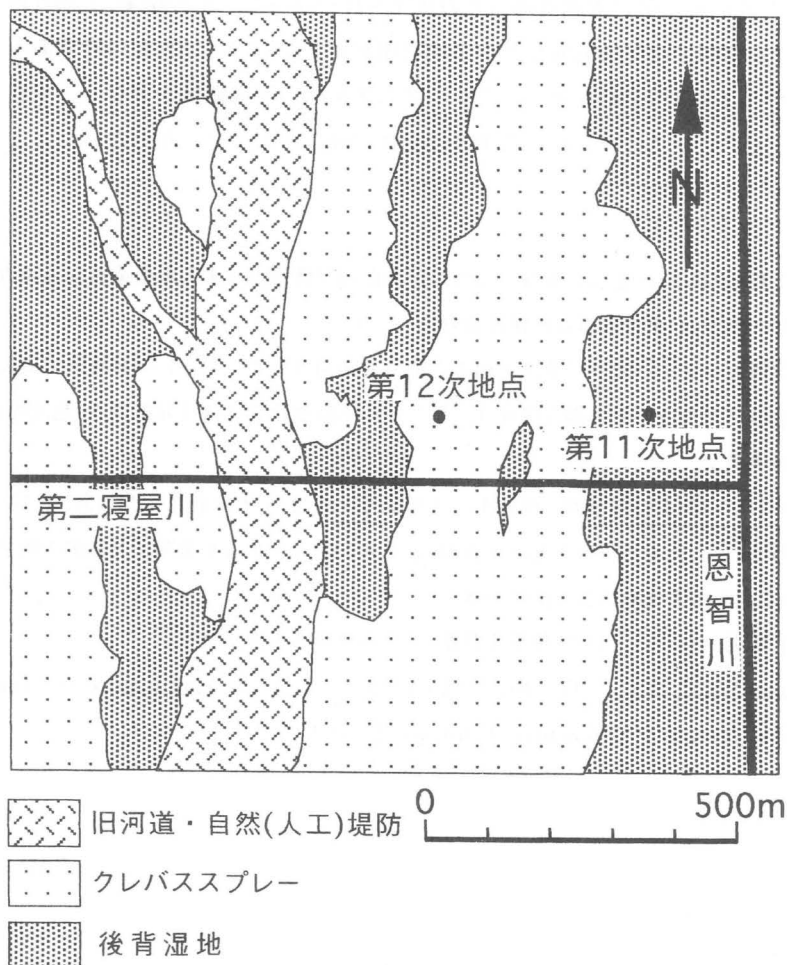
各段階を追って、両地点の層相を比較すると、弥生時代後期頃には、11次地点では砂礫からなる河道堆積物、12次地点ではおもに泥からなる湖沼の堆積物がみられる。前者は後者のような、水深の浅い湖沼ないしは後背湿地の泥質堆積物をいくぶん下刻するか、それと同時に異相で堆積したものと考えられる。その後11次地点では、河道は埋積されると同時に、他所で新たな河道が形成されたのであろう。この上の13世紀頃までは、両地点ともに、自然堤防の後背湿地の堆積環境下にあったと考えられるが、11次地点では、砂礫からなるクレバススプレー堆積物がしばしば挟まれるのに対して、12次地点では最下部に中粒砂層が挟まれるだけで、13世紀頃までは泥質堆積物の堆積が継続する。また、両地点で本格的に人手が加わる13世紀以降の第2段階に11次地点では、耕作地の基底を構成するとともに、耕作地を覆うようなクレバススプレー堆積物がより頻繁に堆積する。このような層相に対して、12次地点ではむしろ後背湿地の排水路的な流路堆積物(11・12層)が発達し、さらに地下水位を下げるためと思われる溝状の落ち込みが掘られる。この両地点の層相は後背湿地における「堆積システム」としての耕作地内の同時異相とみなすことができる。

この両地点の同時異相の位置関係は、中世末から近世にかけては逆になっている。すなわち、

11次地点では排水路的な層相を示すのに対して、12次地点では耕作土とともにクレバススプレー堆積物が累重する。すでに述べたように、これらはおもに近世のものと考えられる。このことから、クレバススプレー堆積域が中世には現代の恩智川寄りにあり、近世には玉串川寄りに移動していたと考えられる。

両地点の最も新しい耕作土上面の高度差は、0.8mで12次地点のほうが高い。その原因は同地点に中世末から近世にかけて堆積したクレバススプレー堆積物と耕作土の累重であることは確かである。ここで、改めて12次地点一帯のクレバススプレー堆積地形を1961年(昭和36年)の空中写真を実体視して観察した。その結果、旧玉串川の堤防の高まりにロウブ状に付随したり、枝分かれして延びるクレバススプレー堆積地形の高まりが幾つかみとめられた。12次調査地点は八尾市福万寺の集落付近から北北東に延びる高まりの上に位置する(第22図)。この地点と周辺の低所との比高を2,500分の1地形図の標高単点で読むと0.7~0.3mあった。

上述のような層序対比と地形観察の結果、松田(1994, p.65)では11次地点のクレバススプレー



第22図 玉串川自然堤防とクレバススプレー

堆積時期と、玉串川自然堤防の東側の12次地点が位置するクレバススプレー堆積地形の発達時期とを、同じく中世(室町時代、第2段階)だと考えたが、後者は中世末から近世に形成されたものと修正する。ただし、堆積相解析・堆積環境の解釈についての変更はない。また、11次地点の3、4、5層がおおむね近世の堆積層であることも変更ない。なお、11次地点の13世紀頃のクレバススプレー堆積物の斜交葉理から知られた古流向は西から東であったから、現代の地表の起伏には現れておらず、11次地点より西側で12次地点を東側へ迂回するようなクレバススプレーの堆積域があったと推測される。

4 まとめ

池島遺跡の範囲の北西端付近で行った第12次発掘調査では、立会調査ではあったが、中世から現代までの耕作地跡、13世紀頃の溝状の落ち込み、杭などが検出され、瓦器碗・土師器皿破片などの遺物も採集された。また、調査地点の地層断面の堆積相を検討し、同地点から東に約350m隔たった池島遺跡第11次調査地点との層序対比を試みた。その結果、(1)調査地周辺の池島遺跡北辺部で本格的な耕作地造成などの土地利用が始まるのは、13世紀以降であること、(2)中世以前と近世では玉串川を給源とするクレバススプレーの形成領域が異なり、現在玉串川の東に南北に延びるクレバススプレーの高まりは近世に発達したこと、がわかった。

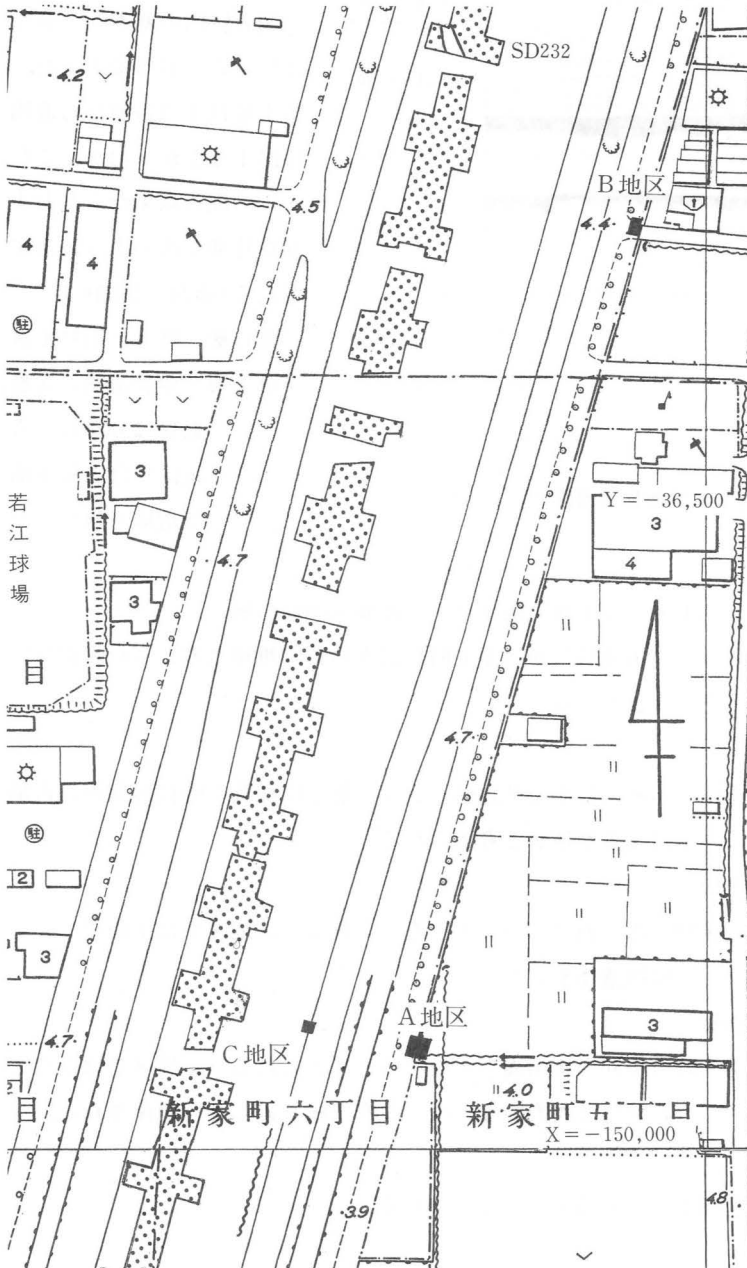
文献

- 阿部嗣治・上野利明(1981)北島池遺跡・池島遺跡発掘調査概報。「東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集—1980年度」。東大阪市遺跡保護調査会、p.31—72。
- (財)大阪文化財センター(1991)「池島・福万寺遺跡発掘調査概要—89—1~6調査区の概要」。
- 岸本道昭(1986)「池島遺跡発掘調査概要II—恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査(越流堤部その1)」、大阪府教育委員会、p.23・25。
- 阪田育功(1986)「池島遺跡発掘調査概報I—八尾福万寺地区」、大阪府教育委員会、p.49—50。
- 松田順一郎(1994)池島遺跡第11次発掘調査報告、「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1992年度」、(財)東大阪市文化財協会、p.49—68。
- 小山正忠・竹原秀雄(1988)「新版 標準土色帖」、日本色研事業株式会社。
- Folk, R.L. and Ward, W.C. (1957) Brazos River: a Study in the Significance of Grain Size Parameters. *Journal of Sedimentary Petrology*, 27, 3-26.

第7章 山賀遺跡第6次調査報告

1 はじめに

今回の調査は若江南町3丁目・5丁目地内の公共下水道築造工事第19工区に伴うものである。築造工事が推進工法であるため、調査を発進坑1個所と到達坑2個所について実施した。行政



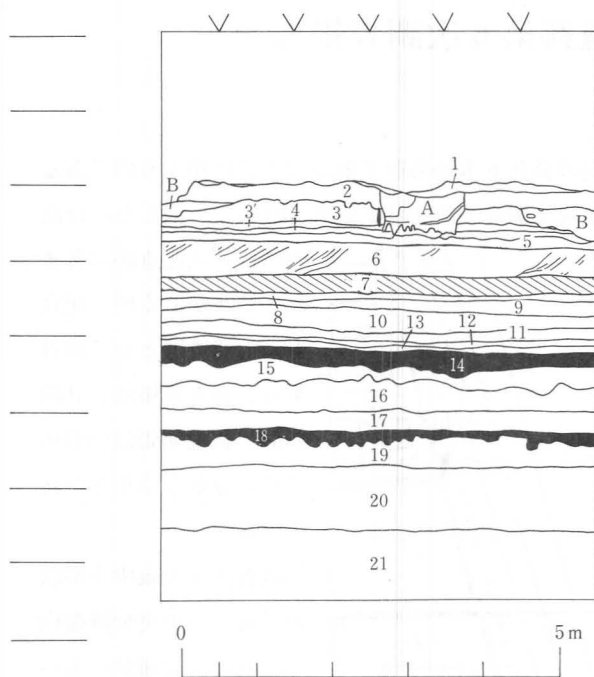
第23図 山賀遺跡第6次調査地位置図(S=1/2500)

的には若江北遺跡に含まれる個所があるが、便宜上、山賀遺跡として報告する。調査面積は合計約93㎡、調査期間は1992年11月13日から93年2月16日である。

調査地は大阪中央環状線歩道上や中央分離帯内に位置し、交通量の多い車道に近接しているところから一部は夜間の調査となった(第23図)。調査地に隣接する近畿自動車道橋脚部分では大阪文化財センターによって発掘調査が実施され、弥生時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が発見されている⁽¹⁾。

調査は1段目の切梁設置した後、各層を人力と機械の併用で掘削し、各層上面で遺構検出を試みた。

なお水準高はT.P.値を、実測の基準には国土座標第VI系を用い、基準点の設置は株式会社サンヨー



第24図 山賀遺跡第6次A地区土層図(S=1/100)

に委託した。土色は『標準土色帖』に準じたが、夜間調査では主観によった。

2 調査概要

1) 基本層序

調査区内の基本的な層序は以下のとおりであった。第I層以下の各層から遺物は出土しなかったが、これまでの調査結果からおおまかな時期が次のように推定される(第24・25図)。

第0層 盛土・旧耕土層。

第I層 中世遺物包含層。

数層に分かれ、A地区では各層上面で遺構を検出した。

耕作土層と考えられる。

第II層 暗青灰色中粒砂混粘土～シルト層・灰オリーブ粗砂～中粒砂層。

A地区でのみ観察された。古墳時代から平安時代にかけての堆積と考えられ、湿原的な環境であったことをうかがわせる。

第III層 黄色中粒砂層。

若江遺跡の中世遺構群のベースになる黄色砂～シルト層と同様弥生時代後期から古墳時代前半にかけての洪水による堆積層と考えられる。

第VI層 オリーブ黒色粘土層

若江遺跡の弥生時代後期の水田面に相当すると考えられる。A地区では上面でピット状の遺構等を検出した。植物遺体を含む。

第V層 数層の粘土層・砂層

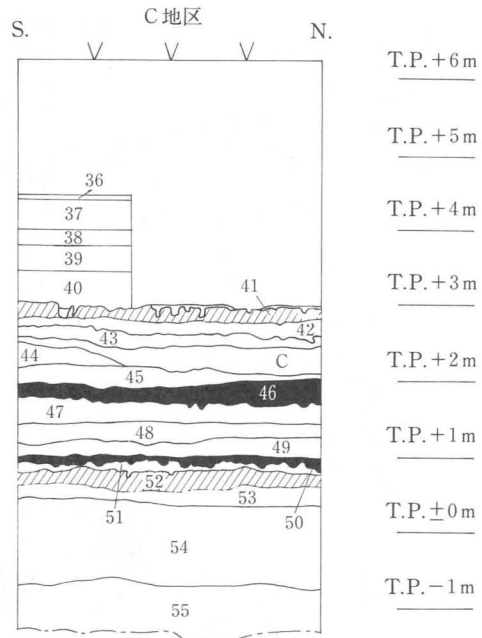
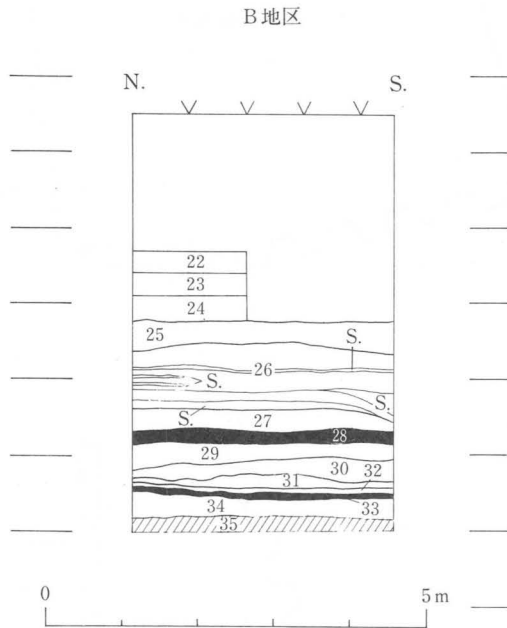
各粘土層の上面は弥生時代中期の水田面を形成すると考えられる。C地区では落ち込みを確認した。洪水による廃絶と人為的な復興、改変を繰り返したと想像される。

第VI層 緑黒色粘土層

弥生時代前期の水田耕土層に相当すると考えられる。

第VII層 黒色粘土層

植物遺体を含み、縄文時代晩期の自然堆積層と考えられる。



A 地区

- 1 7.5Y5/1 灰色砂混粘質シルト(第I層)
- 2 10YR5/8 黄褐色中粒砂(鉄分沈着)(第I層)
- 3 5G5/1 灰色細砂~粘土(鉄分沈着)(第I層)
- 3' 3層と同色同質(上面に植物遺体層)(第I層)
- 4 5B4/1 暗青灰色中粒砂混粘土~シルト(第II層)
- 5 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂~中粒砂(第II層)
- 6 10Y7/1灰白色中粒砂(ラミナ顕著)(第III層)
- 7 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土(植物遺体層)(第IV層)
- 8 青灰色粘土(第V層)
- 9 灰色粘土(第V層)
- 10 灰色細砂(第V層)
- 11 灰褐色砂混シルト質粘土(第V層)
- 12 灰色中粒砂(第V層)
- 13 5G2/1 緑黑色粘土(第VI層)
- 14 N2/ 黒色粘土(第VII層)
- 15 10GY4/1 暗緑灰色シルト(第VIII層)
- 16 7.5GY4/1 暗緑灰色中粒砂~細砂(第VIII層)
- 17 10G4/1 暗緑灰色粘土(植物遺体層)(第VIII層)
- 18 5Y3/1 オリーブ黒色粘土(植物遺体含)(第VIII層)
- 19 10Y4/1 灰色粘土(植物遺体含)(第VIII層)
- 20 7.5Y5/1 灰色粗砂~中粒砂(河川)
- 21 7.5Y4/1 灰色粗砂~中粒砂(第X層)
- A 2層のブロックと3層のブロックと黄色砂の混合土(中世遺構)
- B 砂混粘土~シルトと中粒砂ブロックと3層のブロックとの混合土(中世遺構)

B 地区

- 22 茶褐色から青灰色砂混砂質シルト(第I層)
- 23 茶褐色シルト~粘質シルト(第I層)
- 24 黒色砂~粘土(第II層)
- 25 2.5Y8/8 黄色粗砂~中粒砂(第III層)

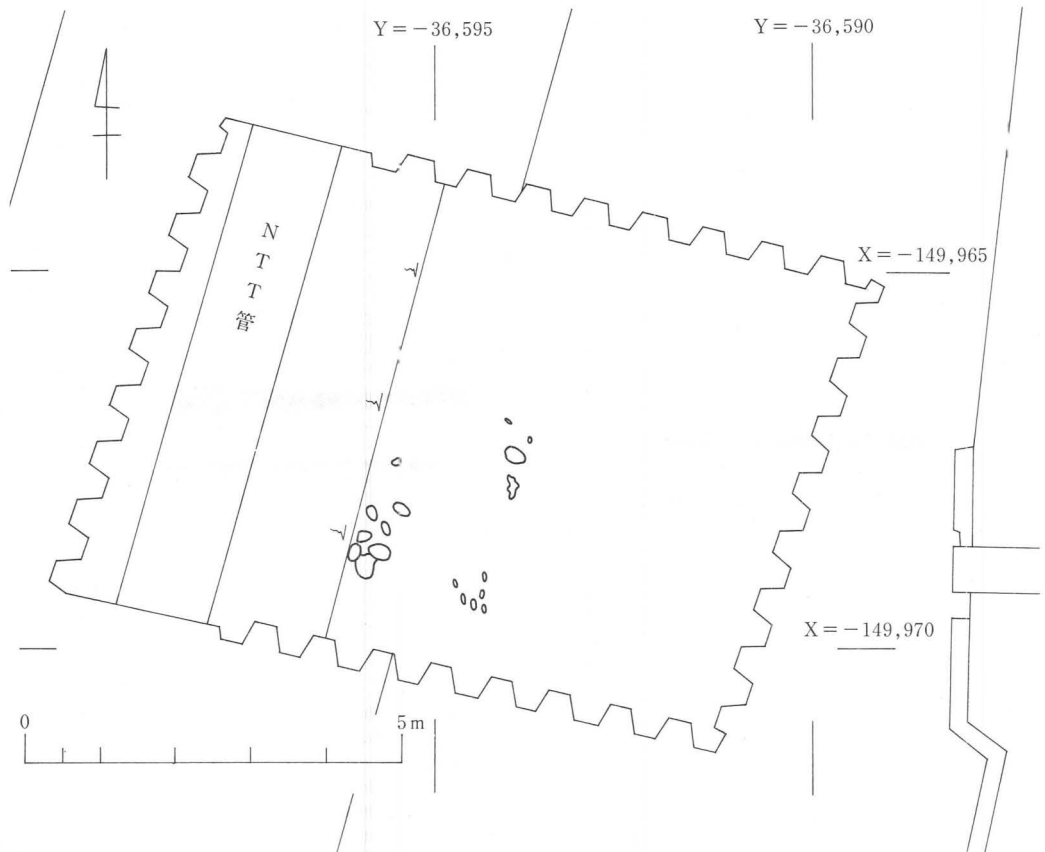
- 26 10GY5/1 緑灰色中粒砂~シルト・粘土の互層(河川)

- 27 N3/暗灰色粘土(第VI層)
- 28 N2/ 里色粘土(第VII層)
- 29 10GY4/1 暗緑灰色細砂~シルト(第VIII層)
- 30 5G7/1 緑灰色細砂~砂質シルト(第VIII層)
- 30 10G6/1 緑灰色シルト質粘土(第VIII層)
- 32 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土(第VIII層)
- 33 5Y2/1 黒色粘土(第VIII層)
- 34 10G4/1 暗緑灰色粘土~細砂質シルト(第VIII層)
- 35 2.5Y5.2 暗灰黄色シルト~粘土(植物遺体層)(第IX層)

C 地区

- 36 2.5Y7/4 浅黄色砂混粘土(第I層)
- 37 2.5Y8/8 砂混砂質シルト(第I層)
- 38 2.5Y5/4 黄褐色粘土~細砂(第I層)
- 39 2.5Y6/1 黄灰色粘土と細砂の互層(植物遺体含)(第II層)
- 40 5Y3/6 オリーブ黒色細砂~シルト(第III層)
- 41 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土(植物遺体層)(第IV層)
- 42 5BG4/1暗青灰色粘土(第V層)
- 43 10YR4/1 灰色粘土(第V層)
- 44 灰色細砂と粘土の互層(第V層)
- 45 5G2/1 緑黑色粘土(第VI層)
- 46 N2/ 黒色粘土(第VII層)
- 47 10G7/1 暗緑灰色細砂~シルト(第VIII層)
- 48 5G5/1 緑灰色中粒砂~細砂(第VIII層)
- 49 10G6/1 緑灰色粘土(植物遺体含)(第VIII層)
- 50 N1.5/ 黒色粘土(第VIII層)
- 51 5Y3/1 オリーブ黒色粘土(第VIII層)
- 52 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土(植物遺体層)(第IX層)
- 53 N7/ 灰色中粒砂~細砂(河川)
- 54 N7/ 灰色粗砂~シルト(河川)
- 55 7.5Y4/1 灰色粗砂~中粒砂(第X層)
- C 7.5Y4/1 灰色粘土(細砂ラミナが水平に入る)(落ち込み)

第25図 山賀遺跡第6次B・C地区土層図(S=1/100)



第26図 山賀遺跡第6次調査A地区第IV層上面平面図(S=1/100)

第Ⅷ層 緑灰色粘土～シルト層・中粒砂～砂質シルト層・粘土層

黒色粘土層

暗緑灰色から灰色粘土～細砂質シルト層

植物遺体を含み、縄文時代の湿原あるいは氾濫原的な状況下の堆積と考えられる。

第Ⅸ層 暗灰黄色粘土～シルト層

植物遺体を含み固くしめる。B地区にのみ確認されたが、若江北遺跡第5次調査では各地区で確認される。A地区とC地区では灰色中粒砂～粗砂層が堆積する自然河川が存在する。縄文時代の堆積と考えられる。

第Ⅹ層 灰色中粒砂～シルト層。

蟹の生痕化石である蟹穴が確認され、干潟状況下の堆積と考えられる。第Ⅷ層の黒色粘土層(縄文時代晩期)以下の各層は調査地全体に均一な連続的の分布を示し、人為的の改変を受けていない。

2) A地区

本地区は東大阪市と八尾市の境界線付近に位置する。中世遺物包含層は4層に分けられ、2面の遺構面で溝や土壌を検出した。これらは耕作に伴う水路等と考えられる。遺構内から土器

は出土しなかった。調査区東端の包含層中から子持壺等の須恵器が集中して出土した(第27図)。耕作時に投棄されたものと考えられる。

最下層の包含層からは瓦器碗の破片(第27図9)と鉄製品(第27図8)が出土した。瓦器は口径12.6cm、器高2.2cm以上を測るが、小片のため不安がある。高台は付かない。外面に指頭痕を残し、内面には粗い暗文がある。胎土は白く精良で、焼成は須恵器のように堅く良好である。鉄製品は残存長9.7cmを測る轡の一部と思われるものである。錆の付着が著しい。出土した瓦器から、中世包含層は14世紀以降に形成されたと考えられる。

第Ⅳ層上面(弥生時代後期)では径30cm以下のピットと直径約5cmの小穴を多数検出した。

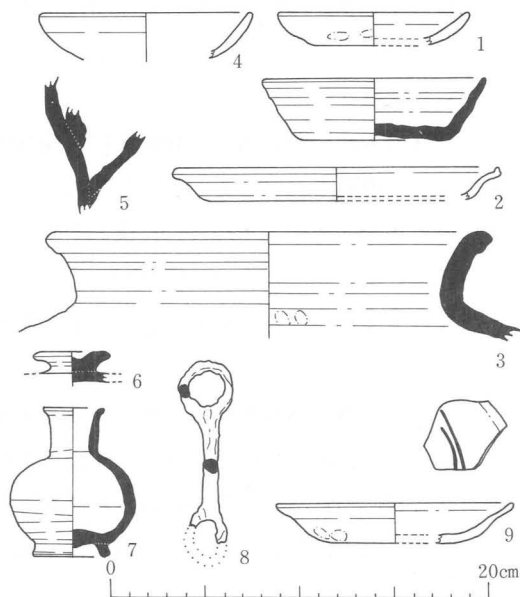
柱穴等の痕跡は確認できず、遺物は出土しなかった(第26図)。性格は不明である。

第Ⅸ層(縄文時代)は灰色中粒砂～粗砂層となっており、自然河川の一部と考えられる。調査区外にのび規模や形状は不明である。遺物は出土しなかった。⁽²⁾

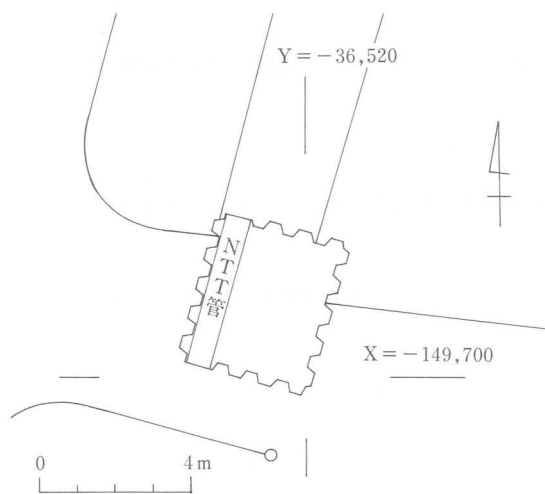
3) B地区

本地区はA地区から北へ約270mの地点で、若江北遺跡の範囲内に位置する(第28図)。NTTの既設管等により攪乱が著しく、上部は柱状図を作成したにとどまる。

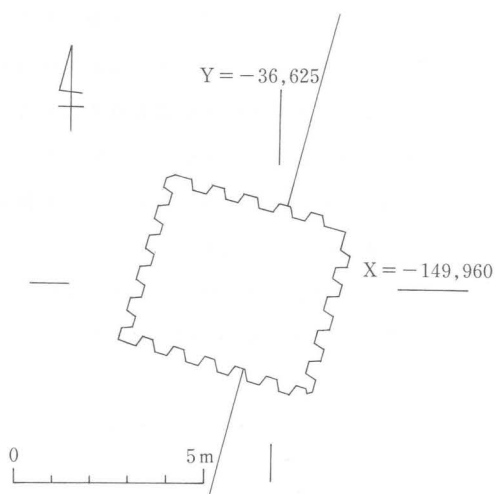
第Ⅲ層から第Ⅵ層の間は緑灰色の砂やシルト、粘土が互層状に堆積し、自然河川と考えられる。規模や形状は調査区外にのび、不明である。近畿自動車道建設に伴う調査で検出されてい



第27図 A地区出土遺物(S=1/4)



第28図 B地区位置図(S=1/200)



第29図 C地区位置図(S=1/200)

るSD110(弥生時代前期)、もしくはSD232(弥生時代中期)の一部と推定される。遺物は出土しなかった。⁽³⁾

4) C地区

本地区はA地区から西へ約40mの中央環状線中央分離帯内に位置する(第29図)。当初、既設管によって攪乱されていると思われており、立会調査の予定であった。しかし、機械掘削を開始すると現地表下約2m以深には攪乱が及んでおらず、急速、機械掘削による土層断面の調査を行った。

第Ⅳ層上面(弥生時代後期)ではピットと思われる遺構を確認した。A地区と同様の状況であったと考えられる。

第Ⅴ層中に落ち込みを検出した。深さ約30cm、南北4m以上を測る。東西の規模は不明である。水田の一部とも想像されるが、性格は不明である。遺物は出土しなかった。

第Ⅸ層(縄文時代)は灰色中粒砂～粗砂層となっており、A地区と同様に自然河川の一部と考えられる。調査区外にのび規模や形状は不明である。遺物は出土しなかった。⁽⁴⁾

3 まとめ

今回の調査では現地表面下約8mまでの地層を観察することができた。古墳時代以前の土器は出土しなかったが、これまで行われた調査結果等から、各堆積層の年代を推測することができた。

若江北遺跡第5次調査でも同様な堆積状況が確認され、調査地周辺が遺跡の縁辺部であると推定される。この点については若江北遺跡第5次調査の結果をあわせて述べることにしたい。

註)

- (1) 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター『山賀(その1) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1983
大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター『山賀(その2) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1983
- (2) 八尾市域における発掘調査でも確認されている。
財団法人八尾市文化財調査研究会「山賀遺跡第1次調査(YMG93-1)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1994
- (3) 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター『若江北 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1983
- (4) (2)に同じ。

第8章 山賀遺跡第7次調査報告

1 はじめに

今回の調査は公共下水道築造工事第39工区に伴うものである。築造工事が推進工法であるため、調査は約2.5×5.1mの発進坑(約13m²)1個所について実施した。期間は中断を含め1993年2月8日から2月25日である。

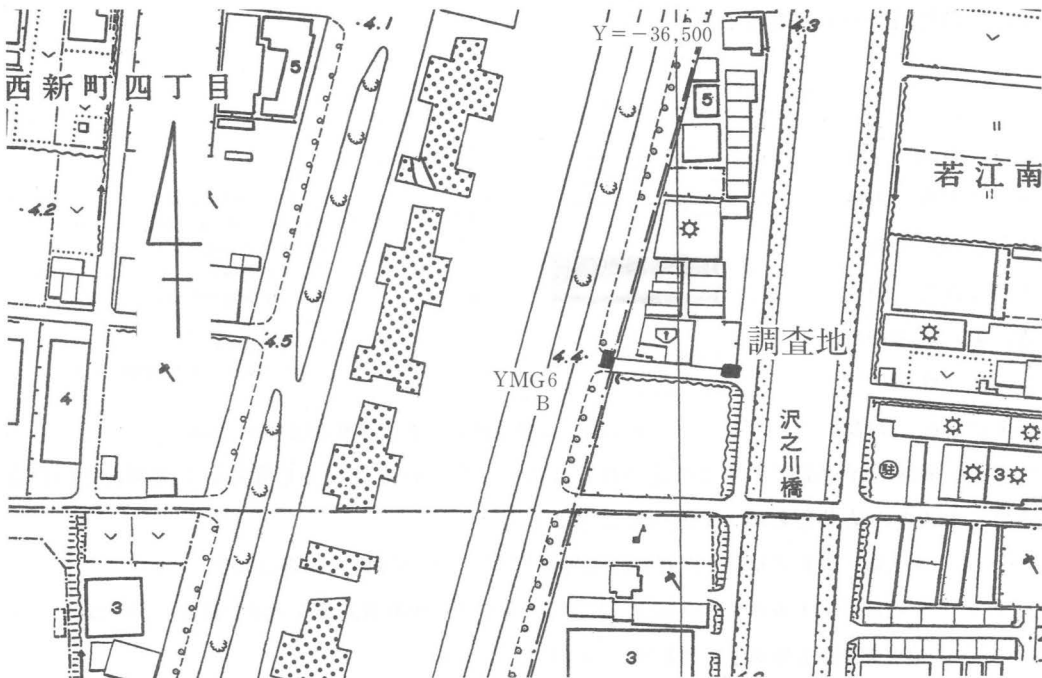
調査地は第二寝屋川の左岸に位置し(第30図)、山賀遺跡第6次調査のB地区から約50m東にあたる。本来ならば若江北遺跡の範囲内であるが、第6次調査との関係上、山賀遺跡として報告する。これまでの調査結果から遺構や遺物の希薄な地域と考えられるため、調査は機械によって各層を掘削し、断面を精査するにとどめた。なお水準高はT.P.値を用い、基準点の設置は行わなかった(第31図)。土色は『新版標準土色帖』による。所在は若江南町3丁目である。

2 調査概要

調査区が第二寝屋川の堤防付近であるため盛土が厚いと考えられていたが、約70cmにすぎなかった(第32図)。若江中学校付近の近世遺構面がT.P.+3から4m前後で検出されており、調査地付近が現代にかさ上げされたものではないことが注目される。⁽¹⁾

第2層は旧床土で近世の堆積と想像されるが、遺物が出土していないため不明である。

第5層の灰色砂質シルト層上面で、溝あるいは土塋と考えられる遺構を検出した。前述のよ



第30図 山賀遺跡第7次調査地位置図(S=1/2500)



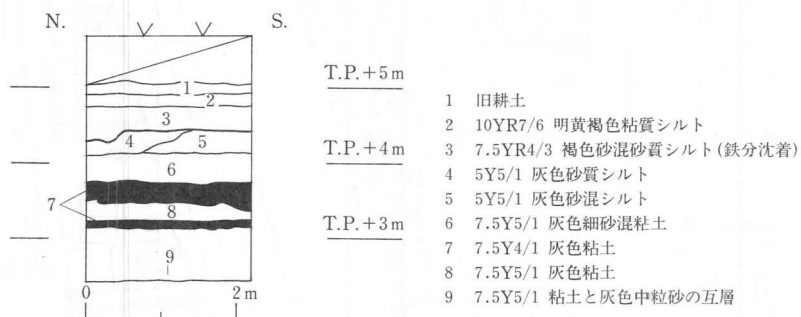
第31図 山賀遺跡第7次調査区位置図(S=1/100)

うに機械で掘削したため、平面の規模や形状は不明である。第5層から土師質皿細片が出土しており、中世の遺構と考えられる。遺物に凶化可能なものはなく、詳細な時期は不明である。土質から第2層から5層までが耕作土と思われ、遺構は耕作に伴うものと考えられる。

第6層から第9層までは、流水による堆積層と考えられ、遺物は出土しなかった。周辺の調査結果から弥生時代の堆積層と推定される。第7層は下部の土色が薄く灰色を呈しているが、上部の黒色層と同一の堆積と思われる。

3 まとめ

今回の調査では弥生時代からの堆積層を確認することができた。山賀遺跡第6次調査⁽²⁾でも同様な堆積状況が確認され、調査



第32図 山賀遺跡第7次土層断面図(S=1/100)

地周辺が遺跡の縁辺部であると推定される。この点については若江北遺跡第5次調査と山賀遺跡第6次調査の結果をあわせて述べることにしたい。

註) (1) 東大阪市教育委員会「山賀遺跡発掘調査報告」『山賀遺跡発掘調査概要』1990

財団法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1992年度—』1994

(2) 本書第7章

第9章 若江北遺跡第5次調査報告

1 はじめに

今回の調査は若江西新町4丁目・5丁目地内の公共下水道築造工事第12工区に伴うものである。推進発進坑と到達坑の5個所(合計面積約88m²)については現地表下約6.5mまで、開削工法部分(面積約243m²)は現地表下約1.5mまで調査を実施した。行政的には山賀遺跡に含まれる個所があるが、便宜上、若江北遺跡として報告する。調査総面積は約331m²、調査期間は1992年11月4日から93年5月28日である。

隣接する近畿自動車道



第33図 若江北遺跡第5次調査調査地位置図(S=1/2500)

橋脚部分では大阪文化財センターによって発掘調査が実施され、弥生時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が⁽¹⁾発見されている。

調査は各層を人力と機械の併用で掘削し、各層上面で遺構検出を試みた。実測の基準には国土座標第VI系とT.P.値を用い、基準点の設置は株式会社サンヨーに委託した。土色は『標準土色帖』に準じた。

2 調査概要

1) 基本層序

A・B・C地区の層序の概略は上層から順に次のとおりである。ただし、堆積は複雑で正確に把握できたとは言い難い。過去の調査結果等から、おおまかに各堆積層の時期が推定される。なお、D地区は山賀遺跡の範囲内に位置し、層序は山賀遺跡第6次調査の結果を⁽²⁾準用する。

第0層 盛土・旧耕土層。

第A層 中世遺物包含層。

数層に分かれ、各層境が遺構面と考えられる。A地区では遺構を検出した。耕作土層と考えられる。

第B層 灰色シルト～粘土層(植物遺体含)。

古墳時代から平安時代にかけての堆積と考えられ、湿原的な環境であったことをうかがわせる。

第C層 緑灰色粘土層。

C地区にのみ観察された。弥生時代後期頃の堆積と思われる。

第D層 黒色砂混シルト～粘土層(植物遺体層)。

B地区では弥生時代後期土器が出土しており、同時期の堆積と考えられる。C地区にはみられず、北へ向かって第E層に収斂するものと考えられる。

第E層 緑黒色中粒砂～粘土層。

C地区にのみ確認された。弥生時代中期の遺物を包含し、下面で遺構を検出した。

第F層 黄色から灰色中粒砂～細砂層。

弥生時代中期遺構のベースとなる。弥生時代中期の洪水による堆積層と考えられる。

第G層 緑灰色中粒砂～粘土層。

粘土層・砂層の互層。

灰色シルト層。

各層境が弥生時代中期の遺構面もしくは水田面である可能性が高い。

第H層 黒色粘土層(植物遺体層)。

植物遺体を含み、縄文時代晩期の自然堆積層と考えられる。

第I層 オリーブ黒色粘土層(植物遺体を含む)

植物遺体が水平の縞状に含まれ、固くしまる。A地区では砂層が堆積する自然河川

が存在する。縄文時代の堆積と考えられる。

第J層 暗オリーブ灰色粗砂～細砂層。
干潟状況下の堆積と考えられるが、山賀遺跡第6次調査で観察された蟹穴(生痕化石)がみられず、自然河川の一部とも考えられる。

第H層の黒色粘土層(縄文時代晩期)以下の各層は調査地全体に均一な連続的の分布を示し、人為的改変を受けていない。当時は湿原的な状態のなかで河川の氾濫もしくは大量の土砂の堆積が繰り返されたものと考えられる。

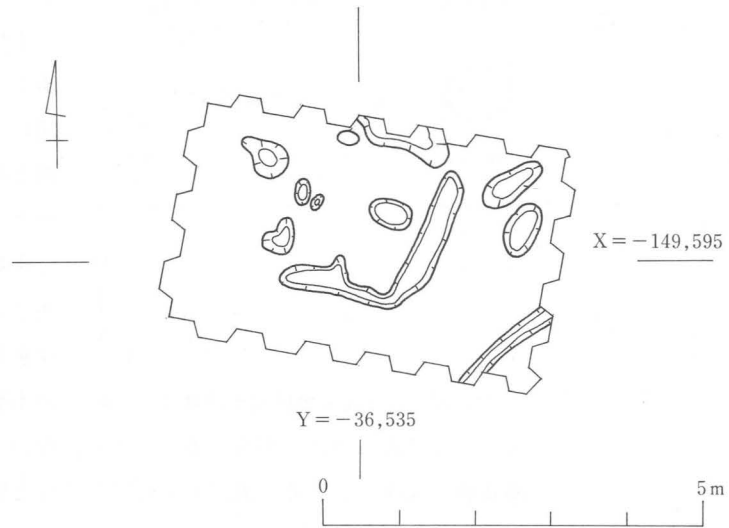
2) A地区

本地区は山賀遺跡第6次調査のB地区から約100m北の中央環状線中央分離帯内に位置する。

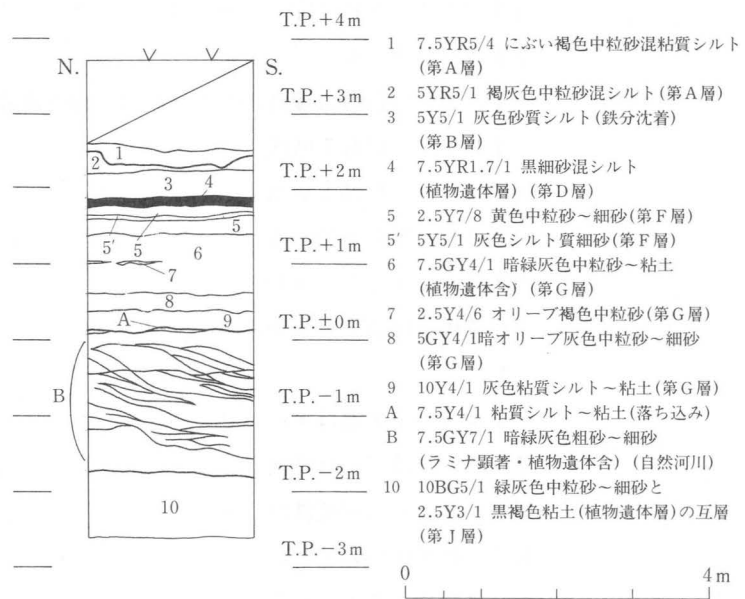
第A層(中近世)中の遺構面では幅約2m、深さ約20cmを測る東西方向の溝を1条検出した。耕作に伴うものと考えられる。土器が出土していないため詳細な時期は明らかではない。

第F層下面(弥生時代中期)で南北方向の緩やかな高まりを、第G層中(弥生時代中期)では足跡状の凸凹を検出した。ともに形状が不明確であるため遺構とは断言できない。

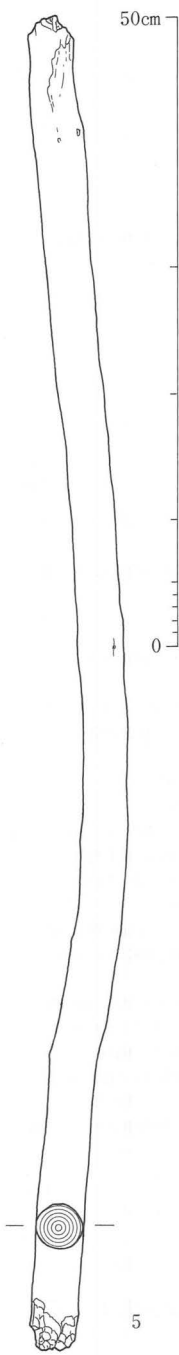
本地区下半には植物遺体層が縞状に入る砂層が堆積していた。この砂層は近畿自動車道建設に伴う調査で検出されている自然河川(SD110)の一部と考えられる⁽³⁾。上面で深さ約10cmを測る



第34図 若江北遺跡第5次調査A地区自然河川上面平面図(S=1/100)



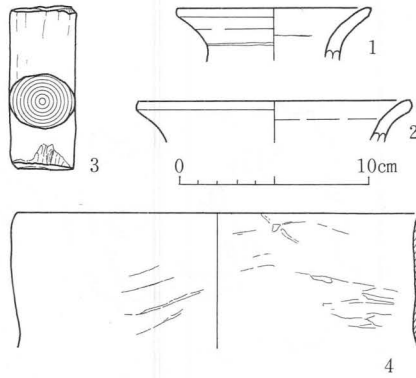
第35図 若江北遺跡第5次調査A地区土層図(S=1/100)



第37図木器(S=1/6)

あるいは前期に埋まったものと考えられる。

なお、近畿自動車道建設に伴う調査では



第36図 若江北A地区出土遺物(S=1/4)

の木製品が直立していた。護岸施設の一部であるのか、用途は不明である。なお、この木製品は良好な自然乾燥状態で保管している。他に木製容器の破片と加工木が出土している(第37図)。

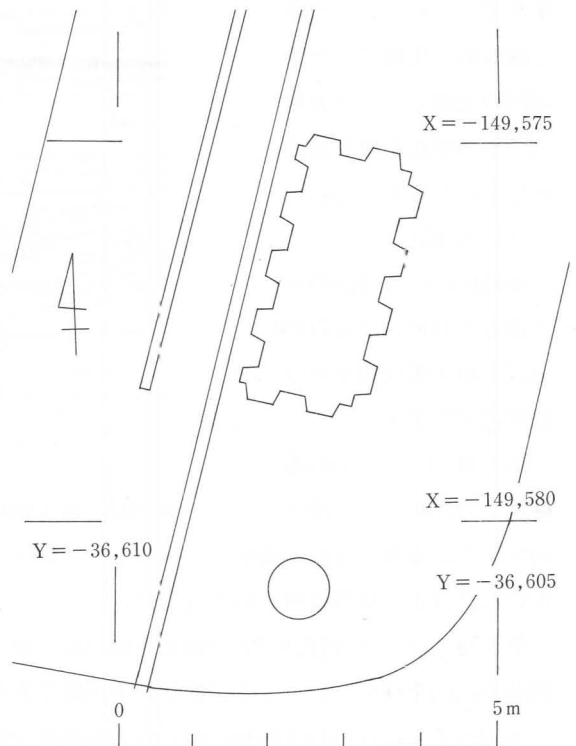
3) B地区

本地区はA地区から約80m西の中央環状線西側歩道上に位置する。地下埋設物のために矢板で完全に囲むことができず、このため漏水が激しく平面的な調査は断念した。

第A層(中近世)は攪乱のため柱状に断面を確認したにとどまる。

第D層からは弥生時代後期の高坏の坏部と肩部に貼り付け突帯を持つ壺の体部が出土した(第40図)。遺構は確認できなかった。

本地区の下半部はすべて砂層の堆積で、自然河川の一部である可能性がある。砂層中(第39図A)から刺突具と考えられる木製品1点と鹿の左下顎骨が出土した(第40図・図版26)。土器が出土していないため時期を特定できないが、弥生時代中期あるいは前期に埋まったものと考えられる。



第38図 若江北第5次B地区位置図(S=1/100)

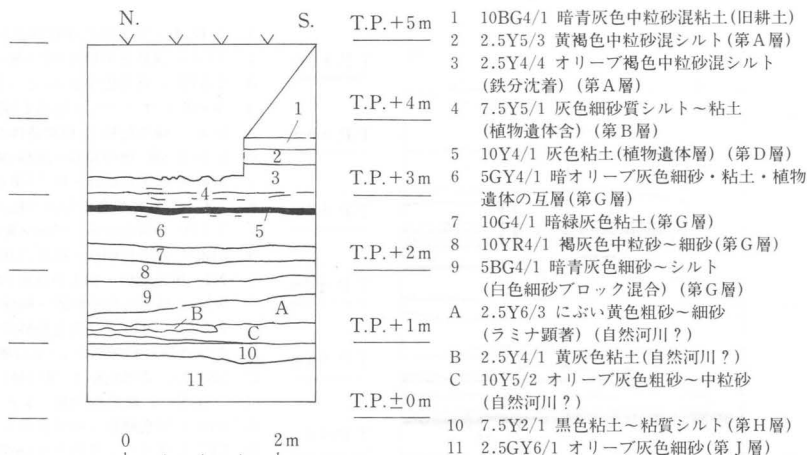
この砂層は確認されていないと思われる。

4) C地区

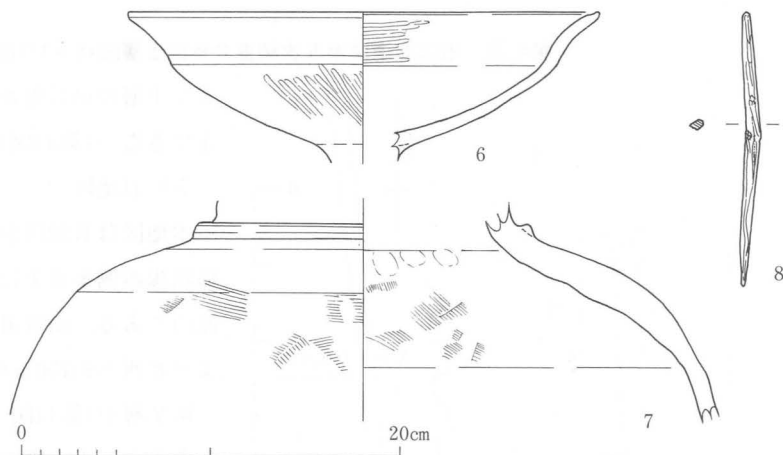
本地区はB地区から約120m北の中央環状線巨摩橋交差点北西歩道上に位置する。隣接する樟蔭東学園内では数回にわたって調査が実施されて

おり、弥生時代の水田畦畔などが検出されている⁽⁴⁾。

第A層(中近世)は2層に分かれ、杭列とピットを検出した。層中から瓦器碗片や瓦製円盤が出土したが、堆積時期はより新しいものと思われる。杭は長さ約70cm、径約5cmを測る丸杭



第39図 若江北遺跡第5次B地区土層図(S=1/100)



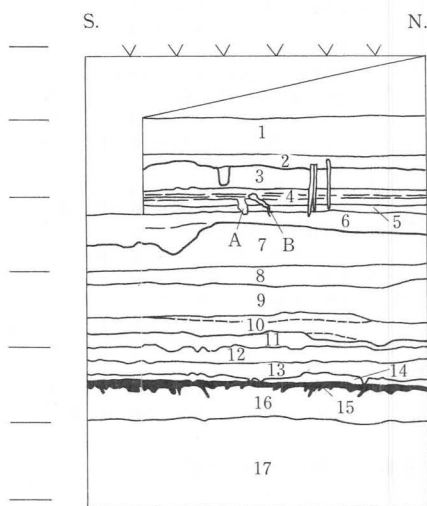
第40図 若江北遺跡第5次調査B地区出土遺物(S=1/4)

と板状(第46図28)のものがある。丸杭には先端を削らないものも使われている。ピットには柱痕跡を確認できなかった。また、第A層中(第41図B)の砂層の性格は不明である。第F層からの噴砂であろうか。

第E層下面(弥生時代中期)では東西方向の深さ約35cmを測る溝を長さ約2.5m分検出した(第42図)。溝は調査区東端で幅約120cmを測るが、西では幅50cmと60cmのふたつに枝分かれしていた。埋土から弥生時代中期の高坏や壺、朱塗りの鉢等が出土した。また、第E層中からは弥生時代中期の土器が出土しているが、後期の土器が少量混在する。これは本層最上部に第D層が薄く堆積していたことを現場で把握できず一括して掘削したためと考えられる。

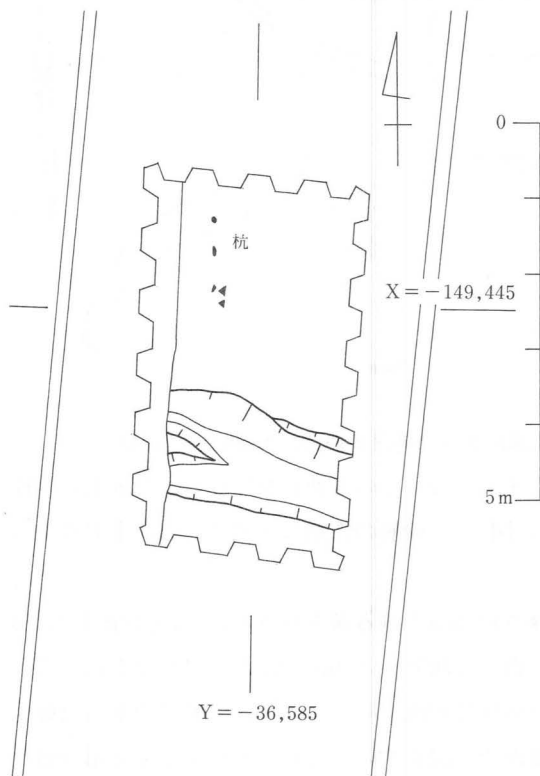
第G層中には不自然な堆積が観察され(第41図10)水田耕土である可能性があるが、平面的には把握できなかった。

第J層からは板状や棒状の木製品が出土したが、土層観察用のアゼを除去する際に出土して



- 1 10BG4/1 暗青灰色中粒砂混シルト～粘土(旧耕土)
- 2 5Y8/3 淡黄色中粒砂(第A層)
- 3 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂(ピット)
- 4 5GY5/1 オリーブ灰色粘土(乾痕入) (第A層)
- 5G6/1 緑灰色粘土(植物遺体が縞状に入) (第B層)
- 2.5Y8/8 黄色中粒砂～細砂(噴砂?)
- 5G6/1 緑灰色細砂～粘土(第C層)
- 10G1.7/1 緑黑色中粒砂～粘土(第E層)
- 7.5Y6/1 灰色から2.5Y8/8黄色中粒砂～細砂(第F層)
- 5B6/1 青灰色細砂・粘土の互層(第G層)
- T.P.+2m
- 9 N2/ 黑色細砂・粘土の互層(第G層)
- 10 5G4/1 暗青灰色中粒砂～細砂(第G層)
- 7.5Y3/1 オリーブ黑色細砂質粘土(第G層)
- T.P.+1m
- 12 7.5GY2/1 緑黑色粘土(第G層)
- 13 5B1.7/1 青黑色粘土(第G層)
- 14 7.5GY2/1 緑黑色砂混シルト～粘土(第G層)
- T.P.±0m
- 15 5Y2/1 黑色細砂～粘質シルト(植物遺体層) (第H層)
- 16 5Y3/1 オリーブ黑色粘土(植物遺体が縞状に入) (第G層)
- 17 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色から 5Y2/1 黑色粗砂～細砂(第J層)
- T.P.-1m

第41図 若江北遺跡第5次調査C地区土層図(S=1/100)



第42図 若江北第5次C地区E層下面(S=1/100)

ている(第46図29)。

第Ⅶ層(弥生時代前期)の下面では水田と考えられる落ち込みを検出した。落ち込みのほとんどは調査

おり上層の第G層からの混入の可能性を否定できない(第41図)。

5) D地区

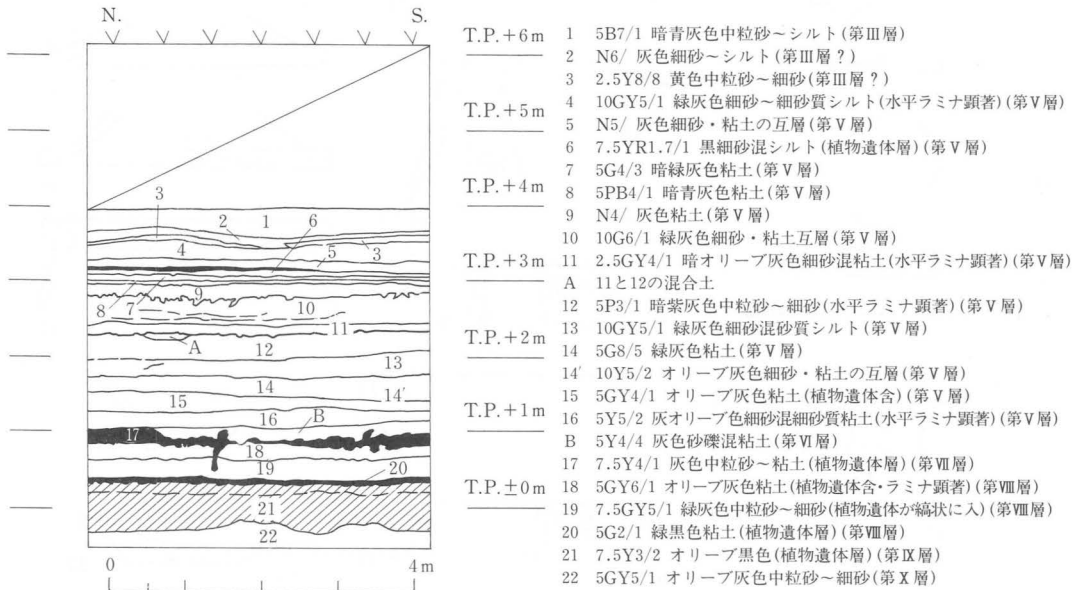
本地区はB地区から南へ約280mの中央環状線西側歩道に位置し、山賀遺跡の範囲内である。山賀遺跡第6次調査のC地区より北西へ約150mの地点である⁽⁵⁾。

第Ⅴ層中(第44図4)からは弥生時代中期と考えられる土器細片が出土したほか、深さ約10cmの土壌(第44図A)と約35cm×約17cm×約17cmの岩石を検出した(第43図)。用途は不明である。この遺構面より下の第Ⅴ層(第44図15)からは板状の木製品が出土し

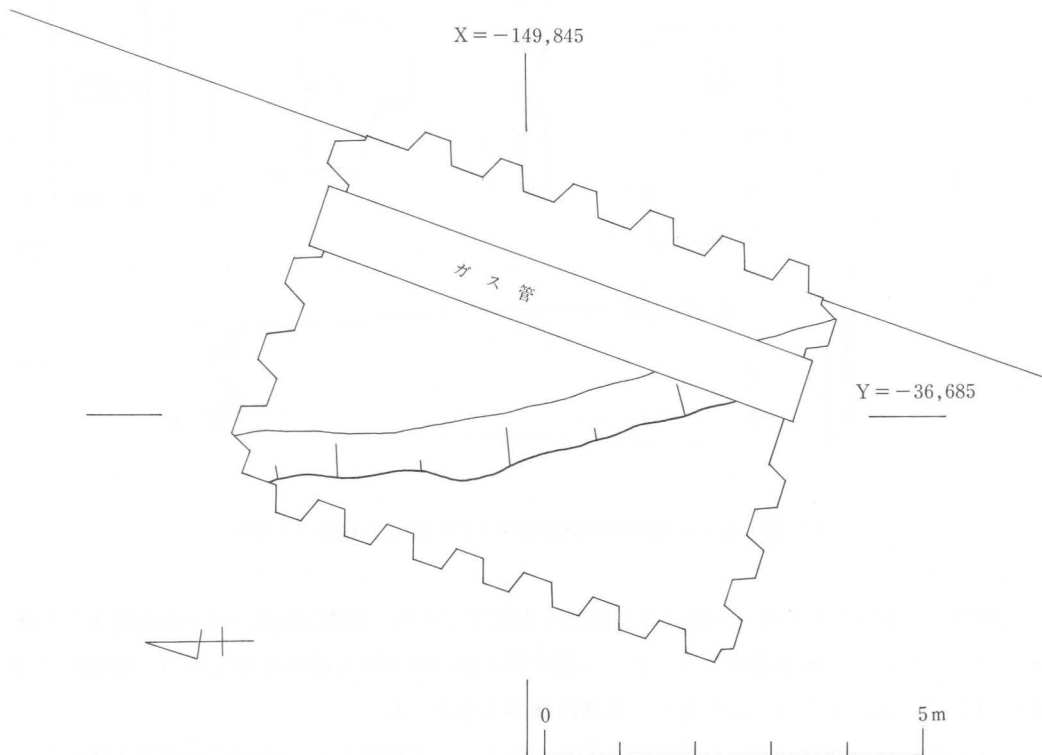


第43図 若江北第5次調査D地区出土岩石

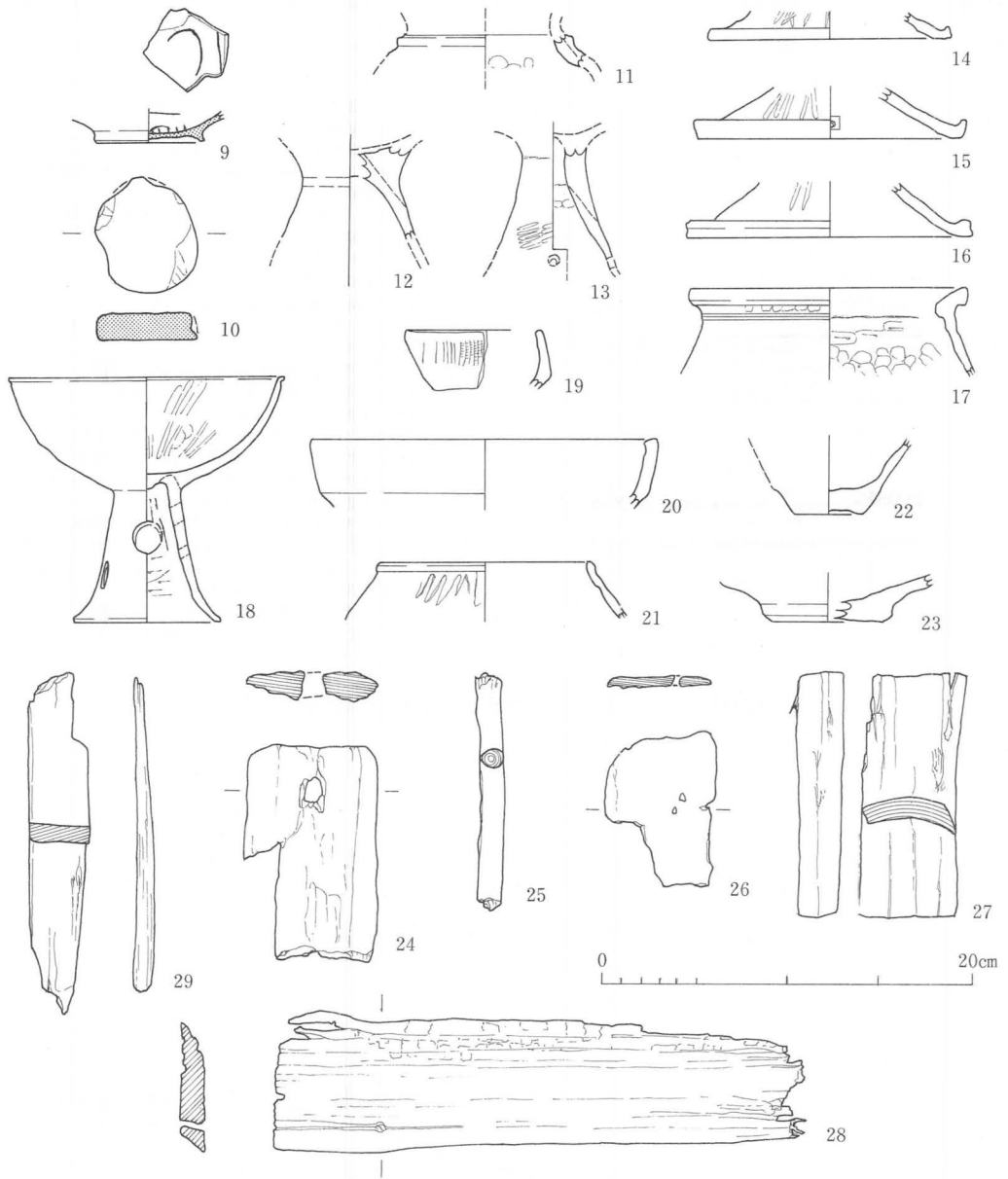
区外にのびるため規模は不明である。国土座標軸に対してN10°W前後の方位を示す。遺物は出土しなかった(第45図)。



第44図 若江北遺跡第5次調査D地区土層図(S=1/100)



第45図 若江北遺跡第5次調査D地区VII層下面平面図(S=1/100)



第46図 若江北遺跡第5次調査C・D地区出土遺物(S=1/4)

6) E地区

本地区はB地区からD地区を接続する開削工事部分である。調査はG.L. -1.6m前後までを機械によって掘削し、断面観察を行った。一部で第A層(中近世)を検出したものの、結果的に掘削のほとんどは旧耕土内におさまリ、遺構は検出しなかった。

第A層からは土師質皿細片や瓦器細片等が出土した。F地区に近い地点では旧耕土層から篋で×を描く須恵器礎が出土している(第47図30)。

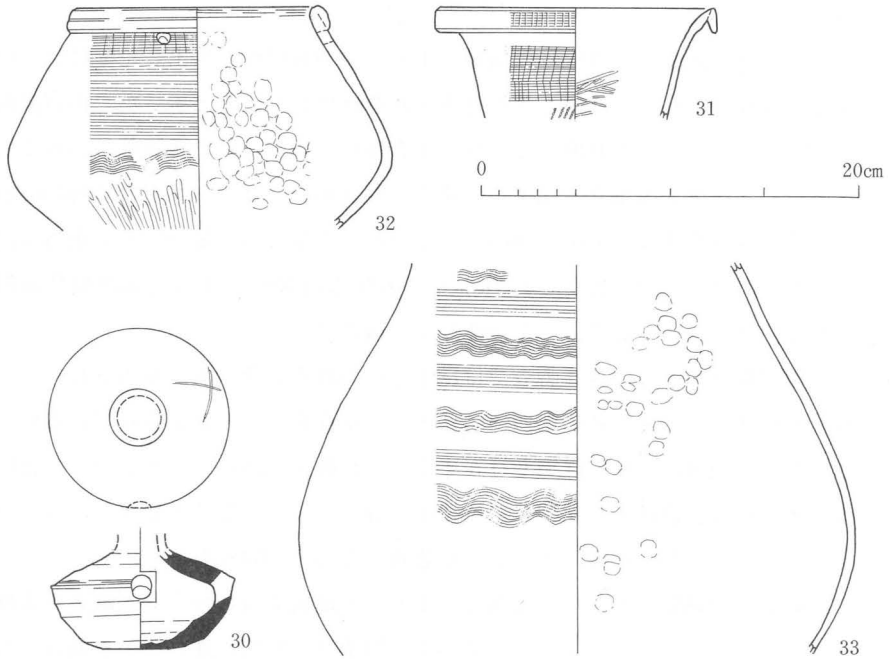
7) F地区

本地区は径約2mのライナープレートによる土留めのため平面的な調査を実施できず、人力掘削による遺物採集を主目的とする調査となった。

T.P.+3.5m付近の黒色粘土層からは弥生土器細片が、T.P.+2.5m付近の暗青灰色砂層から弥生土器中期の壺や鉢と種子が出土した(第47図)。それぞれ前者はD地区の第Ⅳ層(弥生時代後期)に、後者は第Ⅴ層(弥生時代中期)に相当すると考えられる。

3 まとめ
今回の調査では現地表面下約7mまでの地層を観察することができた。

今回の調査結果とこれまで周辺で行われた調査結果等から、各堆積層の年代を推測することができた。



第47図 若江北遺跡第5次調査E・F地区出土遺物(S=1/4)

本調査と山賀遺跡第6次調査、山賀遺跡第7次調査⁽⁶⁾で得られた結果はこれまでの調査成果を追認するものであるが、新たに注目される点がある。簡単であるがこれを列記してまとめにかえることとしたい。

1. 昭和40年代に楠根川を改修して作られた第二寝屋川の堤防付近は、これまで漠然と盛土が厚いために周辺部よりも高くなっていると考えられていた。ところが実際には盛土は一般の道路と同程度であることが判明した。すなわち楠根川の自然堤防がかつての状態に残されている可能性が非常に高い。

第二寝屋川は池島遺跡から若江遺跡や瓜生堂遺跡等を縦断している。若江中学校付近では堤防部分が付近の道路より低いが、今回の調査地点付近では高い。単純に現代の川に伴う堤防ととらえるだけでは河内平野中央部を理解する上でも、行政的指導の行う上でも問題を残すこととなる。

2. 上小阪遺跡は弥生時代後期の遺跡として著名である。下水道管渠築造工事に伴う第4次

調査によれば、その遺構面はT.P.+2 m前後で検出されている⁽⁶⁾。上小阪遺跡と山賀遺跡は隣接しており、これまで漠然と西から東に向かって遺構面が深くなるものと考えられていた。つまり上小阪遺跡範囲内で確認される弥生時代後期の遺構面は山賀遺跡範囲内にも連続するが、現地表面から次第に深い位置に埋蔵されていると思われていた。

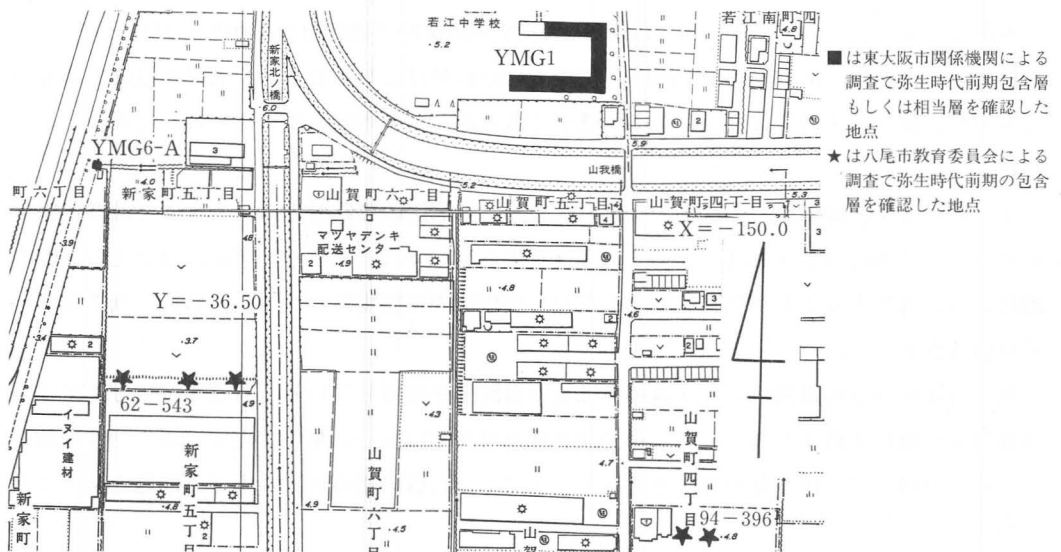
ところが今回の調査で確認された弥生時代後期の包含層はT.P.+2～3 mに位置し、起伏が存在するものの比較的平坦に遺構面が連続することが判明した。遺跡範囲の境界付近には自然河川等の存在が推定されるが、上小阪遺跡と山賀遺跡を理解する上で遺跡境界付近は注目すべき地点といえよう。

3. 今回の調査では弥生時代前期の土器は自然河川から出土した他には1点もなく石器の出土もみられなかった。遺構も落ち込み1基を検出したにとどまった。山賀遺跡の中心部は八尾市域に所在することが判明しており、調査地点一帯が遺跡の縁辺部であることを再確認した。

ところが、東大阪市立若江中学校建設に伴う調査では完形品を含め約700点の土器が出土し、盛り土状遺構や溝等の遺構が検出されている⁽⁸⁾。土器の出土量からみて集落に近接していることがうかがわれる。中学校から約200 m南の八尾市新家町5丁目でも弥生時代前期の包含層が確認されており、住居区域であった可能性が指摘されている⁽⁹⁾。

近畿自動車道建設に伴う調査では環濠と思われる8条の溝が検出されている⁽¹⁰⁾。その調査では環濠の内側に当たる遺跡の南西部に住居区域が存在すると推定されているが、第二寝屋川をはさんだこの地域にも住居区域が存在することは確実であろう。そしてこの住居区域は今回の調査結果等から、遺跡の南西部とは不連続な独立性の高いものと想像される。今後、この住居区域の広がりや時期を再確認することが急務となろう(第48図)。

大阪府の大動脈である中央環状線が走るこの地域では今後も発掘調査が実施されるであろう。将来の調査によってさらに若江北遺跡や山賀遺跡の解明が進むことを期待したい。



第48図 山賀遺跡北東部調査地点(S=1/5000)

図	番号	種類・器種	口径×器高	図化	色調(外面)	出土位置	備考
36	1	弥生壺口縁	10.2×・	反転	灰白色	A区流路	前期、頸部沈線
36	2	弥生壺口縁	14.4×・	反転	灰白色	A区流路	前期、摩耗、小片
36	3	棒状木製品	8.7×3.6	完形		A区流路	
36	4	木製容器	21.4×・	反転		A区流路	摩耗顯著、小片
37	5	棒状木製品	116.×3.8	完形		A区流路	
40	6	弥生高坏	24.8×・	反転	灰白色	B区D層	後期、焼成硬質
40	7	弥生壺肩部	・×・	反転	にぶい橙色	B区D層	後期、黒斑有
40	8	木製刺突具	14.7×0.7	完形		B区流路	
46	9	瓦器碗底部	・×・	反転	灰色	C区A層	底部外面にキズ有
46	10	瓦製円盤	6.5×5.5	反転	暗青灰色	C区A層	焼成瓦質
46	11	弥生壺肩部	・×・	完形	灰白色	C区E層	後期
46	12	弥生高坏脚	・×・	反転	にぶい橙色	C区E層	後期、摩耗顯著
46	13	弥生高坏脚	・×・	完形	灰黄褐色	C区E層	後期、外面たたき
46	14	弥生蓋口縁	13.2×・	反転	黒色 ■	C区溝	中期、角閃石含
46	15	弥生蓋口縁	14.2×・	反転	褐灰色 ■	C区溝	中期、角閃石含
46	16	弥生蓋口縁	15.4×・	反転	褐灰色 ■	C区溝	中期、黒斑有
46	17	弥生甕口縁	14.8×・	反転	褐色 ■	C区溝	中期、焼成硬質
46	18	弥生高坏	15.0×13.4	合成	暗灰黄色	C区溝	中期、内面みがき
46	19	弥生鉢口縁	・×・	・	黒色 ■	C区溝	中期、外面簾状文
46	20	弥生高坏?	18.4×・	反転	褐色 ■	C区溝	中期、摩耗顯著
46	21	弥生鉢口縁	11.6×・	反転	灰色	C区溝	中期、赤色顔料塗
46	22	弥生壺底部	・×・	反転	灰色 ■	C区溝	中期、焼成硬質
46	23	弥生壺底部	・×・	反転	褐色 ■	C区溝	中期、黒斑、把手
46	24	板状木製品	・×7.0	・		C区K層	穿孔有、下部欠損
46	25	棒状木製品	・×1.1	・		C区K層	上下欠損
46	26	板状木製品	・×・	・		C区K層	下部欠損
46	27	棒状木製品	・×・	・		C区K層	小片
46	28	板状木製品	28.5×・	・		C区A層	杭
46	29	板状木製品	・×・	・		D区V層	上下欠損
47	30	須恵器甃	・×・	完形	青灰色	E区耕土	

第5表 若江北遺跡第5次調査出土遺物一覧表1

図	番号	種類・器種	口径×器高	図化	色調(外面)	出土位置	備考
47	31	弥生壺口縁	14.6×・	反転	黄灰色	F区V層	中期、外面簾状文
47	32	弥生壺口縁	12.8×・	反転	にぶい橙色	F区V層	中期、外面簾状文
47	33	弥生壺体部	・×・	反転	にぶい橙色	F区V層	中期、外面櫛描文

第6表 若江北遺跡第5次調査出土遺物一覧表2

※・は計測不可を表し、完形は図化部分が遺存、合成は一部を反転復原し図化したもの。

土器以外は口径×器高を長軸×短軸としている。

色調中の■は胎土に角閃石を含むことを意味する。

註)

- (1) 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター『若江北 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1983
大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター『山賀(その1) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1983
- (2) 本書第7章
- (3) (1)に同じ
- (4) 財団法人東大阪市文化財協会『若江北遺跡一樟蔭東学園校舎建設に伴う遺跡調査報告一』1985
- (5) (2)に同じ
- (6) (2)に同じ
- (7) (2)に同じ
- (8) 財団法人東大阪市文化財協会「第2章 上小阪遺跡第4次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告一1991年度一』1992
- (9) 東大阪市教育委員会「I. 山賀遺跡発掘調査報告」『山賀遺跡発掘調査概要一付 弥刀・瓜生堂・縄手・若江遺跡発掘調査概要一』1990
- (10) 八尾市教育委員会「6. 山賀遺跡(62-543)の調査」「9. 山賀遺跡(63-044)の調査」『八尾市文化財調査報告19昭和63年国庫補助事業 八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I』1989
報告書では「遺跡の範囲を限定することはさけておきたい」とされている。
- (11) (1)に同じ

圖 版

1. 植物層上面



2. ピット断面

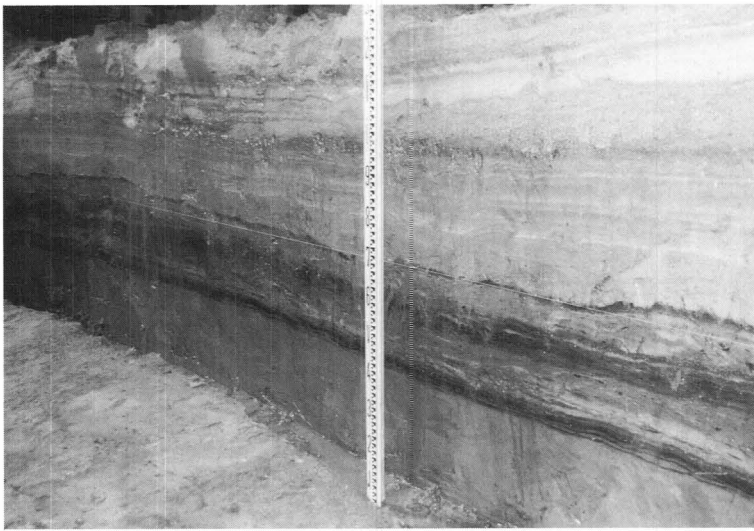


3. 植物層の凸凹





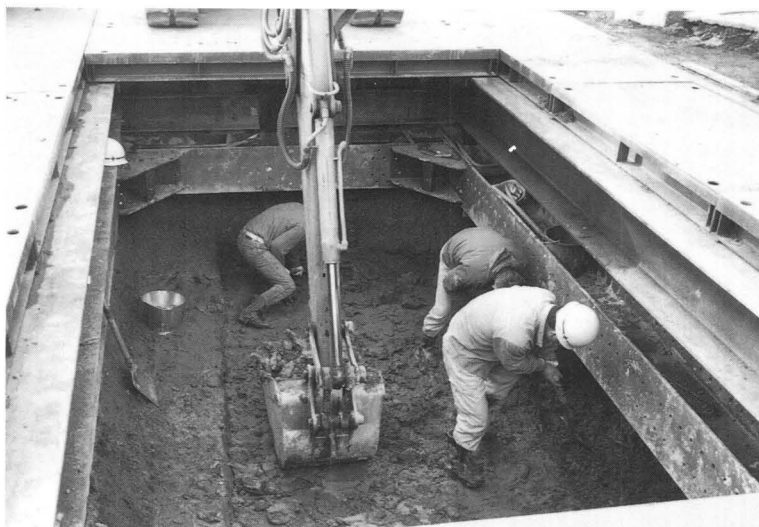
1. 植物層の凸凹



2. 断面上部



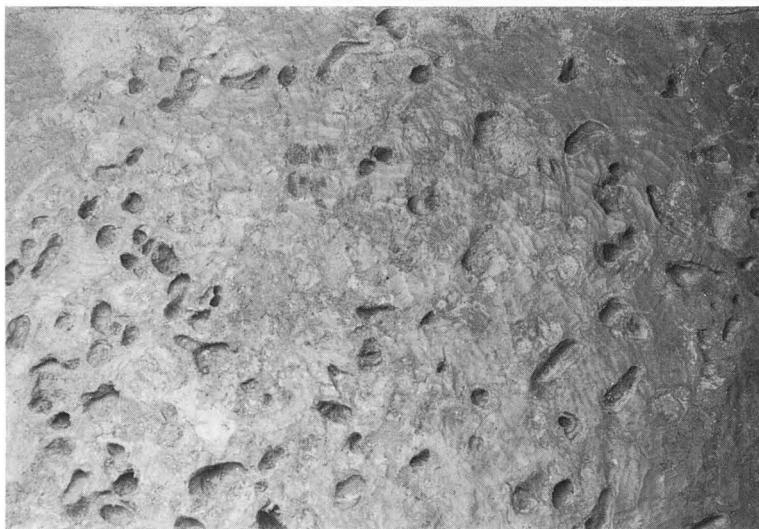
3. 断面下部



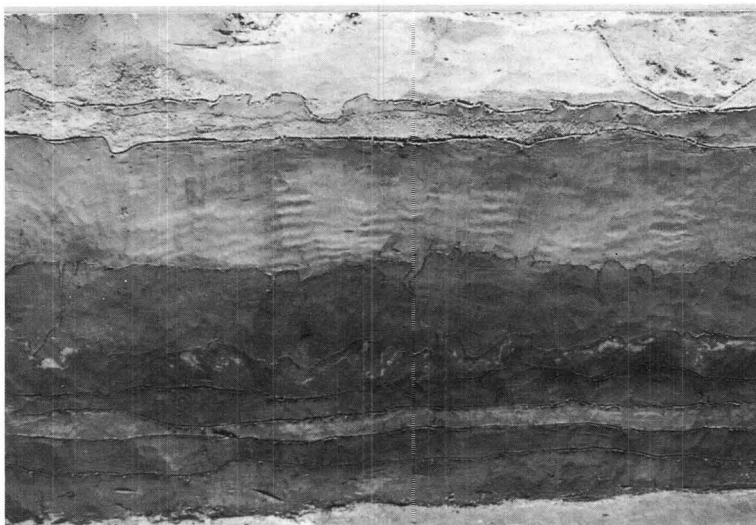
1. 調査風景



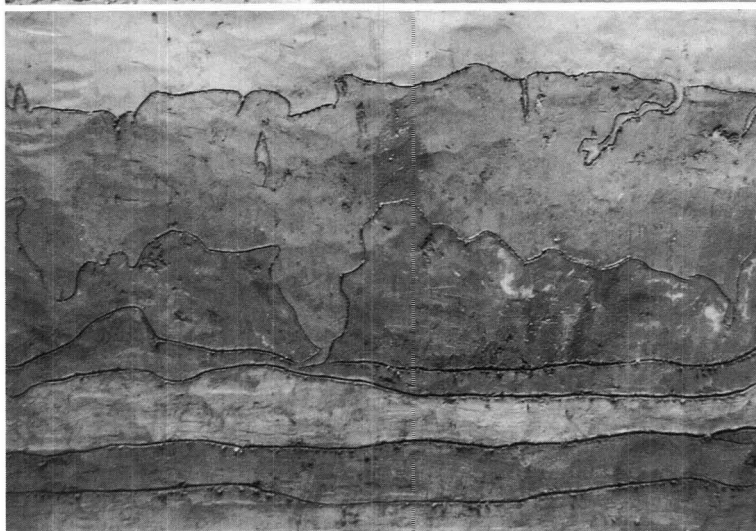
2. 南壁土層断面上部



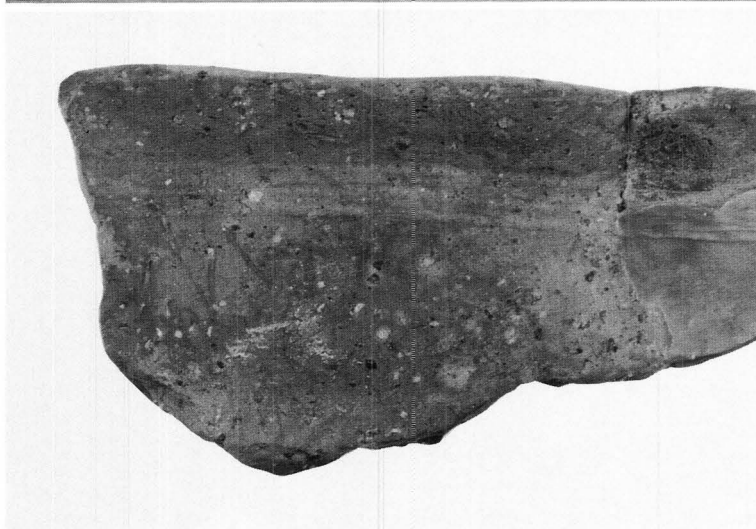
3. 足跡面完掘状況



1. 南壁土層断面下部



2. 地震による堆積層の変形



3. 出土遺物 弥生土器 甕

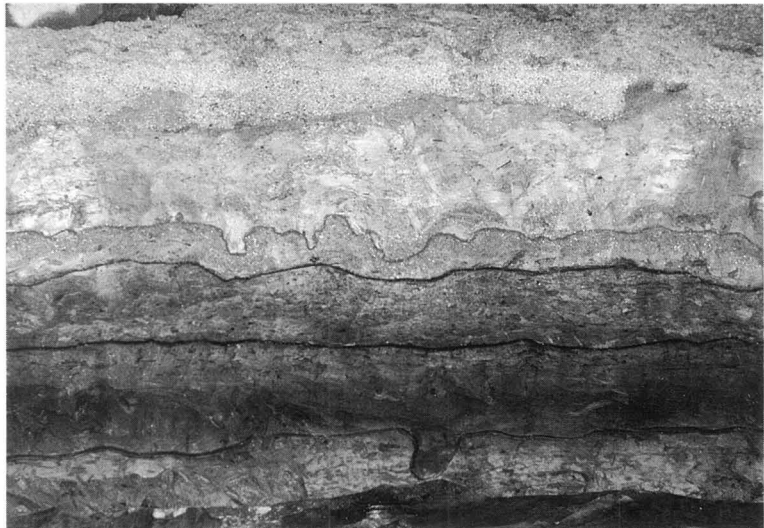
1. 調査地近景

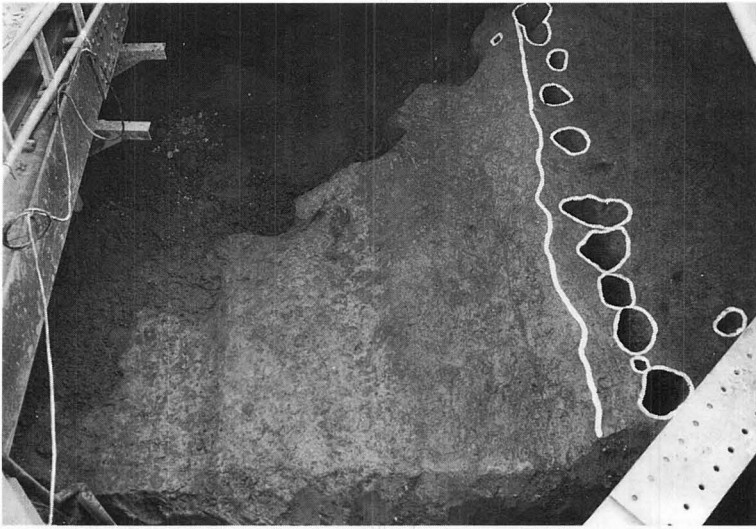


2. 西壁断面中部

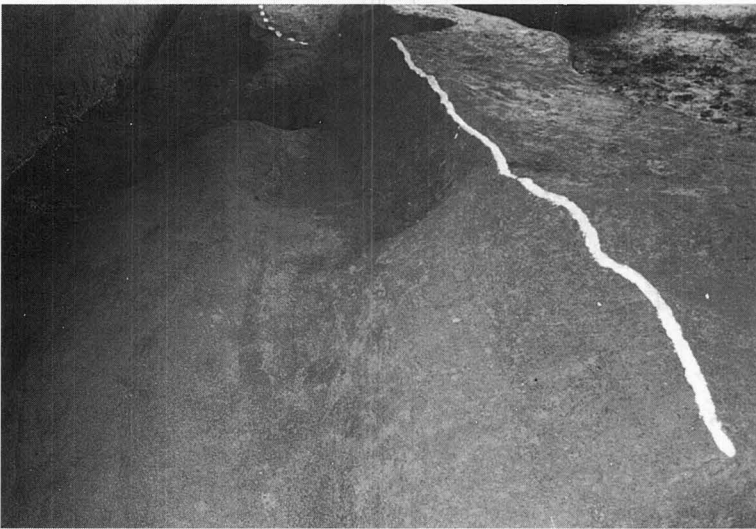


3. 西壁断面下部





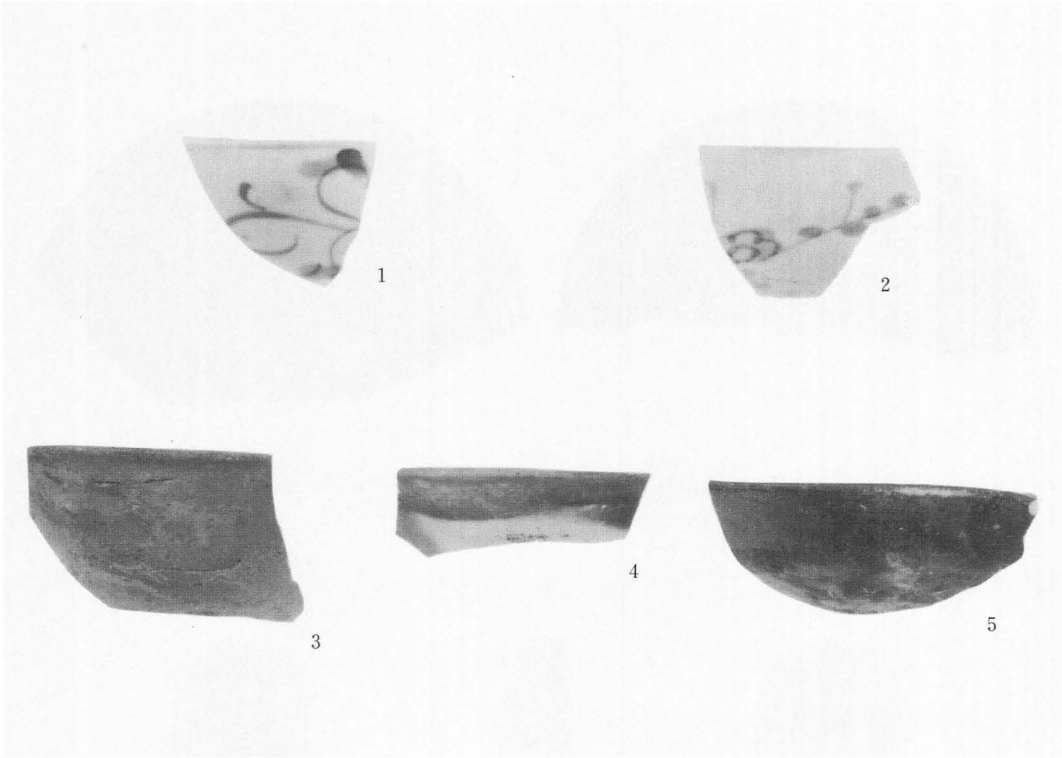
1. 溝1



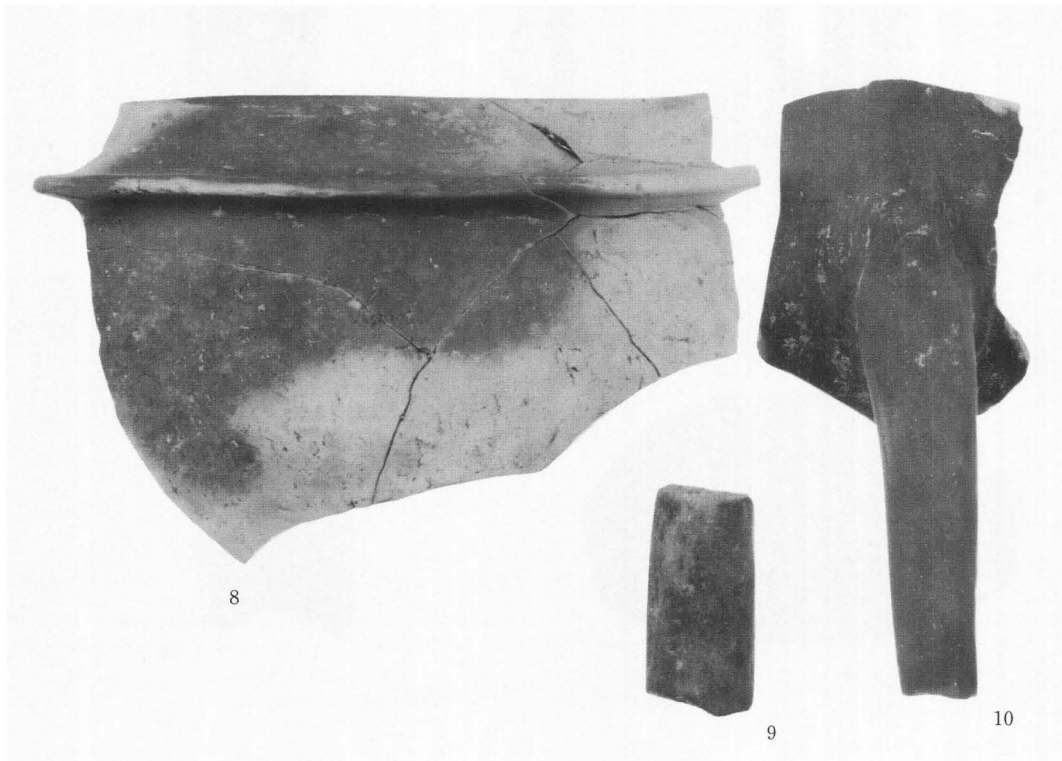
2. 大溝



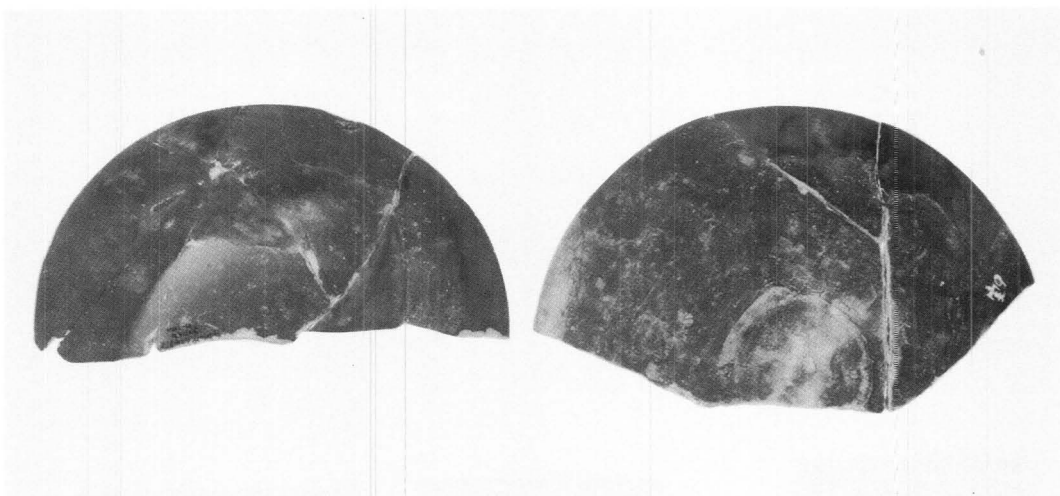
3. 噴砂



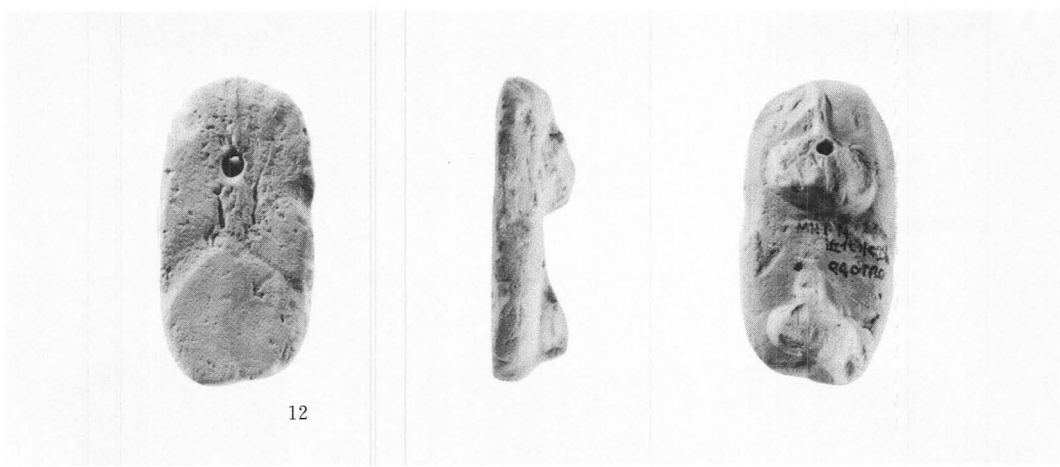
1. 伊万里焼碗、瓦器碗



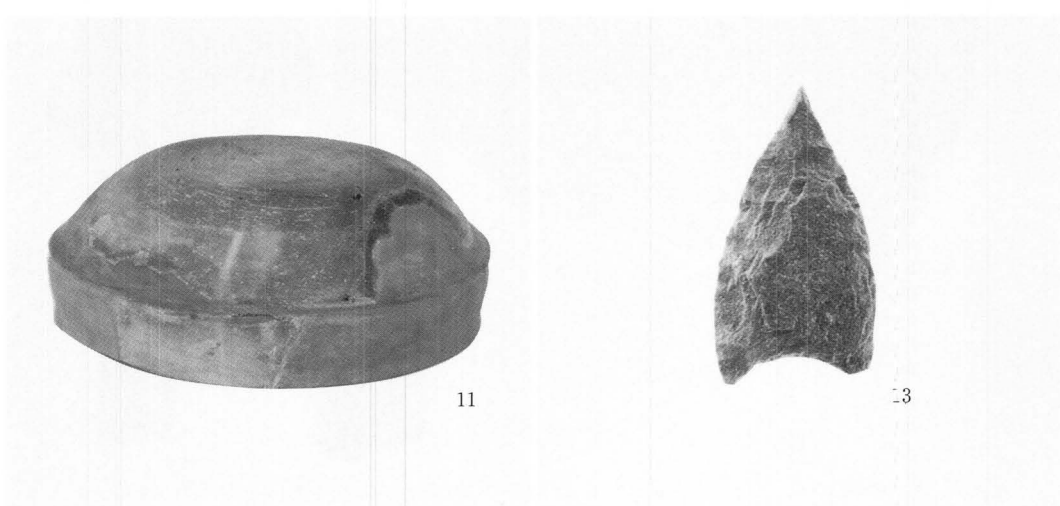
2. 瓦質羽釜



1. 瓦器碗



2. ミニチュア下駄



3. 須恵器杯蓋

4. 石鏃



1. 調査地近景



2. 調査風景



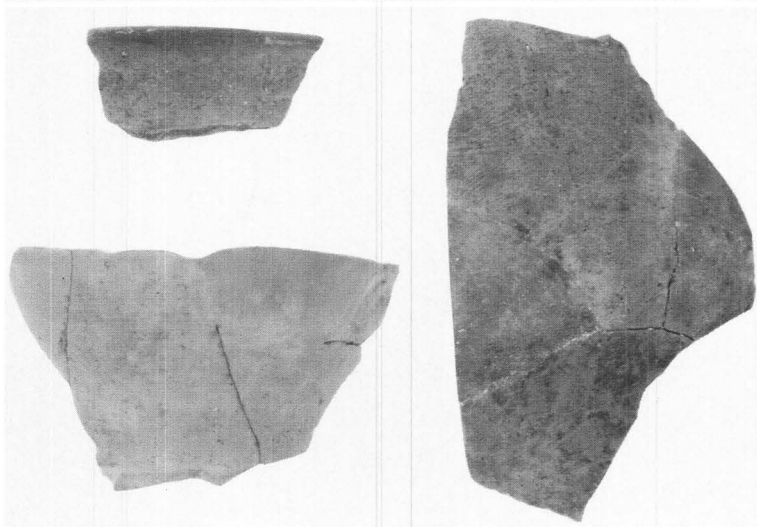
3. B地区断面下部



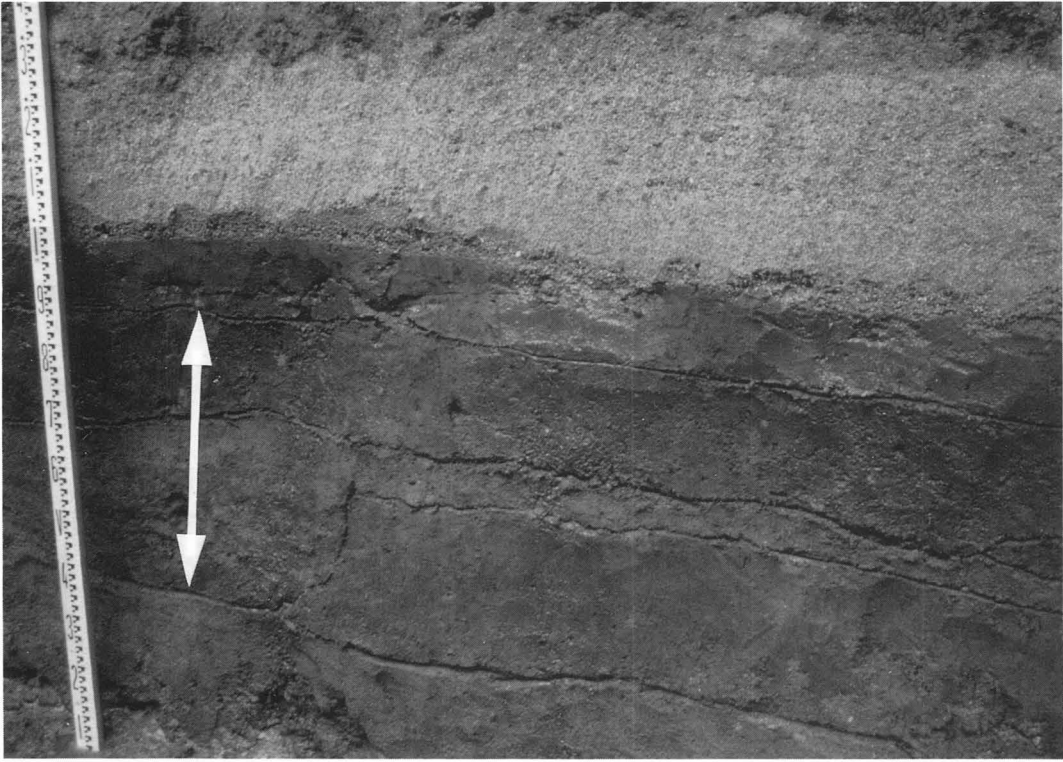
1. C地区調査風景



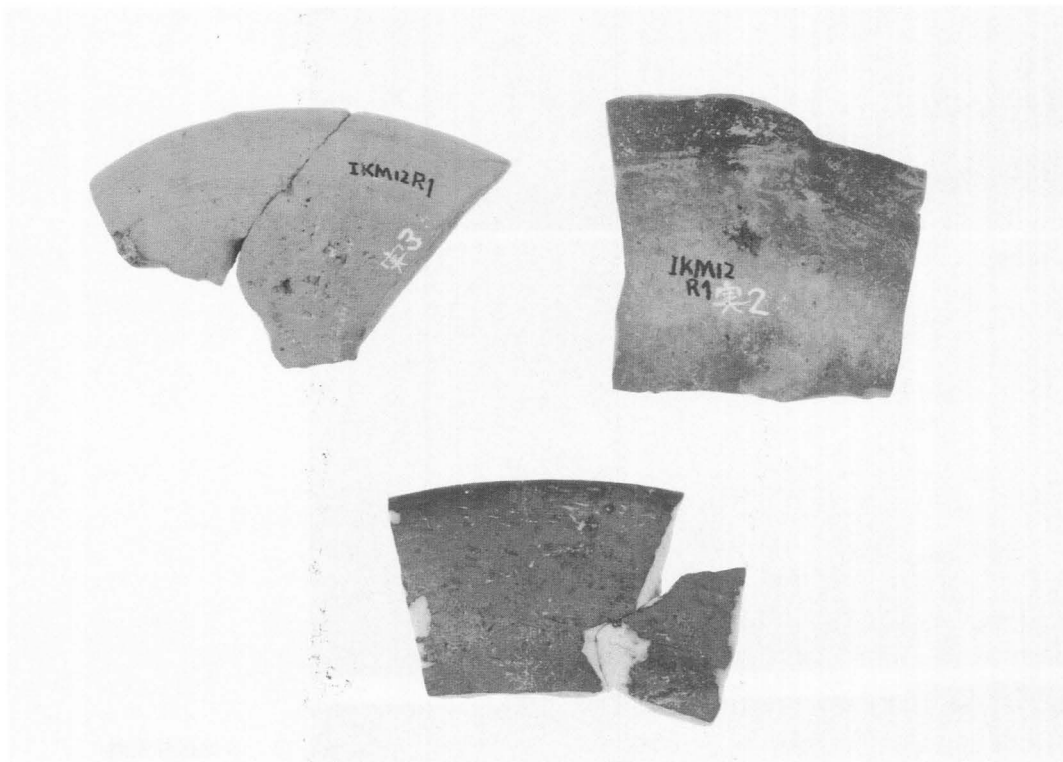
2. ピット断面



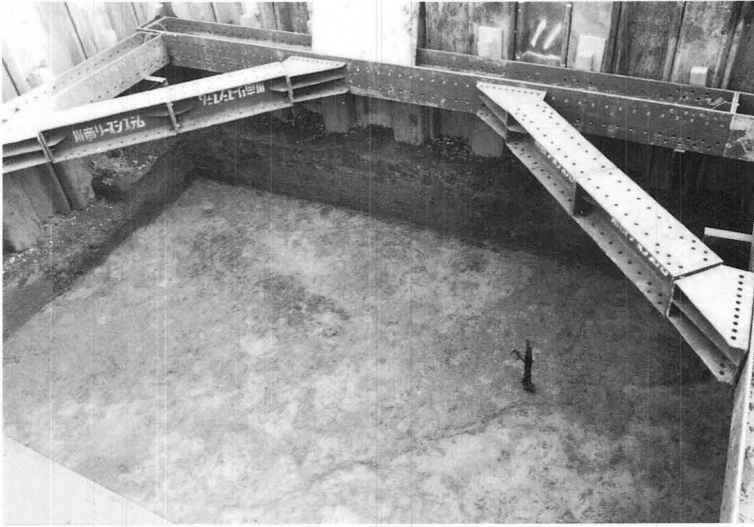
3. 出土遺物



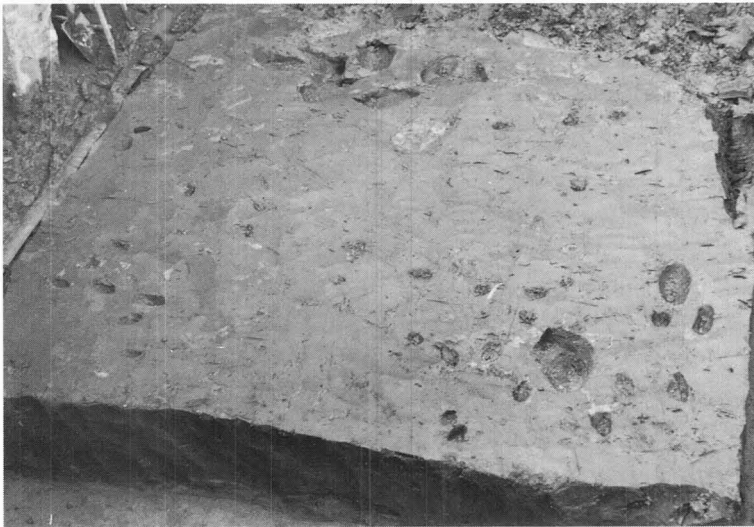
1. 落ち込みと中世土器出土層準



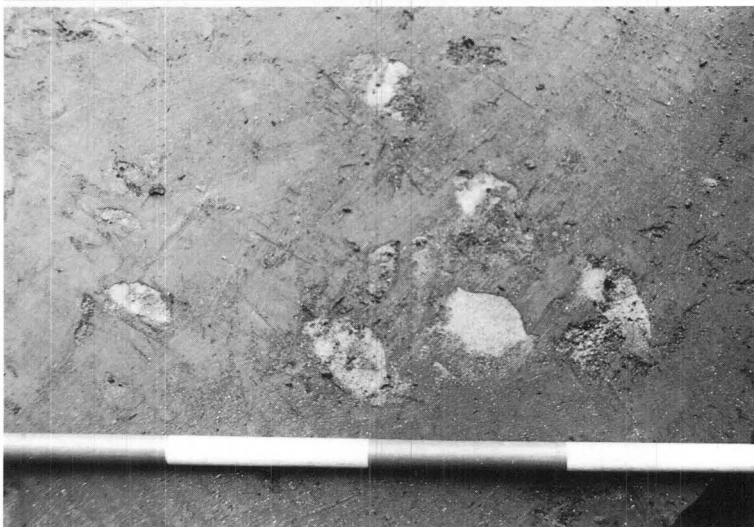
2. 出土遺物



1. A地区中世面



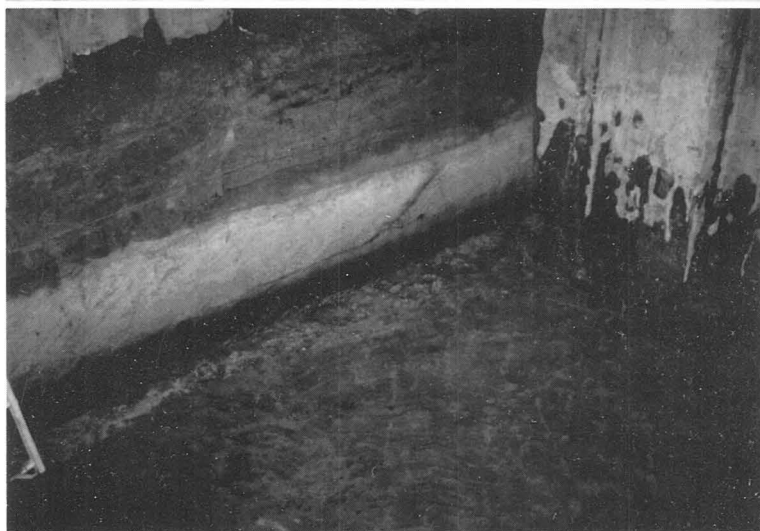
2. A地区弥生面



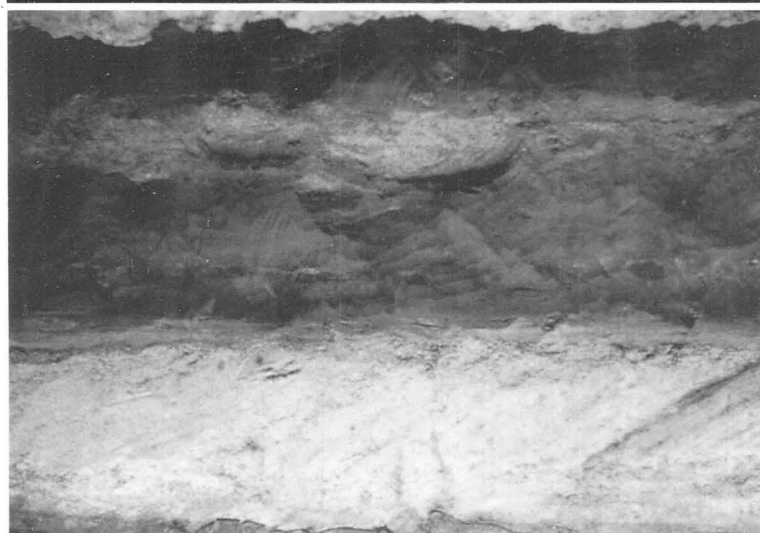
3. A地区弥生面



1. A地区断面上部



2. A地区断面中部



3. A地区断面中部



1. A地区調査風景



2. A地区断面下部

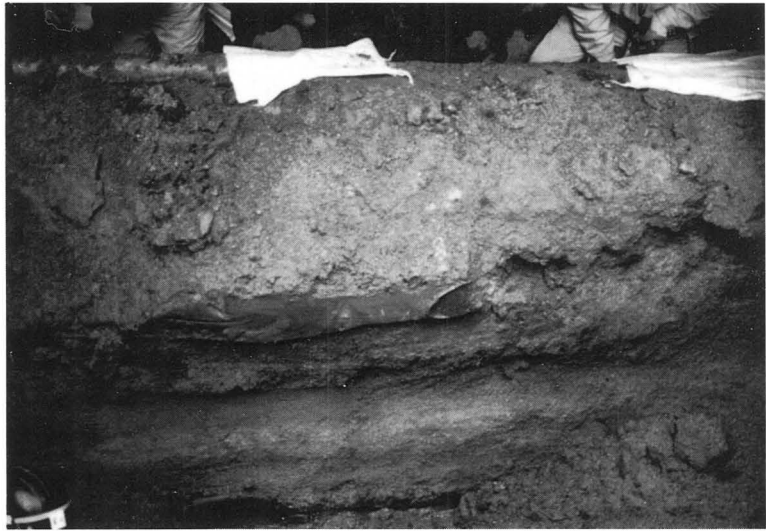


3. A地区断面最下部

1. B地区調査風景



2. B地区断面上部

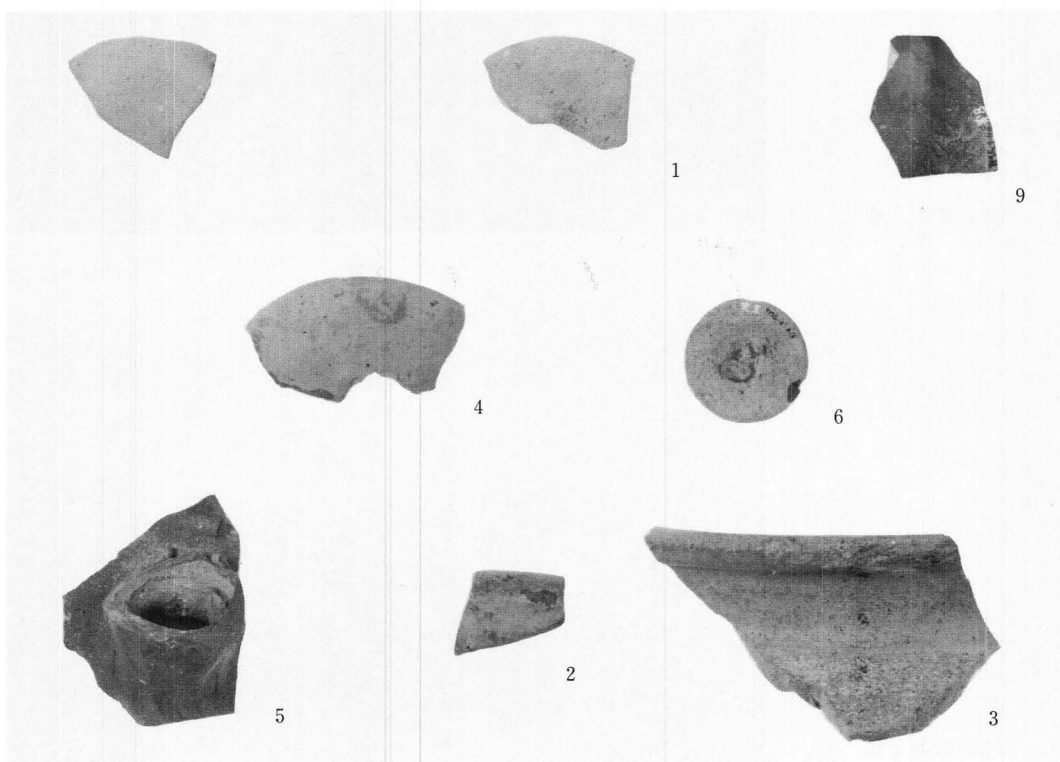


3. B地区断面下部





1. A地区出土遺物



2. A地区出土遺物

1. 調査風景



2. 調査区全景

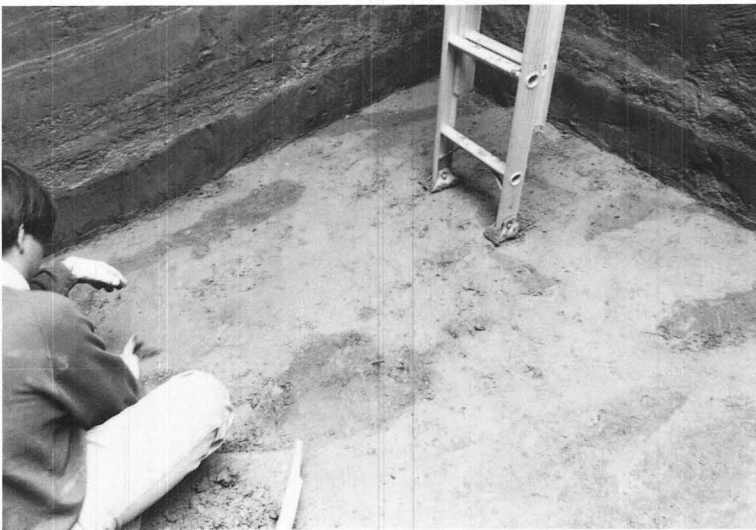


3. 断面





1. A地区近景



2. A地区弥生面



3. 流路断面



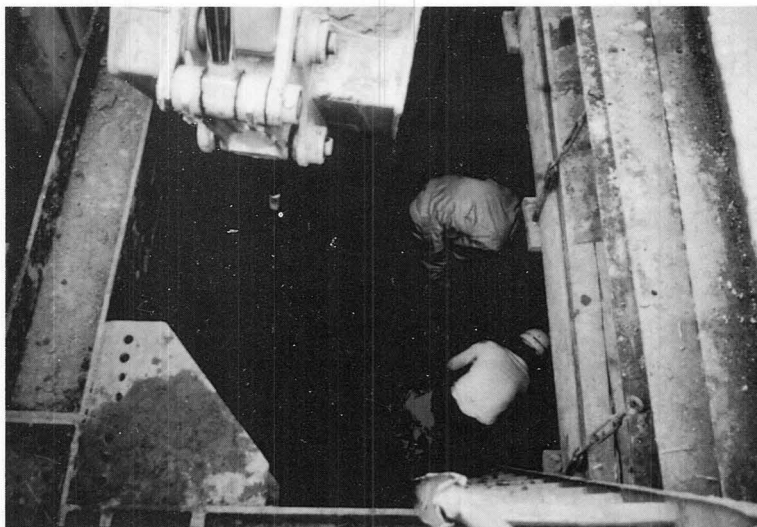
1. A地区木製品出土状況



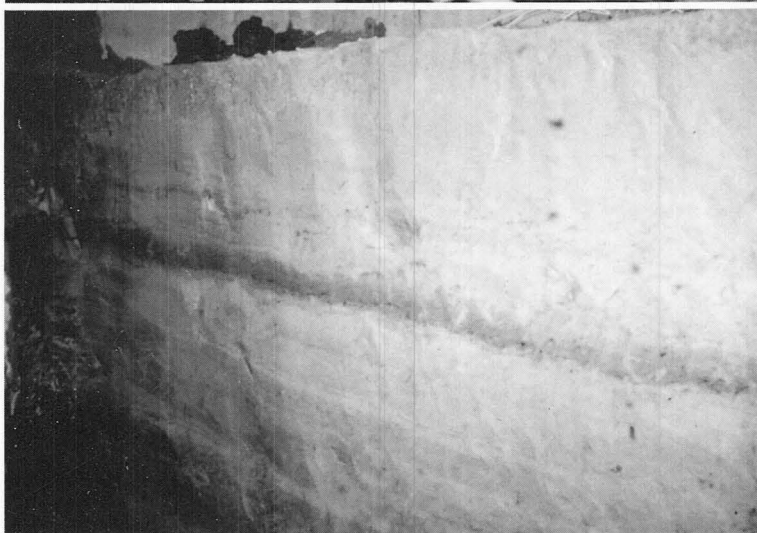
2. A地区断面下部



3. A地区断面上部



1. B地区調査風景



2. B地区断面上部



3. B地区断面下部

1. C地区調査風景

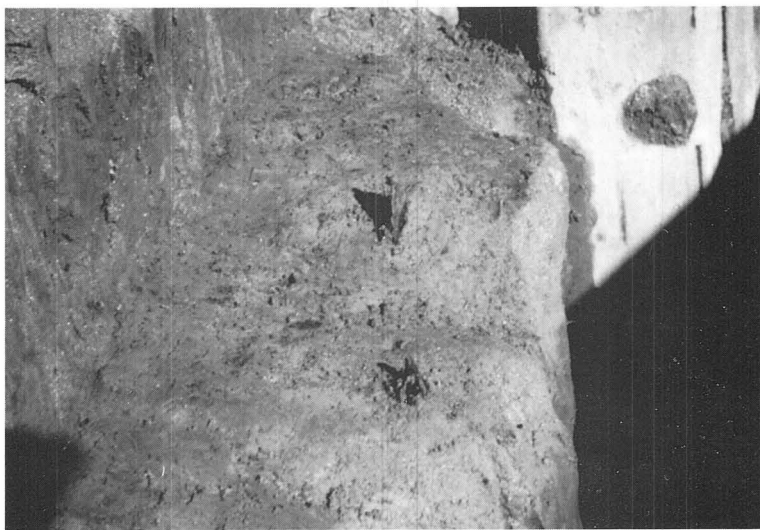


2. 弥生面S.D.01

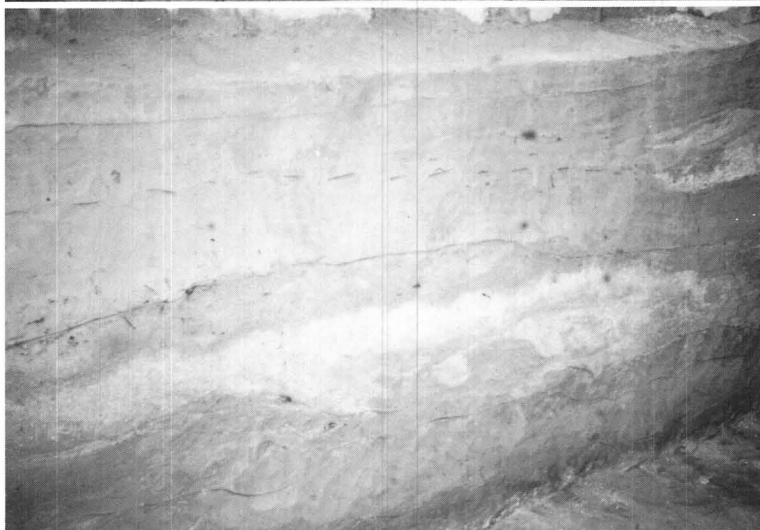


3. 同断面





1. C地区杭列

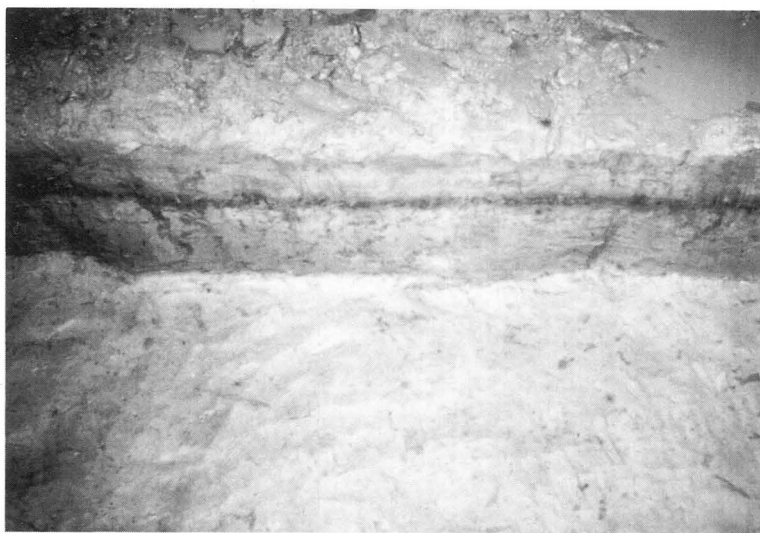


2. C地区断面中部

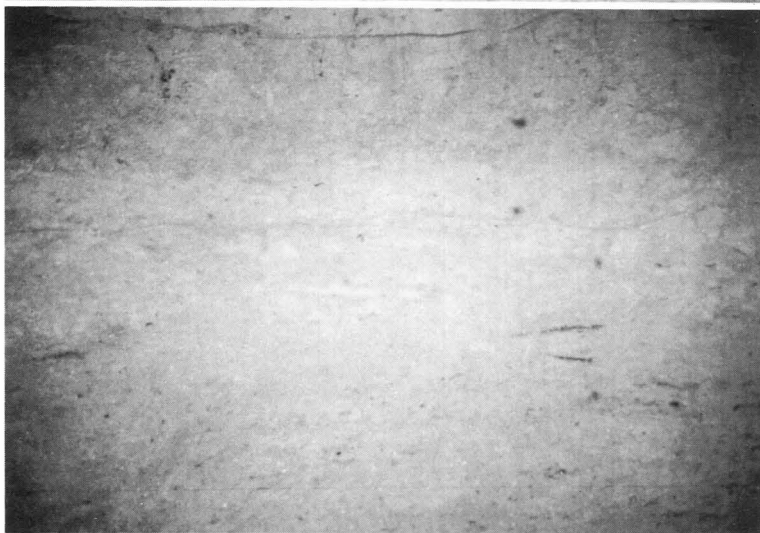


3. C地区断面下部

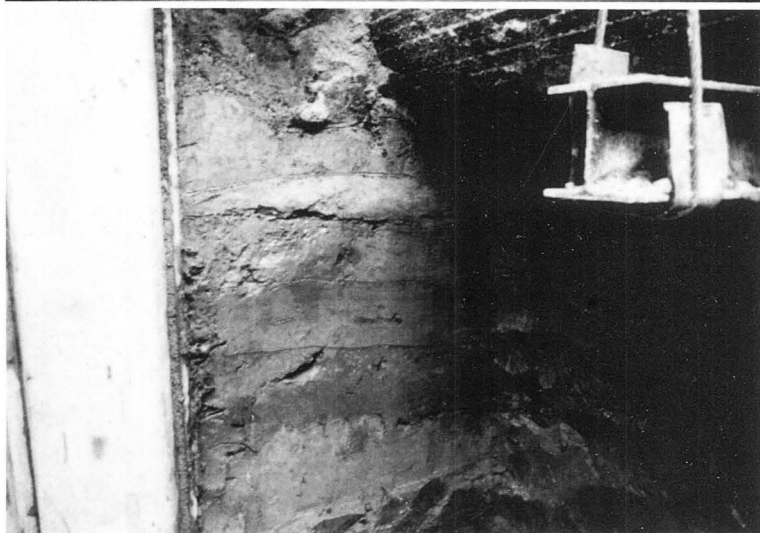
1. C地区断面最下部①

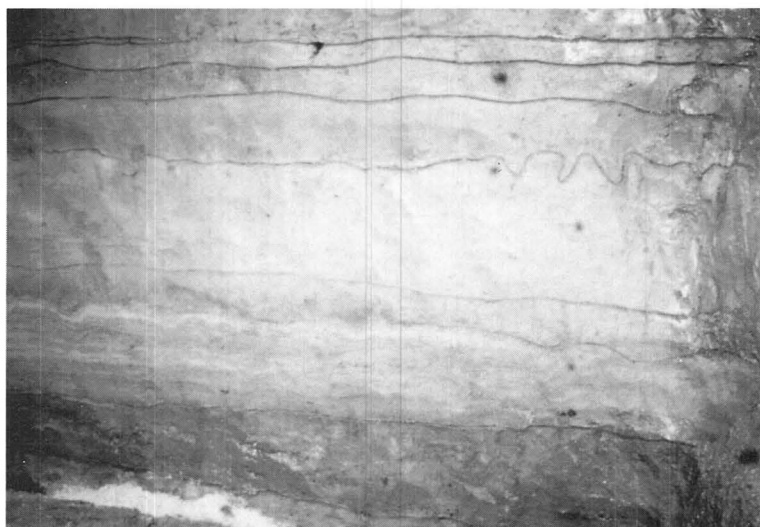


2. C地区断面最下部②



3. D地区断面最上部





1. D地区断面中部



2. D地区断面下部

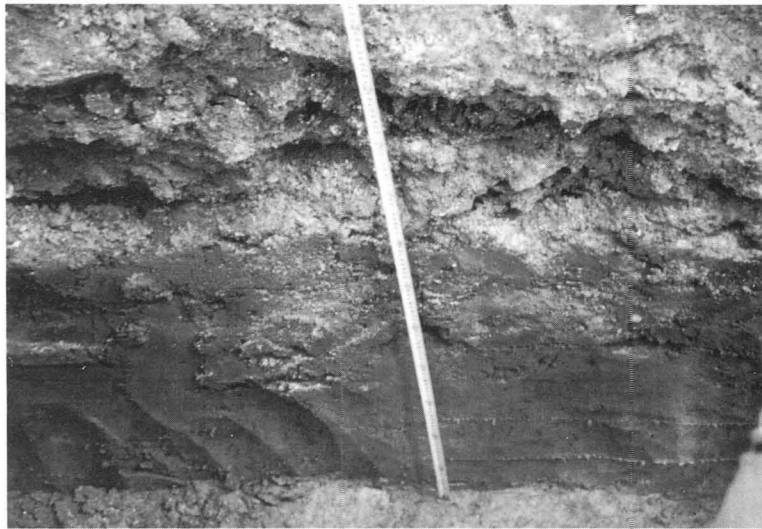


3. D地区黑色粘土上面

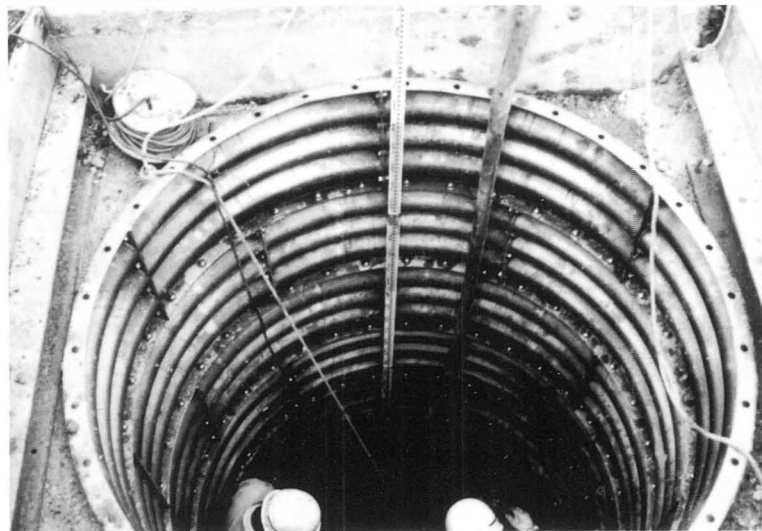
1. 開削部調査風景

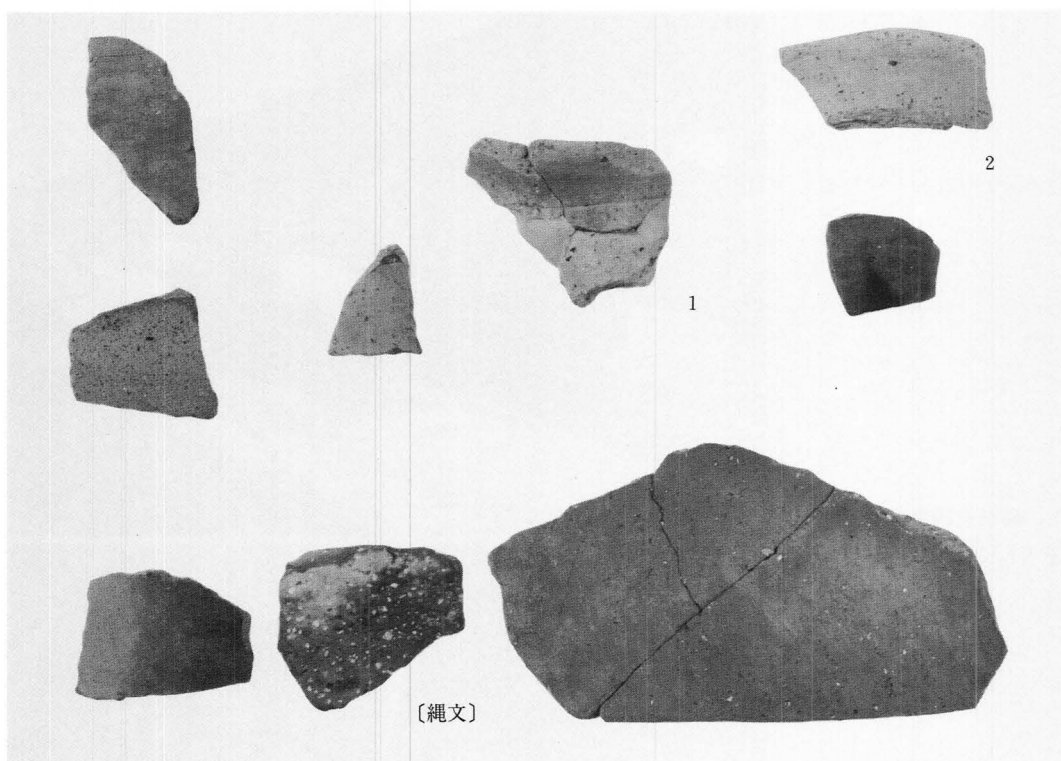


2. 開削部断面

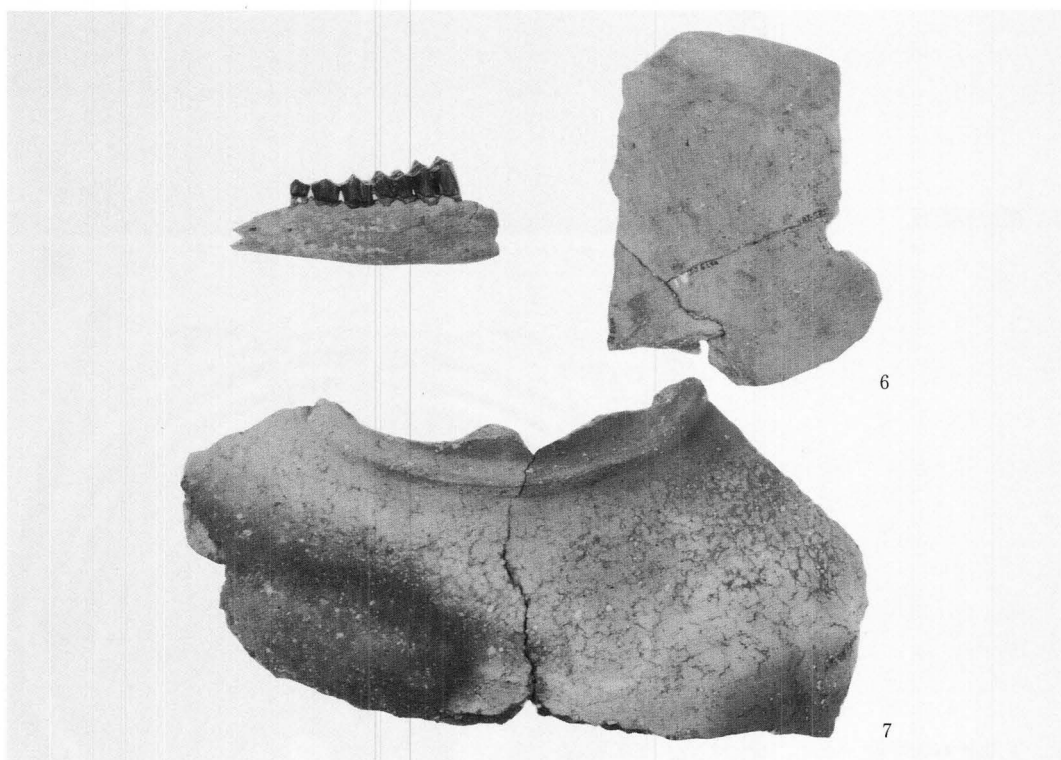


3. F地区調査風景

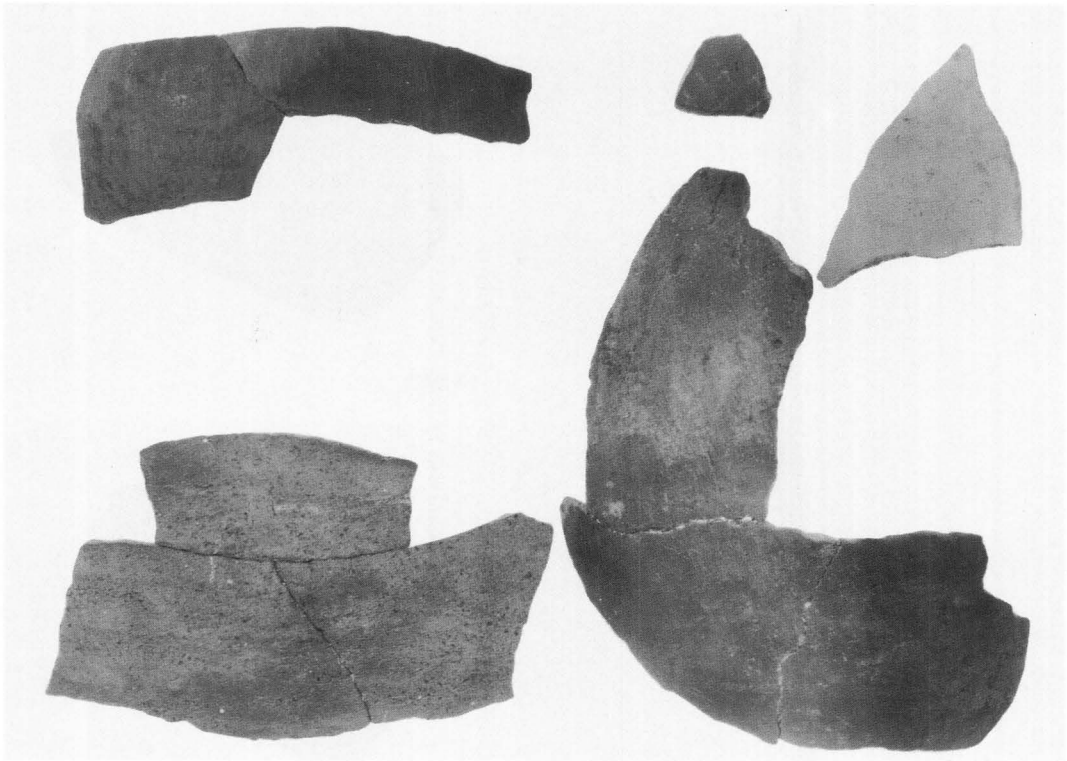




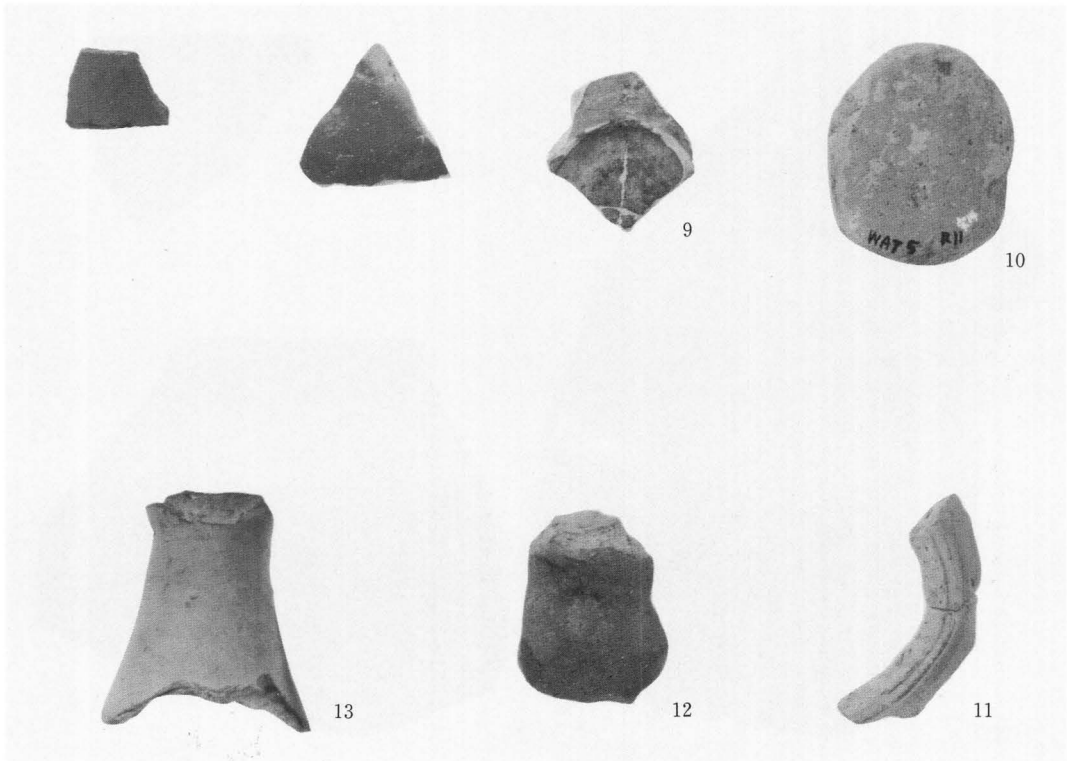
1. A地区出土遺物



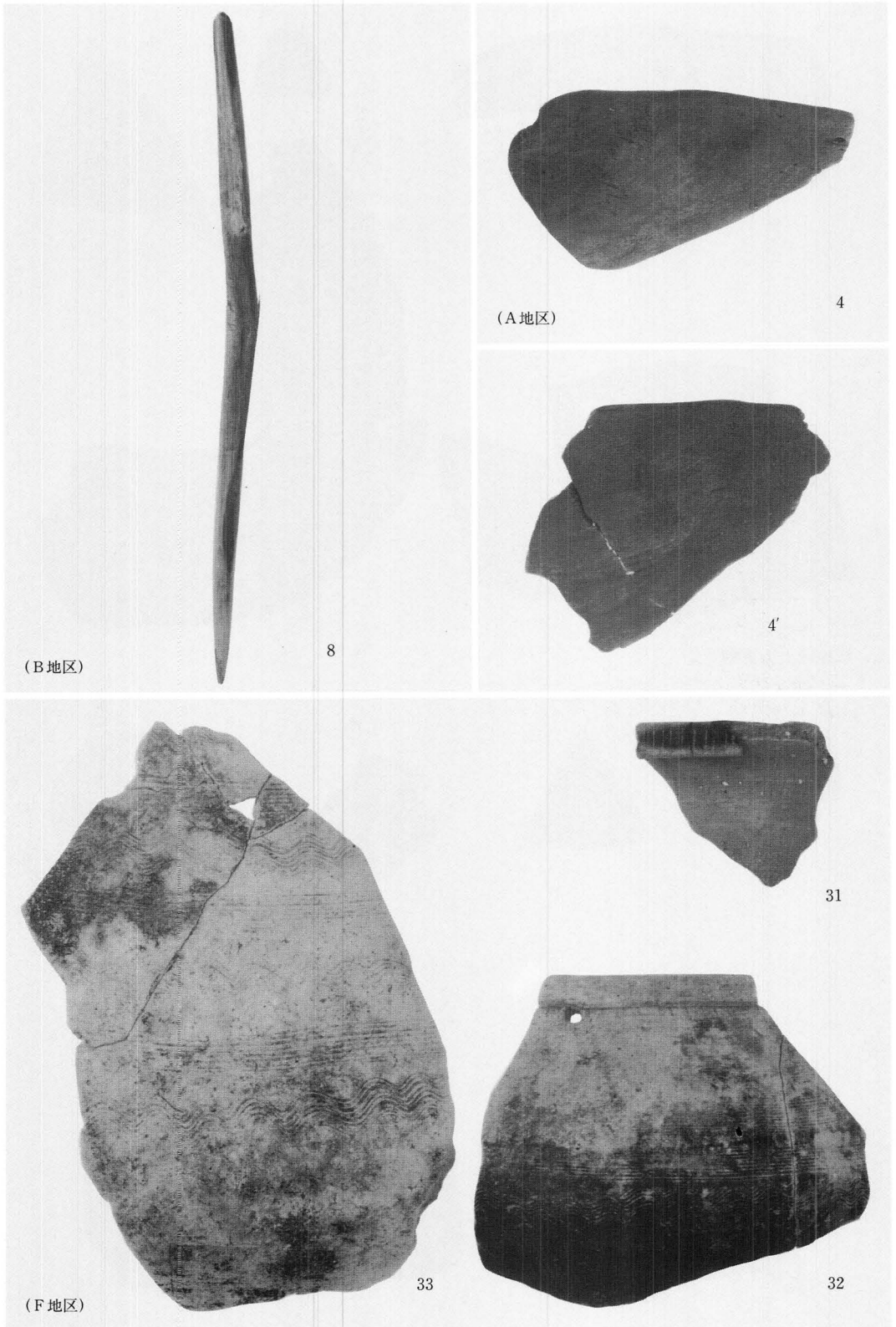
2. B地区出土遺物



1. C地区出土遺物



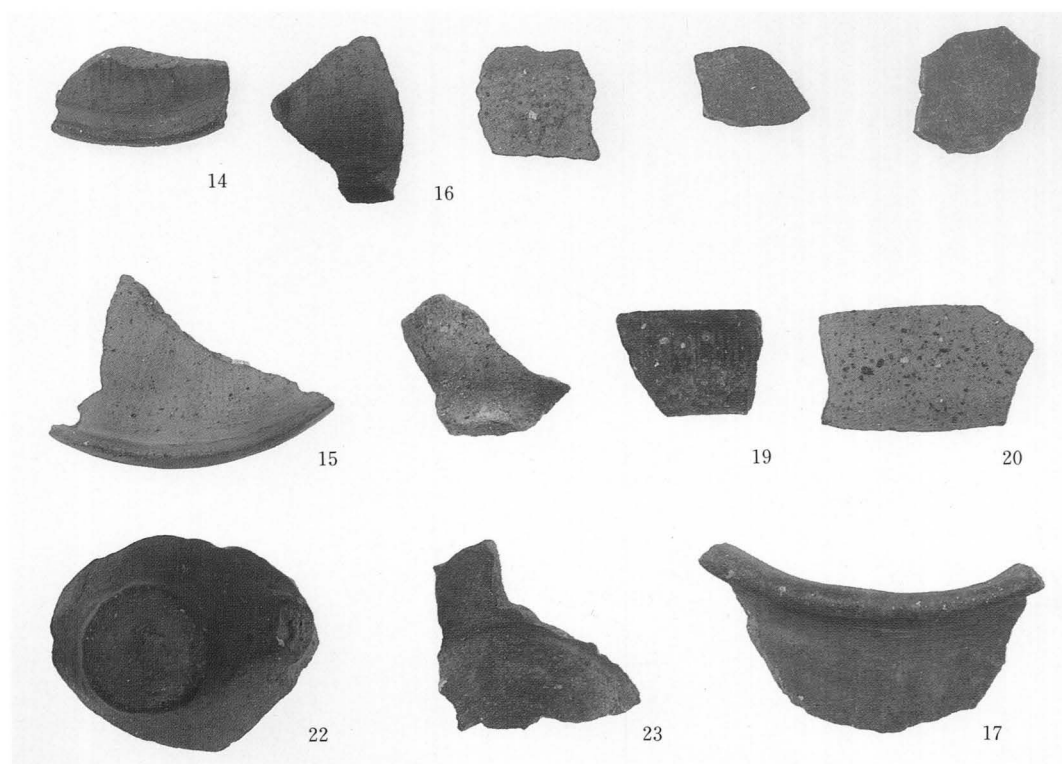
2. C地区出土遺物



A. B. F地区出土遺物



1. C地区出土遺物



2. C地区出土遺物

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

—1993年度—

1995年3月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会
東大阪市荒川3-28-21
TEL 06-736-0346
印刷 株式会社ドウミ印刷広研社